

桑原遺跡

—安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査—

大阪府教育委員会

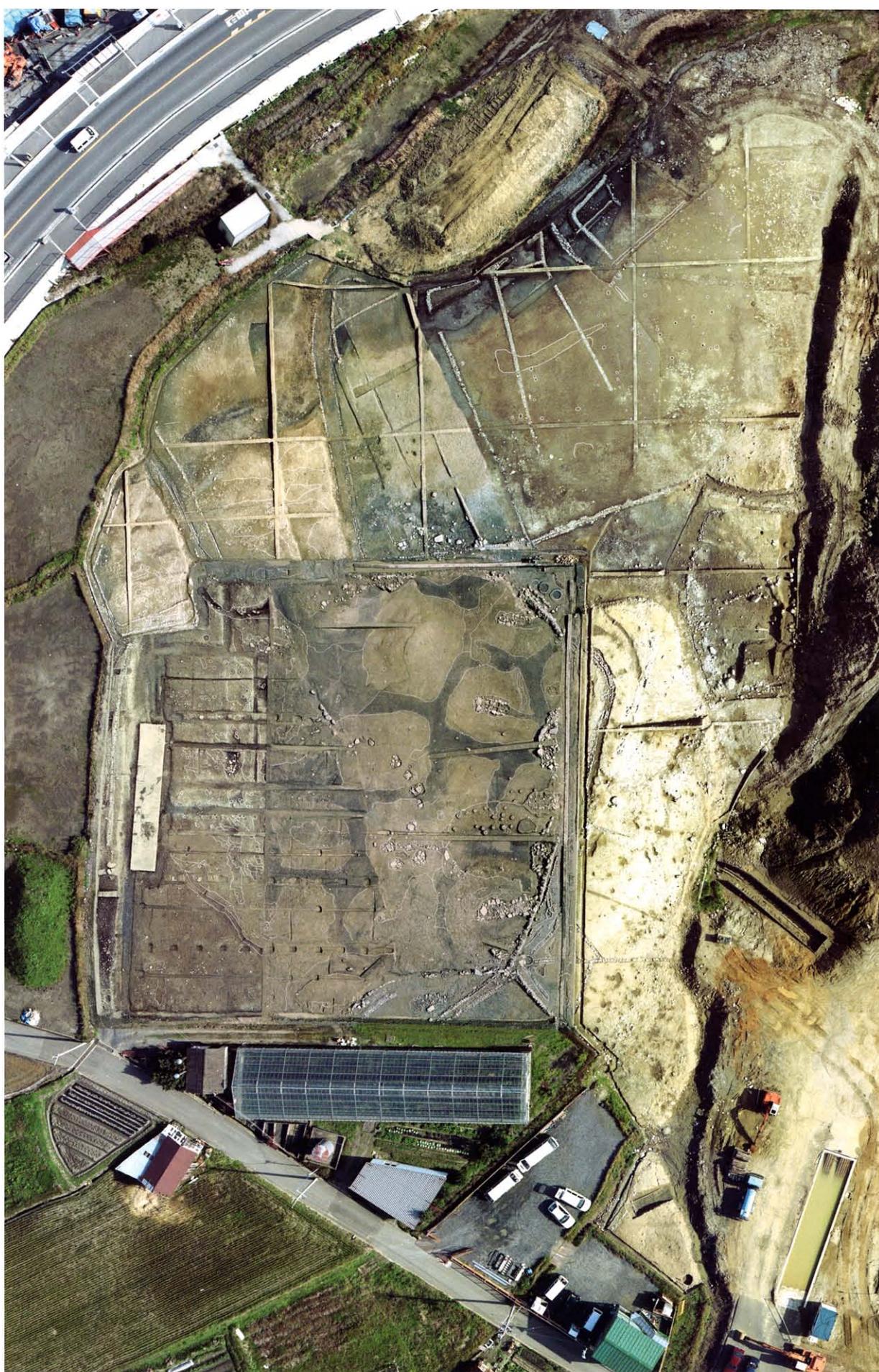
桑原遺跡 (正誤表)

		誤	正
目次 2 ページ	下から 1・2 行目	写真図版 報告書抄録	→報告書抄録 <u>写真図版</u>
7 ページ	16 行目	…図 4 に図化した	→図 2 に図化した
13・14 ページ	図 16		
X=126500, Y=39900 付近の遺構名		暗渠 23	→暗渠 3
17 ページ	表 3 C 3 号墳耳環状 銀小 3 点		→銀小 1 点
24 ページ	4 行目	(巻頭図版 4 上段、図版 32・33)	→(巻頭図版 4 下段、図版 39・40)
	6 行目	(図版 12 中段)	→(図版 11 上段)
25 ページ	(注 3)	耳環の <u>法量等</u> の詳細に…	→耳環の詳細に…
	(注 4)	…第 10 章 図 48…	→…第 11 章 図 48…
	下から 3 行目	幅 108cm、高さは 45cm	→幅約 43cm、高さは約 25cm
26 ページ	7 行目	中央部分に径 14cm の円孔	→中央部分に径 6.4cm の円孔
	15 行目	また幅は 108cm であり、 棺身部分では 72cm	→また幅は約 43cm であり、 →棺身部分では約 29cm
	16 行目	脚部を含む全高は 98cm	→脚部を含む全高は約 39cm
	26 行目	脚は径 23～27cm、高さは 23cm	→脚は径 8.6～12.4cm、高さは約 10cm
28 ページ	下から 9 行目	(図 10・38)	→(図 11・38)
31 ページ	下から 5 行目	…2 枚重ね磚…	→…2 枚重ねた磚…
32 ページ	中段右端の方位記号	頭が途切れていて北が不明	→記号の横線、左端が北
33 ページ	7 行目	図 21 は、…	→図 20 は、…
37 ページ	下から 6・7 行目	21・22・25 の 3 点のみであり、	→21・22・25 の 3 点のみについては、
39 ページ	下から 1 行目	大甕 (図版 40-60) は、	→大甕 (図版 38-60) は、
41 ページ	11 行目	(図版 15)、	→(図版 15 下段)、
42 ページ	下から 2 行目	(図 26-1)、	→(図版 27-1)、
46 ページ	表 13 10・出土地点	B 1 号墳	→B 1 号墳 周溝
	表 13 11・出土地点	B 1 号墳	→B 1 号墳 周溝
51 ページ	2・3 行目	…(図 38-1)、	→…(図 37-1)、
	5 行目	・甕 8 が…	→・土師器甕 8 が…
57 ページ	下から 1 行目	やや時期が下って形	→やや時期が下って形成されたと考える。(小川)
67 ページ	2・3 行目	密集されて築造…	→密集して築造…
	13 行目	…立地条件 <u>立地条件</u> も良い。	→…立地条件も良い。
	15 行目	…先行する <u>る</u> B 2 号墳…	→…先行する B 2 号墳…
77 ページ	下から 1 行目	(カラー図版 4)…	→(巻頭図版 5)…
79 ページ	9 行目	…the medieval gullies…	→…the medieval gullies…
	下から 16 行目	…can be sub divided into…	→…can be sub-divided into…
	キャプション	Kuwahara Nishi Tumulus	→Kuwano _{hara} Nishi Tumulus

桑原遺跡

—安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査—

大阪府教育委員会

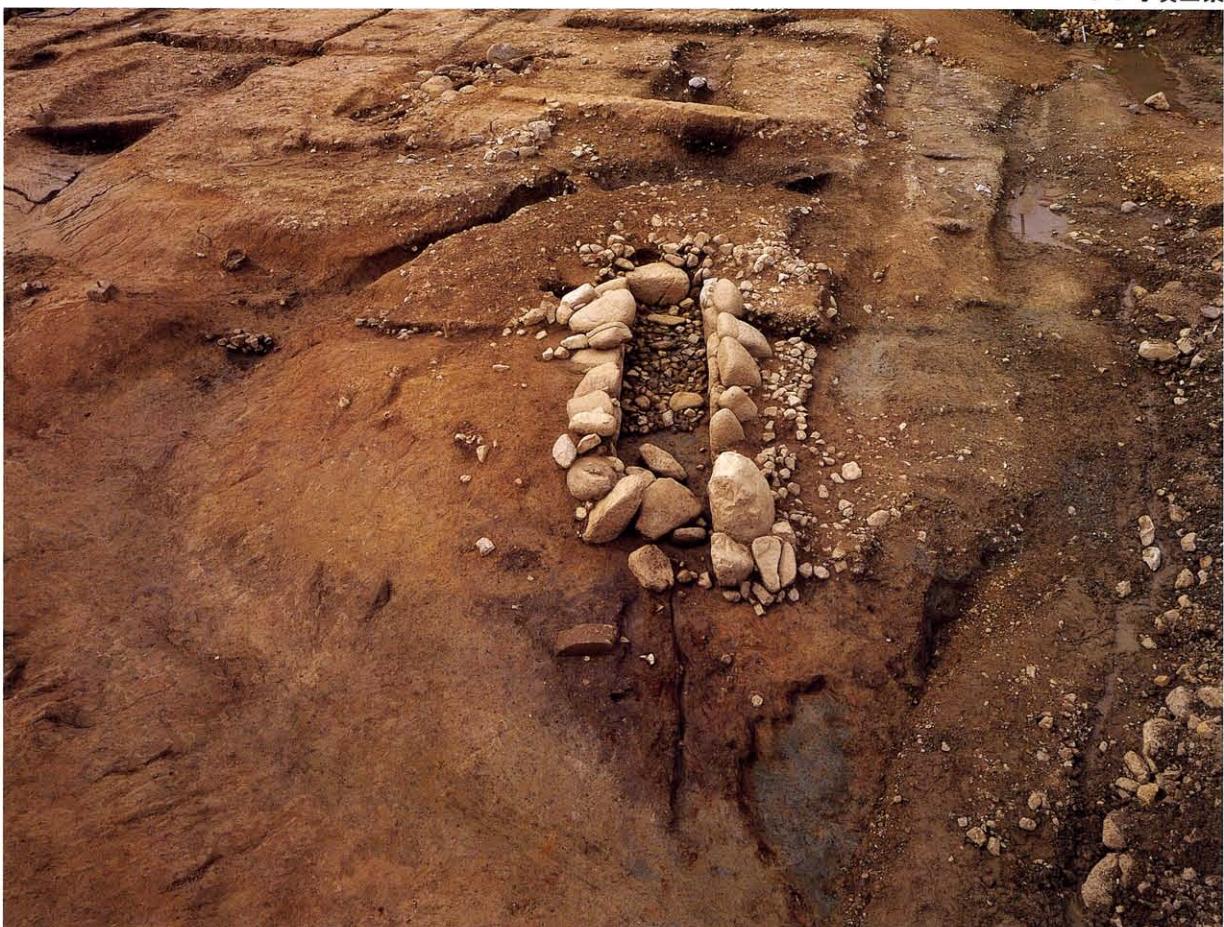






B 7号墳石室内

C 3号墳全景



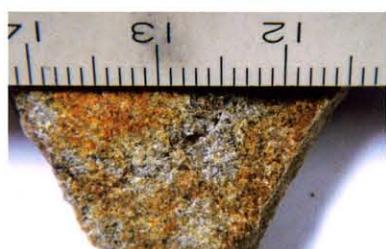


巻頭図版
5



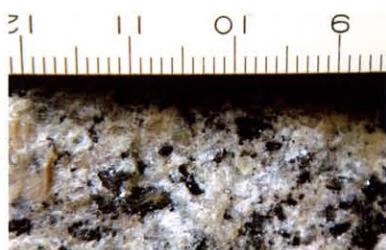
1 サンプルA 2 サンプルB

3 サンプルC 4 サンプルD



5 070716-01 6 070716-03

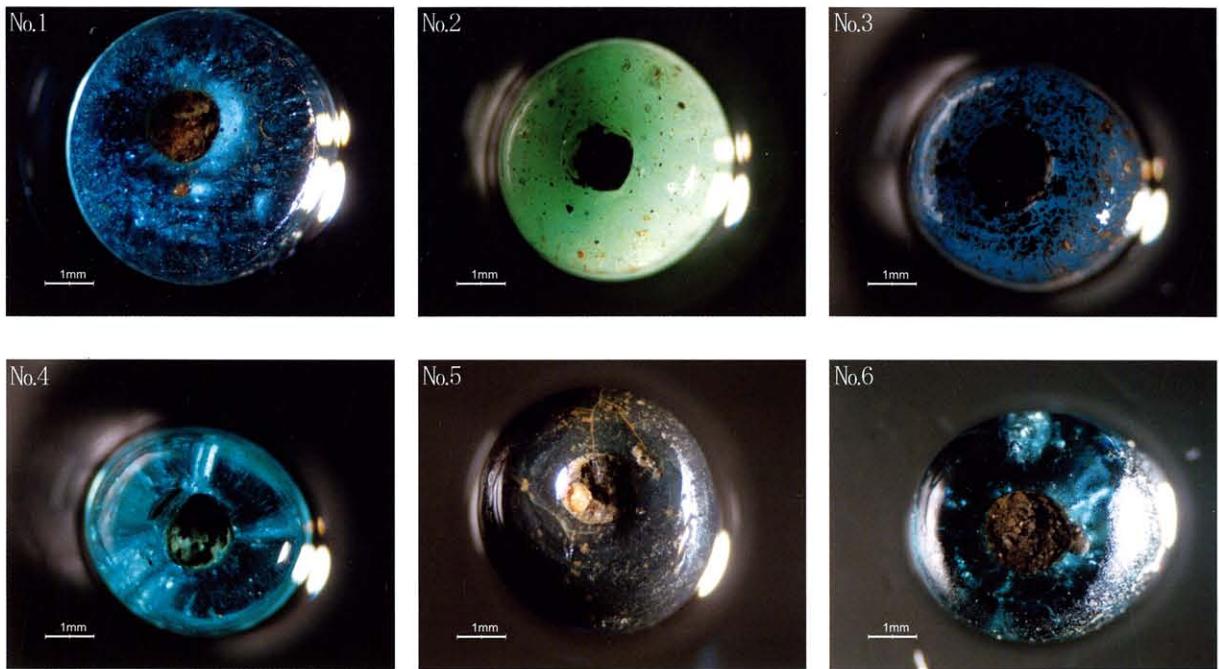
7 070716-04 8 070716-05



9 070729-01 10 070729-02

11 070729-03 12 070729-04

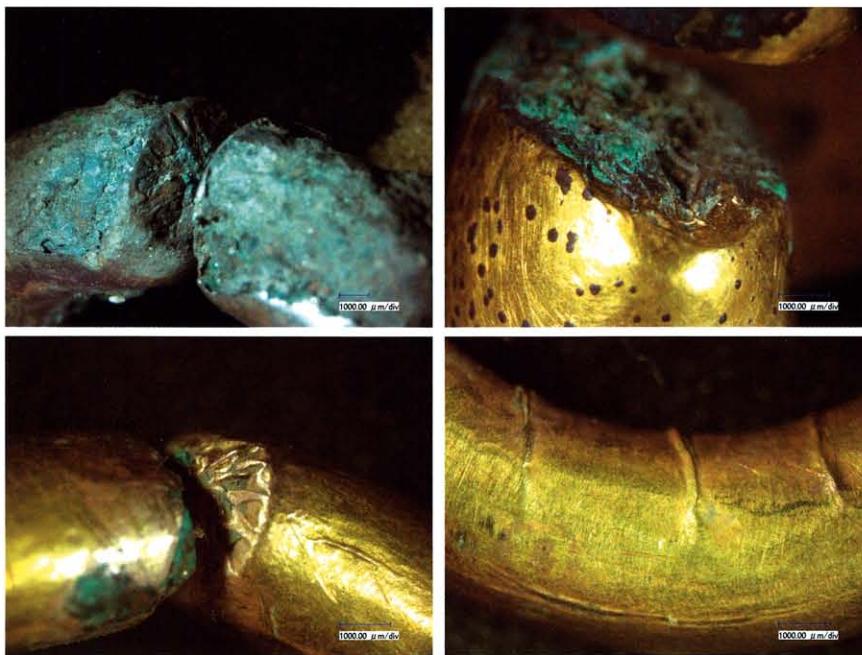




A 8号墳掻き出し出土ガラス玉実体顕微鏡写真



豊穴小石室内出土第2大臼齒



はじめに

大阪府茨木市は、市街地にあたる平地と京都へと続く山間部からなります。桑原遺跡が所在する山間部への入口は、豊かな自然に加えて、遺跡や石造物をはじめとする多くの歴史遺産にも恵まれています。しかしながら、今回の調査区に近接する安威川上流域は今まさに、安威川ダムの建設により、大きく景観を変えようとしています。

平成16年度から開始した発掘調査により、安威川が大きく屈曲する微高地に位置している桑原地区に、古墳時代終末期を中心とする古墳群と、弥生時代から中世にかけての長期間にわたる遺跡の存在とがわかりました。調査区の北東には藤原鎌足の墓といわれる阿武山古墳が国史跡として、北西には磚敷きの石室を持った初田古墳群が移築保存され見学できる施設として存在し、桑原遺跡はそれら残された7世紀の古墳が集中する特異な歴史環境に包まれています。本調査成果は、その地域性のある環境を解明するための重要な手がかりになるものと言えるでしょう。

以下にかかげる桑原遺跡の調査成果を得たことで、この地に恵まれた豊かな自然と歴史遺産が姿を変えつつあることを再確認し、幸運にも残される遺産に目を向け、地域府民のより豊かな質の高い生活環境とは何であるかということを振り返るきっかけにしていただきたいと考えております。

上記の成果を得た調査の実施にあたっては、茨木市教育委員会、安威川ダム建設事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成20年 3月

大阪府教育委員会事務局文化財保護課長

富尾 昌秀

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府都市整備部の依頼を受け、安威川ダム建設事業のうち残土処分地「桑原地区」について平成 16～18 年度に実施した、茨木市桑原所在、桑原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ 主査 一瀬和夫（平成 16～18 年度）、技師 小川裕子、特別嘱託員 堀江門也（平成 16・17 年度）が担当し、遺物整理は調査管理グループ 主査 三宅正浩、技師 藤田道子が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、茨木市教育委員会、大阪府都市整備部、安威川ダム建設事務所をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、一瀬・小川が担当し、執筆は調査担当者及び参加者が分担した。
6. 本書に掲載した遺構写真の一部及びすべての遺物写真の撮影は、有限会社 阿南写真工房に委託した。航空写真測量については平成 16 年度は玉野総合コンサルタント株式会社大阪支店、平成 17・18 年度は株式会社航空撮影センター大阪支店へ委託した。鉄製品の保存処理及び陶棺の修復については株式会社京都科学へ委託した。また、耳環の保存処理及び蛍光 X 線・土器付着顔料の蛍光 X 線成分分析については財団法人元興寺文化財研究所へ、ガラス玉の保存処理及び蛍光 X 線・琥珀玉の保存処理及び赤外線分光成分分析、炭化材の AMS 年代測定及び樹種同定については株式会社パレオ・ラボへ各自委託した。
7. 石室に使用された石材の同定には小倉徹也氏（大阪市文化財協会）、出土骨の同定には橋本裕子氏（奈良文化財研究所）のご助力を賜った。
8. 調査番号は平成 16～17 年度調査が 04040・05002、平成 17～18 年度が 05045・06001 である。
9. 本報告書は、300 部を作成し、一部あたりの単価は 1,628 円である。

目次

巻頭図版

はじめに

例言

目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 平成16年度調査区の調査成果（調査番号04040・05002）	6
第1節 検出遺構	6
第2節 出土遺物	7
第4章 中世以降の桑原遺跡	10
第1節 基本層序	10
第2節 検出遺構	10
第3節 出土遺物	15
第4節 小結：古墳の再利用及び土地改変	15
第5章 桑原西古墳群の概要	17
第1節 古墳の分布と概要	17
第2節 立地の特徴と支群	20
第6章 A i 支群の調査成果	21
第1節 A 2号墳	21
第2節 A 3号墳	23
第3節 A 4号墳	28
第4節 竪穴式小石室及び出土磚	30
第5節 小結：A i 支群について	36
第7章 A ii 支群の調査成果	37
第1節 A 7号墳	37
第2節 A 8号墳	38
第3節 A 9号墳	41
第4節 A 10号墳	41
第5節 小結：A ii 支群について	43

第8章 B支群の調査成果	45
第1節 B1号墳	45
第2節 B2号墳	46
第3節 B3号墳	47
第4節 B4号墳	47
第5節 B7号墳	49
第6節 B8号墳	50
第7節 小結：B支群について	51
第9章 C支群の調査成果	52
第1節 C1号墳	52
第2節 C2号墳及び土壙墓	54
第3節 C3号墳	55
第4節 小結：C支群について	57
第10章 桑原西古墳群以前の桑原遺跡	59
第11章 まとめ	60
第1節 桑原西A3号墳出土陶棺について	60
第2章 桑原西古墳群出土金属製品	65
第3節 桑原遺跡現地説明会アンケート調査について	66
第4節 まとめ：桑原西古墳群の形成過程と桑原遺跡の景観	67
付論1 桑原西古墳群A3号墳出土炭化材の放射性炭素年代測定	69
付論2 桑原西古墳群A3号墳出土炭化材の樹種同定	70
付論3 桑原西古墳群A8号墳出土ガラス玉の蛍光X線成分分析	71
付論4 桑原西古墳群B4号墳出土琥珀玉の赤外線分光線分分析	73
付論5 桑原西古墳群C3号墳出土土器付着顔料蛍光X線成分分析	74
付論6 桑原西古墳群出土耳環の蛍光X線成分分析	75
付論7 桑原西古墳群出土人骨について	77
付論8 桑原西古墳群の横穴式石室石材について	77
英文抄訳	79
写真図版	
報告書抄録	

桑原遺跡

第1章 調査に至る経緯

昭和42年の北摂豪雨災害を契機に、大阪府は安威川治水を目的とするダム建設を計画した。洪水調節、水道用水の供給、河川維持用水及び農業用水の確保を掲げたダム建設は、安威川上流域の様相を大きく変えるものとなる。この計画を受けて、ダム建設が今後の環境に及ぼす影響の判断材料として、当該地域及び周辺の自然・歴史・文化の現状記録のため、大阪府教育委員会文化財保護課が田代克己を担当者として昭和61年度3月に予備調査を行った。調査は、有形・民俗文化財調査、埋蔵文化財調査及び名勝・天然記念物調査の3種に渡った。

その後、その範囲を本府土木部より依頼を受けた本府教育委員会が、財団法人大阪府文化財調査研究センターに指示し、平成2年度より同センターが「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査」(注1)としてダム建設の総合的な事前調査を継続的に実施し、平成8年度に一旦の成果報告を行った。調査は、ダムに影響を受ける流域のうち、山間部を中心に茨木市車作・大岩・生保・大門寺・桑原・安威の6地区を対象としており、考古・地理・地質・生物・建造物・歴史・美術工芸品・石造物・民俗・芸能の10部門で行われ、様々な知見が得られた。

工事計画が具体化した段階で調査が必要であると判断した河川関連事業に対して、本府教育委員会が調査を逐次実施した。本書は桑原地区において新規発見した桑原遺跡の発掘調査成果を報告するものである。

桑原遺跡のある安威川ダム建設に伴う残土処分計画地である桑原地区においては、約100,000m³の圃場整備が計画された。著しい量の盛土に埋没する南半分の一部について、集落立地上の良好な地形及び古墳群に隣接し、再発掘が今後非常に困難で活用できないことを理由として、平成15年度に本府教育委員会文化財保護課主査 泉本知秀を担当者として、約30,000m³を対象に試掘調査を行った。その結果、図1に示す範囲が平成16年3月に新規発見遺跡となった(注2)。その際左岸沿いの低地部は安威川の氾濫を受け、遺跡は破壊されていたものの、主に北側の丘陵沿いでは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などの遺物が出土した。特に出土遺物が顕著であった範囲の北東端においては、鎌倉時代後半から室町時代初頭の瓦器・土師器が出土する土坑・溝を検出した。

平成16年度は、同課主査 一瀬和夫、特別嘱託員 堀江門也を担当者として、桑原遺跡とされた範囲の南東部低地部分、5180m³の発掘調査を実施した。主だった遺構としては、調査区東半に集中して存在する谷、その東の微高地に掘立柱群、調査区西半西側の未調査区を囲むように存在する環濠状溝群と土坑・掘立柱を検出した(注3)。

平成17年度は、下半期より、同課主査 一瀬和夫、技師 小川裕見子を担当者として、平成16年度調査区に囲まれるように農作用グラスハウスが存在していた遺跡の中央部北側の高台部

分 3880m²の調査を実施した。この調査では、前年度調査区と同様の掘立柱や溝の遺構に加え、古墳時代終末期、7世紀を中心とする群集墳を発見した。この調査は平成 18 年度上半期まで継続し、下半期に検出遺構から得た資料及び出土遺物の整理作業を行った。平成 18 年 4 月 22 日には現地説明会を行い、約 900 人の来場者に調査経過を公開した。

また、2008年2月14日現在の大坂府文化財情報閲覧システム（注4）において、調査地から古墳を検出する以前より、調査地の東側に急上昇する尾根に「桑原古墳群」という名称の遺跡が存在した。その桑原古墳群と、新規発見の桑原遺跡内の群集墳との関係を確認するために、平成18年度上半期に3回にわたって周辺の踏査を行った。内1回は、調査担当者の他に茨木市教育委員会職員 宮脇薫氏とかつての桑原古墳群の状況を知る免山篤氏同行のもと、調査所見の検討を行った。昭和47年1月23日に調査実施時の遺跡台帳によると4基の存在は確認されている。すべては山腹に立地する円墳で、墳丘は半壊、内1基に関しては石室が全壊という、当時の状況の所見も記録されている（注5）。しかしながらマーキングされた位置において、埋蔵文化財包蔵地図に記された7基の古墳に該当する古墳もしくは古墳状隆起を確認することはできなかった。一帯は、かなりの急斜面で、薄い表土の直下は岩盤であり、古墳を築造するためには困難な地形である。尾根の方角からも平野部を望めるような位置ではなく、通常古墳が築造される地形とは一致しない。調査所見の検討の結果、地図上の桑原古墳群は実際よりもやや西にずれた位置に存在しており、現在は安威川ダム建設関連事業の道路付け替え工事によつ



図1 桑原遺跡調査位置図

て削平、消失した可能性が高い。

この検討の結果、推定される桑原古墳群の原位置は、現在マーキングされている桑原西古墳群の西約 80 m 付近に位置すると推定する。これは、桑原遺跡に繋がる尾根とは別の方向にのびる尾根上にあたり、そこで一旦途切れることから、新規発見の群集墳は別の古墳群とみなすべきと判断した(図 1)。また、調査区の北東にある丘陵の現況においての裾部付近に 3カ所の古墳状隆起は存在する。調査区との距離や尾根に対する分布状況からも、こちらは同一の遺跡であると考える。以上の事項か

ら、桑原遺跡内に新しく発見された南北 80m、東西 70m に密集分布する古墳時代終末期の古墳範囲、及び現・桑原古墳群の西南方向約 100 m の辺りに存在する古墳状隆起を合わせて、桑原西古墳群と称したい。

調査が終了した現在、桑原西古墳群の主要地方道茨木亀岡線以南は、ダム工事によって排出される残土の下に埋没した。工事及び続く圃場整備終了後には、この地に重要な遺跡が眠ることを示す案内板を設置することを依頼している。調査地のすぐ北に新しく建設された桑原地区の公民館では、地元自治会の方々のご要望によって本府教育委員会及び安威川ダム建設事務所が提供した桑原遺跡の発掘調査や現地説明会の様子の写真が展示されており、遺跡の存在と調査成果の周知を行っている。

(一瀬 和夫)

(注 1) 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1997『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書』
財団法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第9集

(注 2) 大阪府教育委員会 2005『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』8

(注 3) 大阪府教育委員会 2006『桑原遺跡発掘調査概要』

(注 4) http://116900sv001/osk_iseki/info/soloview.asp?mode=mb&ID=9276&NO=0 (2008 年)

(注 5) 昭和 39 年刊行の『茨木市の文化財』第 3 集 にも記述があるとされているが、現在その資料を確認することはできなかった。

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

桑原地区は大阪府茨木市の山間部への入口にあたる。京都府亀岡市に源を発し大阪府茨木市を流れる安威川は、山間部から平野の低位段丘部に抜ける途中で S 字に大きく蛇行する。この蛇行部において、西側に張り出す微高地に桑原遺跡は位置する（図 1）。遺跡の西北から南側にかけての安威川を挟んだ対岸は、大阪層群から構成される丘陵部である（注 1）。東の高槻市側は、傾斜の急な丘陵斜面をもつ阿武山が存在する。この阿武山の南から対岸の丘陵部裾の安威 4 丁目付近にかけては活断層が存在する。桑原地区より上流にあたる生保地区でも安威川は大きく蛇行しており、これは付近に平行して 3 本存在する活断層の影響をうけたものであり（注 2）、今回の調査区を囲む地区における流路の蛇行も同様の起源による可能性がある。

このカーブの内側に広がる現氾濫原面は、明治期には既にまとまった範囲で水田灌漑がおこなわれていた。細分すると、崖の上部は 1 万年前以降に形成された新しい段丘面（完新世段丘面）であるが、近年存在するといわれている弥生時代前期末から中期初頭に段丘化した I 面と古代末から中世初頭に段丘化した II 面の 2 種が存在し、当該地区はどちらにあたるか明らかでないとされている（注 2）。しかしながら今回の調査では、弥生・庄内式土器や石鏸、破鏡などの出土から明らかなように、弥生時代以降には継続した遺跡が存在することを確認した（注 3）。この結果より、当該地区は I 面上に位置していると言える。

また、調査区東側から北側にかけての尾根及び対岸の西側から北側にかけての生保・大岩地区は共に岩盤が多く露出し、発掘調査で検出した古墳の石室を築造するにあたって、豊富な石材に恵まれた地域であると言える（注 4）。（小川 裕見子）

（注 1）宮地良典・楠利夫・武藏野實・田結庄良昭・井本伸広 2005『京都西南部地域の地質 地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』産総研地質調査総合センター

（注 2）財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1997『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書』財団法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第 9 集

（注 3）ある程度の所見が得られたので下部への保護ため、下層の調査は行っていない。そのため、下層遺構及び遺構面を検出していないが、遺物の存在から示唆されるように遺構面は存在する。

（注 4）当該地域の岩体については、後述の付論 8・桑原遺跡の横穴式石室石材についての項を参照されたい。

第2節 歴史的環境

桑原遺跡の周辺には、数多くの遺跡が存在する。高槻市側へ急上昇する遺跡の東側にある丘陵頂部付近には 7 世紀末の阿武山古墳があり、その同じ丘陵の南斜面は 6 世紀を中心とした塚原古墳群が占めている。この古墳は昭和 9 年に京都帝国大学阿武山地震観測所が工事を行った際に偶然発見された。2 度に渡って発掘調査が実施され、それらの報告によると（注 1）、磚で覆われ漆喰が塗られた石室を埋葬施設とし、内部には大小のガラス玉や金糸などが副葬品された夾紵棺が納められていた。被葬者は身分の高い人物であると考えられ、藤原鎌足の墓である可能性も未

だに議論されている（注2）。安威川を挟んだ西側の対岸、やや上流にも7世紀の磚敷きの両袖横穴式石室を持つ初田古墳群があり、この遺跡は飛鳥時代前後の古墳に囲まれた特異な歴史的環境にあることがわかる。安威川の南側の対岸には、長ヶ淵古墳群、安威古墳群などやや時代を遡る古墳が存在する（図1）。

阿武山古墳と初田古墳群は古墳の築造年代が重なり、埋葬施設の一部に磚を使用していること、また、そこで使用されている磚の法量や長細い形態など共通点が多い（注3）。塚原古墳群はA～T支群に及ぶ大規模な群集墳である（注4）。桑原西古墳群とは群が形成されている斜面が異なるが、その塚原古墳群が存在する南斜面上で最も桑原側に近く、阿武山古墳のすぐ南に位置するN支群が造墓時期の一番新しい支群である。6世紀中葉に遡る初期に形成されたD・E・F・Gなどの支群は尾根上に位置し、桑原西古墳群とは立地条件も異なるが、7世紀に入ってから形成されたA支群は谷沿いの斜面上に形成され、比較的似た立地条件にある。

周辺の古墳群は尾根沿いを中心に形成されているにもかかわらず、今回新たに見つかった桑原西古墳群は、周辺地域の古墳では見られなかった谷斜面で密集する特徴的な分布を示している。また、谷に囲まれ制限された範囲内に形成されたためか、周溝を共有して造られている密集度合いも比類ないものとなっている。

この一帯は、三島地方の中心部を流れる安威川沿いにあり、平野部の水源にもあたる位置にある。『日本書紀』の記述（注5）にある安閑天皇が三島行幸の際に献上された屯倉、上御野・下御野・上桑原・下桑原の地は、現在も残る字から、調査区周辺に当たるともされる（注6）。このようしたことから、当該地域の墓域は東の丘陵部にあたる史跡阿武山古墳も含め、三島地方有力氏族の墓地となっていたと考えられる。

また、桑原遺跡自体にも平安時代～中世の遺跡が存在するように、安威川のやや上流には地福寺遺跡が存在することからも、調査区周辺は豊かな水源をもとに、継続的に集落が存在し、耕作が行われていたようである。

（小川）

（注1）大阪府 1936『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書 第7輯 摂津阿武山古墓調査報告』

高槻市教育委員会 1983『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概報』

（注2）議論の詳細については、坪井清足ほか 1988『蘇った古代の木乃伊—藤原鎌足—』小学館、中村浩 1998「阿武山古墳の被葬者について」『古代文化』第50巻6号、高橋照彦 2004「阿武山古墳小考—鎌足墓の比定をめぐって—」『待兼山論叢』第38号史学篇などを参照されたい。

（注3）桑原遺跡出土の磚については本稿第6章 第4節で詳しく述べる。初田古墳群出土磚に関しては、大阪府教育委員会 2007『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡—府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う発掘調査』を参照されたい。

（注4）高槻市史編纂委員会 1973『高槻市史』

（注5）安閑紀元年閏十二月壬午条。「閏十二月己卯遡壬午、行幸於三嶋。大伴大連金村從焉。天皇使大伴大連、問良田於県主飯粒。県主飯粒慶悦無限。謹敬尽誠、仍奉獻上御野・下御野・上桑原・下桑原、併竹村之地、凡合肆拾町。」

（注6）吉田晶 1973『日本古代国家成立史論—国造制を中心として—』東京大学出版会

第3章 平成16年度調査区の調査成果（調査番号04040・05002）

第1節 検出遺構（図版1・2・6）

桑原遺跡の平成16年度下半と平成17年度上半に行った調査の主だった遺構として、調査区東半に集中する谷とその東側にある微高地上に立地する堀立柱群、西半西側の次年度調査区を囲むように存在する環濠状溝群とその範囲に集中する掘立柱がある（注1）。

1 谷

調査区北東側は丘陵に向かって、雛壇が急上昇するが、その変換線にそって幅7～10mの谷を検出した（東谷）。谷そのものは遺跡の東限となり、北東の阪急バスの「桑原橋」バス停付近へとのびていく。これは、長く西側に展開する遺跡の水源となっていたと考えられる。

谷の上層からは南北朝頃の瓦器椀・土釜が出土し、埋没年代がこれにあたる。その後は、周囲の地山の礫などで埋め、一段低くなった谷水田へと整備されていく。また、上層下では9世紀末・平安時代前半期の内面黒色土器杯や獸骨類が出土する。

この谷の埋没後、遺跡北東部の付け根部分から南中央に向けて新たな谷が開き、粗砂が被ることから巨石が押し流される土石流のようなものに見舞われたもようである（中谷）。この区間はそれ以降に、小規模な雛壇の水田ないし畑が規模を大きくしていく過程を示す耕土層が重層し、多いところでは5面は確認できる。耕地の拡大はその周囲においても見られ、地山の礫層を削平しながら、単位が大きくなる。新しい時期のものほど地目境に石組みの暗渠や石垣列といった石を多用する構造物が備わり、増加して行く傾向にある。

2 掘立柱群

そうした耕作地の削平をあまり受けなかった地点については、南東部、南東方向に舌状にのびる微高地上で掘立柱群が検出できた。一部の柱穴P2・P10からは内黒の黒色土器が出土し、少なくとも9・10世紀の平安時代前半期の建物が存在したことが分かる。

一方、北端でも掘立柱群が確認できる。これが集中する地点には黒味がかった灰褐色シルトを基調とする整地層及びその下に黒灰色粘土の覆土が地山に貼りつくように存在し、前者は土中より瓦器椀等の14世紀末・南北朝期の遺物が出土した。後者の層は、古墳・飛鳥時代に相当する。同様な整地層、覆土は調査区南西でも認めることができる。それは北側の次年度調査区に沿って東西に広がる。下層の部分は平成17年度の調査で古墳墳丘盛土であることが分かった。

3 環濠状溝群

そうした整地層が残るそれぞれの地域の外縁部に沿って数条の溝が確認できた。北端では東谷上流部が西へ屈曲する部分から南へ南北方向に少なくとも3条の溝が確認できる（溝1・2・4）。中谷の急流はこの溝群全体のくぼみに誘導されたものと考えられる。また、東谷に平行して南側に東西方向の溝3を検出した。この付近から陶棺片も出土する。

さらに、南側の整地層も平面L字形を呈する3条の溝群に囲まれるように存在し、（溝1～3）

北側の未調査区へと続く。溝1の上層では14世紀末・南北朝頃の瓦器椀が、下層では関係に近い須恵器横瓶（図2-38参照）が集中して出土した。これは、平成17年度調査で古墳に伴うものであることがわかった。下層と重なる溝群の中にある土坑1からは7世紀中～後葉・飛鳥時代の須恵器杯身が伴い、これも同様である。

4 その他の遺構

上記よりさかのぼる遺構・遺物としては、ピットP6から庄内式甕形土器の古いものが出土する他、サヌカイト剥片、石鏃の出土もある。
(一瀬)

(注1) 遺構平面図は次年度調査区と合わせて、第4章 図6において示した。

(注2) 平成16年度の調査については、小倉勝・藤井信之・富田卓見・高嶋千佳・田中真希代他、諸嬢諸氏の協力を得た。

第2節 出土遺物

平成16年度調査区から出土した主な遺物は、陶磁器・土器・瓦・木製品・骨・サヌカイト剥片及び石鏃・陶棺蓋の破片などであった。出土遺物は、1. 平安時代～中世にかけての住居・耕作地に伴うもの、2. 飛鳥時代前後のもの、3. 飛鳥時代以前のものの3つに大別することができる。

1 平安時代～中世にかけての遺物

陶磁器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土し、残りのよいものを図4に図化した。

陶磁器類は白磁、青磁、緑釉陶器を中心とする。白磁・青磁には碗が多く、中には高台付きの底部も含まれていた。緑釉陶器には碗の他、長頸壺頸部の破片が出土していた（図2-17）。瓦器はほぼすべてが椀である。土師器の主だった物には、杯、皿（暗文入りのものも含む）、小皿、甕や鉢が出土していた。その他土師質のものは、土釜、高杯及び三足土釜の脚部、炊善具の取手などがあった。黒色土器には器形を特定できるほど大きな破片はなかったが、すべて内黒である。

2 飛鳥時代前後の遺物

飛鳥時代前後の須恵器が多数出土している。杯（図2-31・32）、平瓶（図2-35）など始めとする須恵器類は、後述の次年度調査区に検出した古墳の副葬土器と年代のそう違わないものが中心であることからも、この時期の土器はほとんどが桑原西古墳群に伴う遺物であると考える。陶棺の破片も出土している。土器の中でも際立って残存状況の良いものに、2区の溝1下層より完形に近い状態で出土した横瓶（図2-38・図版7下段左）がある。溝1においての出土位置は、次年度調査区検出のA3号墳の南側である。出土位置に、A3号墳同様の焼成後の炭化した木棺片を検出したため（注1）、A3号墳に伴う遺物であると考えることができる。

3 飛鳥時代以前のもの

縄文土器と見られる胎土の粗い破片、弥生土器（主に壺型土器の底部）、庄内式甕形土器、サヌカイト剥片、サヌカイト製石鏃などが出土した（注2）。
(小川)

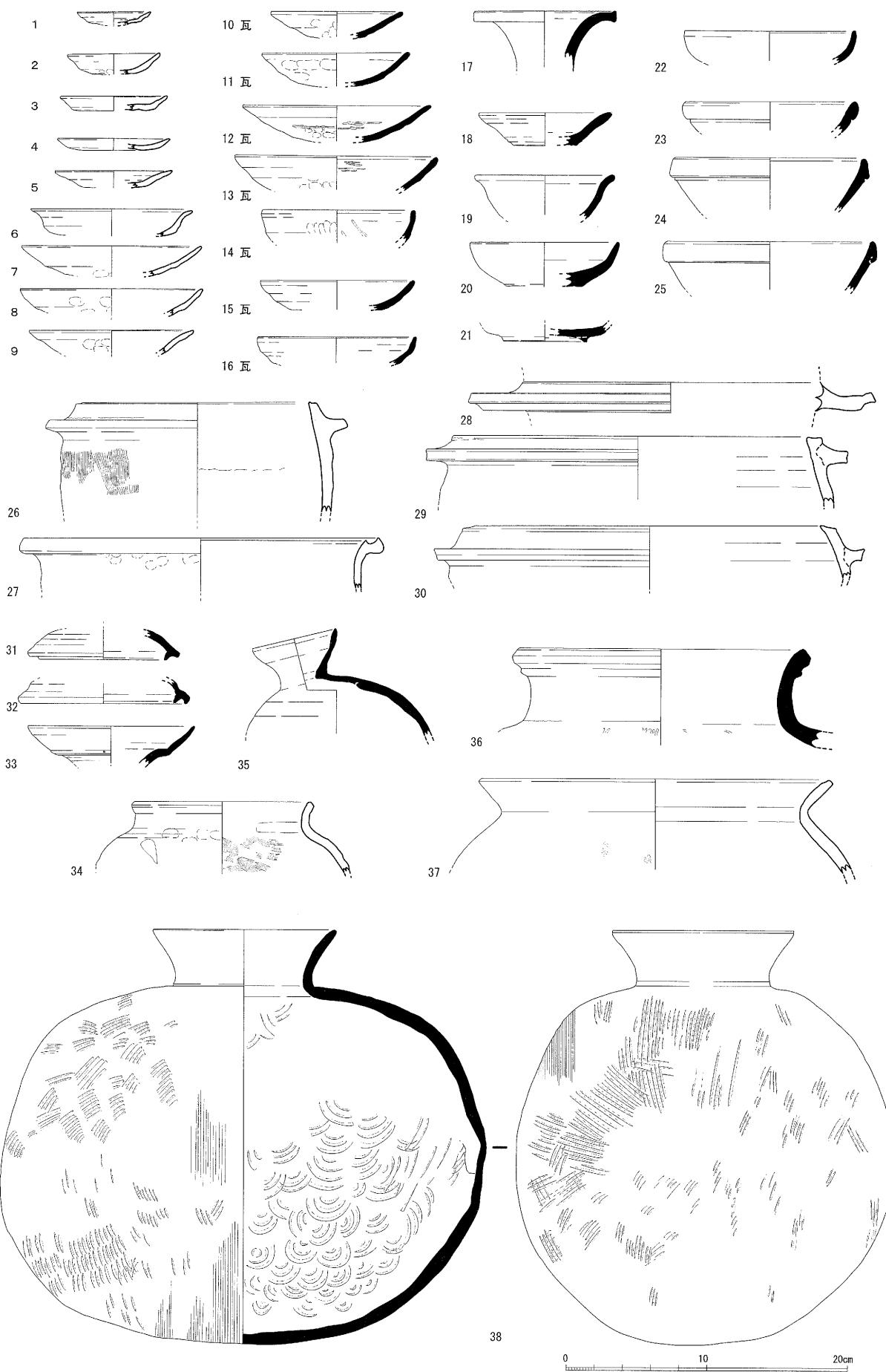


図2 平成16年度調査区出土遺物

表1 平成16年度調査区出土遺物一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	51	5区	土師器	皿	中世	(5.2)	—	1.0	ナデ	ナデ	—	やや淡い橙色	やや淡い橙色	灰白色	密	堅緻	32	—
2	59	6区-c	土師器	皿	中世	(6.6)	—	1.5	ナデ	ナデ	指頭圧痕	薄灰白褐色	薄灰白褐色	薄灰白褐色	密	—	18	—
3	29	6区-b	土師器	皿	中世	(7.6)	—	1.0	ナデ	ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	堅緻	13	—
4	47	2区	土師器	皿	中世	(7.9)	—	1.8	ナデ	ナデ	—	淡褐灰色	ピンク褐色	ピンク褐色	粗	堅緻	12	—
5	85	7区-d	土師器	皿	中世	(8.4)	—	2.2	ナデ	ナデ	—	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	密	—	27	—
6	56	6区-c	土師器	皿	古代～中世	(11.4)	—	1.9	ナデ	ナデ	—	淡灰色	淡灰褐色	灰白褐色	密	やや軟	3	—
7	14	2区-c	土師器	杯	不明	(12.6)	—	(2.2)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	密	堅緻	14	—
8	18	3区-b	土師器	杯	中世	(13.0)	—	(1.8)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	黄灰褐色	黄灰褐色	黄灰褐色	密	—	23	—
9	24	3区-b	土師器	杯	中世	(11.6)	—	(1.6)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	密	—	22	—
10	60	6区-d 谷部	瓦器	椀	中世	(9.4)	—	(1.9)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	暗灰～灰色	暗灰～灰色	黄灰白色	密	—	26	—
11	54	6区-c	瓦器	椀	中世	(10.6)	—	(2.4)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	堅緻	1	—
12	59	6区-c	瓦器	椀	中世	(13.4)	—	(2.7)	ナデ 指頭圧痕	ナデ、ミガキ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	—	2	—
13	70	7区-a	瓦器	椀	中世	(14.4)	—	(2.6)	ナデ 指頭圧痕	ナデ、ミガキ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	堅緻	8	—
14	59	6区-c	瓦器	椀	中世～近世	(10.8)	—	(2.5)	ナデ 指頭圧痕	ナデ、ミガキ	—	暗灰色	暗灰色	灰白色	密	—	17	—
15	29	6区-b	瓦器	椀	中世～近世	(11.0)	—	(2.1)	ナデ	ナデ	—	暗灰色	暗灰～灰色	灰白色	密	—	24	—
16	—	2区-c 土坑1	瓦器	椀	中世～近世	(5.7)	—	(2.0)	ナデ	ナデ	—	灰白色	やや暗い灰色	灰白色	密	堅緻	31	—
17	30	4区-b	綠釉陶器	長頸壺	古代～中世	(9.4)	—	(4.2)	ナデ	ナデ	—	明緑灰色	明緑灰色	灰白色	密	—	15	—
18	36	2区-c	綠釉陶器	椀	中世～近世	(9.2)	—	2.3	ナデ	ナデ	—	淡緑色	淡緑茶～明緑茶色	灰白褐色	密	—	11	—
19	53	6区-c	青磁	碗	中世～近世	—	—	(3.3)	ナデ	ナデ	—	乳緑色	乳緑色	乳緑色	密	堅緻	6	—
20	53	6区-c	青磁	碗	中世～近世	(10.6)	—	3.1	ナデ	ナデ	—	淡緑～明緑色	乳緑～明緑色	灰白色	密	堅緻	5	—
21	115	7区-a 谷	瓦器	碗	中世	—	(5.9)	(0.8)	ナデ	ナデ	ナデ、貼付け高台	白灰 (一部黒色)	白灰～肌色	肌色	密	良好	308	—
22	36	2区-c	白磁	碗	中世～近世	—	—	(2.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	乳灰色	乳灰色	乳灰色	密	堅緻	10	—
23	12	2区-c	白磁	碗	中世～近世	(12.0)	—	(2.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	淡乳灰色	淡乳灰色	灰白色	密	—	28	—
24	56	6区-c	白磁	碗	中世～近世	(13.4)	—	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	—	淡乳灰色	淡乳灰色	灰白色	密	堅緻	4	—
25	52	6区-c	白磁	碗	中世～近世	(14.6)	—	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	淡乳灰白色	淡乳灰白色	白色	密	堅緻	16	—
26	64	6区-c	土師器	羽釜	中世	(17.2)	—	(7.9)	ナデ、ハケ	ナデ	—	灰褐色	暗灰褐色	灰褐色	密	堅緻	9	—
27	59	6区-c	土師器	羽釜	中世	(23.6)	—	(3.7)	ナデ 指頭圧痕	ナデ	—	淡黄灰褐色	明淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	密	—	19	—
28	37	2区-d 土坑3	土師器	羽釜	中世	(21.2)	—	(2.1)	ナデ	ナデ	—	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	淡黄灰～灰色	粗	—	25	—
29	115	7区-a 谷	須恵器	羽釜	中世	(26.2)	—	(4.7)	ナデ	ナデ	—	暗褐色 (スス付着)	暗褐色	暗褐色	密	良好	312	—
30	115	7区-a 谷	須恵器	羽釜	中世	(24.8)	—	(3.8)	ナデ	ナデ	—	暗褐色(一部黒 スス付着)	暗褐色(薄)	暗褐色	密	良好	310	—
31	67	7区-a	須恵器	杯蓋	古墳～飛鳥	9.0	—	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	粗	—	7	—
32	8	2区-b	須恵器	杯蓋	古墳～飛鳥	(10.2)	—	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	—	21	—
33	105	8区-c	須恵器	壺	はぞう 古墳～壺	(11.7)	—	(2.0)	回転ナデ、 回転ケズリ	回転ナデ	—	灰色	灰色	明灰色	密	良好	311	—
34	78	2区-c 谷部	土師器	甕	古墳～飛鳥	(12.6)	—	(5.2)	ナデ 指頭圧痕	ハケ	—	灰白色褐色味	灰白褐色	灰白褐色	粗	—	30	—
35	107	8区-c	須恵器	平瓶	古墳～飛鳥	(6.1)	—	(7.5)	回転ナデ	貼付け痕	—	淡灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	313	—
36	123 125 (No.1)	溝 2区-c	須恵器	甕	古墳～飛鳥	(20.0)	—	(7.0)	回転ナデ、 カキメ	回転ナデ、 青海波文	—	淡灰～灰色	灰～淡灰色	—	密	良好	309	—
37	306 -2	土師器	甕	古墳～飛鳥	(24.6)	—	(6.2)	不明	不明	—	橙色	橙色	橙色	密	良好	307	—	
38	—	溝 (No.1)	須恵器	横瓶	古墳～飛鳥	(12.8)	—	29.5	ナデ、タタキ カキメ	ナデ、タタキ	外・カキメ	青灰色	青灰色	青灰色	密	良好	275	—

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

(注1) A 3号墳については本報告書第6章 第2節を参照されたい。

(注2) 桑原西古墳群以前の遺物は、第10章にて一部図示する。

第4章 中世以降の桑原遺跡

第1節 基本層序

平成17年度下半～18年度調査区は雑壇造成の高地部上に位置し、調査以前は水耕栽培用のグラスハウスが建っていた。傾斜面を削平し、その土を斜面の低い部分に盛っていく形の雑壇造成のため、高位置部分の遺構は損壊を受けており、現代盛土もしくは包含層はほぼ存在しなかった。そのため建物の基礎及び配管が据えられていた部分は遺構も削平されていた。全体的には、約10cmの厚さの現代に攪拌を受けた土の下に、中世の遺構面が存在する。削平が著しい高地部分に相当する調査区の北半では中世の掘立柱建物の検出遺構面と古墳周溝及び墓壙の検出面は重なり合って、ほぼ同水準において検出した。後述する調査区南端と東端に位置する谷間においては、中世に谷が埋没した後の遺構面とそれ以前の遺構面とを確認した。

第2節 検出遺構（図版3・4・6）

平成17年度下半～平成18年度上半に行った調査（05045・06001）では2面の主要な遺構面を検出した。下層で検出した古墳時代終末期の調査成果については第5章以降で報告することにし、本章では、上層で検出した古代～中世以降の遺構について報告する。主な遺構は、谷、掘立柱建物、耕作の痕跡などであった（図6）。

谷は調査区の南端の中央部、及び東端の中央部から南東部に存在した。調査区南東部の谷は前年度調査区において中谷と呼んでいた谷と同一の遺構である。東端の谷埋土からは中世の瓦器碗が出土している。南端中央部の谷は、埋没後の上層において柵列のように整列した柱穴群を検出した（図4の断面図の上層が検出面にあたる）。その下層では、直径50～100cmほどの炭が楕円形に広がるピット状に堆積する遺構を検出したが、性質は明らかではない。

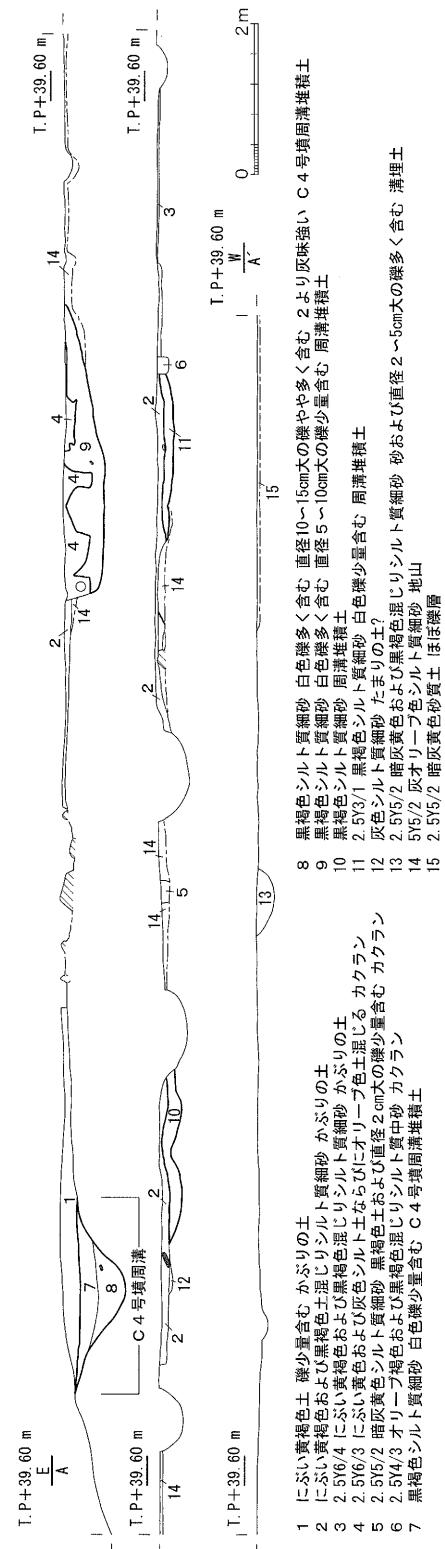


図3 平成17年度下半～18年度上半調査区 東西断面図

谷のさらに下層では、井戸状の楕円形遺構を検出した。

掘立柱建物は、調査区北半の微高地において検出した。柱穴の分布範囲より、一辺 5 m を超える比較的大きな総柱の建物であった可能性がある。しかしながら、後世の削平が著しく、建物の平面プランを確定できるほどの数の柱穴は検出できなかった。

調査区北端の高台部に 1 条、南西端の三角形をした低地部において 4 条、耕作に伴う排水施設としての石組み暗渠を検出した。南西端の 4 条の暗渠は、B 7 号墳の石室を挟んで北に 2 条、南に 2 条、各々平行したカーブを描いて存在し、一番南の暗渠 3 では、石の代わりに磚の破片が 3 点転用されていた。磚は次章で報告する古墳に伴うものを再利用したと考える。3 点の内 1 点は両面に青海波タタキが施されていた（注 1）。

1 中世における土地改変

墓域であった調査区において、居住地及び耕作地獲得のための土地改変が本格的に行われはじめたのは 10 世紀以降のことである。谷の埋土や掘立柱建物など土地改変以降の出土遺物に南北朝期の瓦器椀がある。C 1 号墳の場合のように、それ以前に遡る黒色土器椀が石室床面近くから出土していることからも、この頃までは大幅に石室へ手を加えることはなかったであろう。A 2 号墳や B 1 号墳の南側で検出したように、墳丘裾に当たる位置において石組み暗渠を伴う溝が不自然なカーブを描いて造られ、またそのカーブが墳丘裾の円形の一部と一致する。これは、溝の構築時には墳丘がまだ存在し、それを大きく損なうことを避けるために、墳丘群の裾を囲う形状のカーブを描くように溝が造られたからである。

石室内部には、空洞を埋めるように拳大から人頭大の礫が詰まっていた。石室内に多数の土器や耳環などの副葬品及び棺が残されたまま、その上から礫が詰め込まれており、古墳を破壊するという意識はなかったであろう。居住及び耕作用地獲得のための土地造成の際に、邪魔になる天井石を取り除き、空洞になった石室内部に礫を丁寧に詰めることにより地盤を固めた、という行程が復元できる。石室内部に堆積しているのは石室起源とはあまり思えない礫が大半を占めており、削平された墳丘の盛土が石室内部に堆積している様子はないため、墳丘が故意に削平された可能性も低い。このことから、中世時には、土地改変を行うにあたっても、できるだけ古墳を大幅に破壊することは避けられた痕跡がのこる。

2 近世以降における土地造成

桑原遺跡の景観に大きな変化が訪れたのは近世以降のことであろう。中世には、前述のように群集墳の起伏のある景観を維持しつつ土地利用が行われていたが、近世以降になって現状に近い大幅な雛壇造成が進んだ。基本層序の項でも述べたように、斜面の一部を削った土を低地部に盛つて平らな土地を獲得し、雛壇を形成していく造成手法であるため、雛段の段落ち直後の部分が最も著しく削平を受けている。一方で、最も遺構の残りが良いのは、削られることなく土が盛られた低地部であり、盛土には削平された地山の土が混じる。雛壇の地目境には石室の巨石を転用して石垣が造られ、第 3 章 第 1 節でも述べたように、その後は多いところでは 5 面の水田もしく

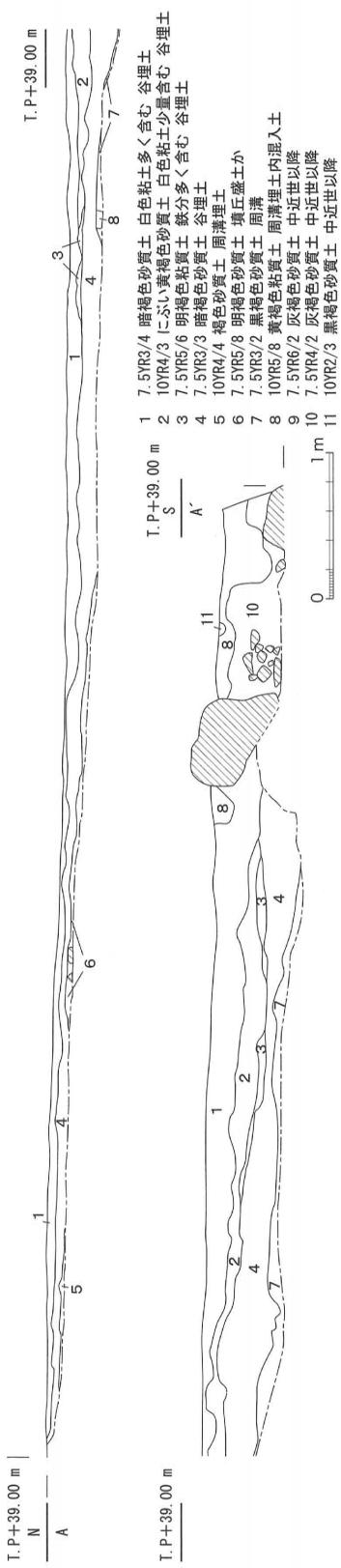


図4 調査区南端中央部の谷 南北断面図

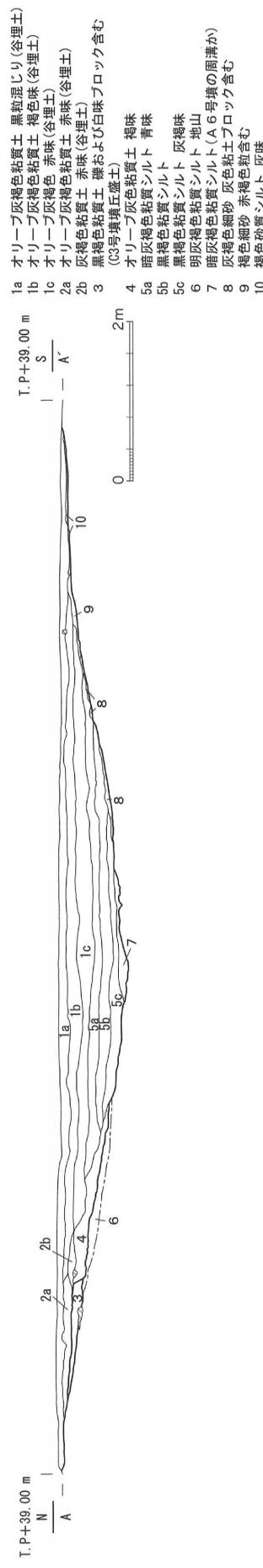


図5 調査区東端中央部の谷 南北断面図

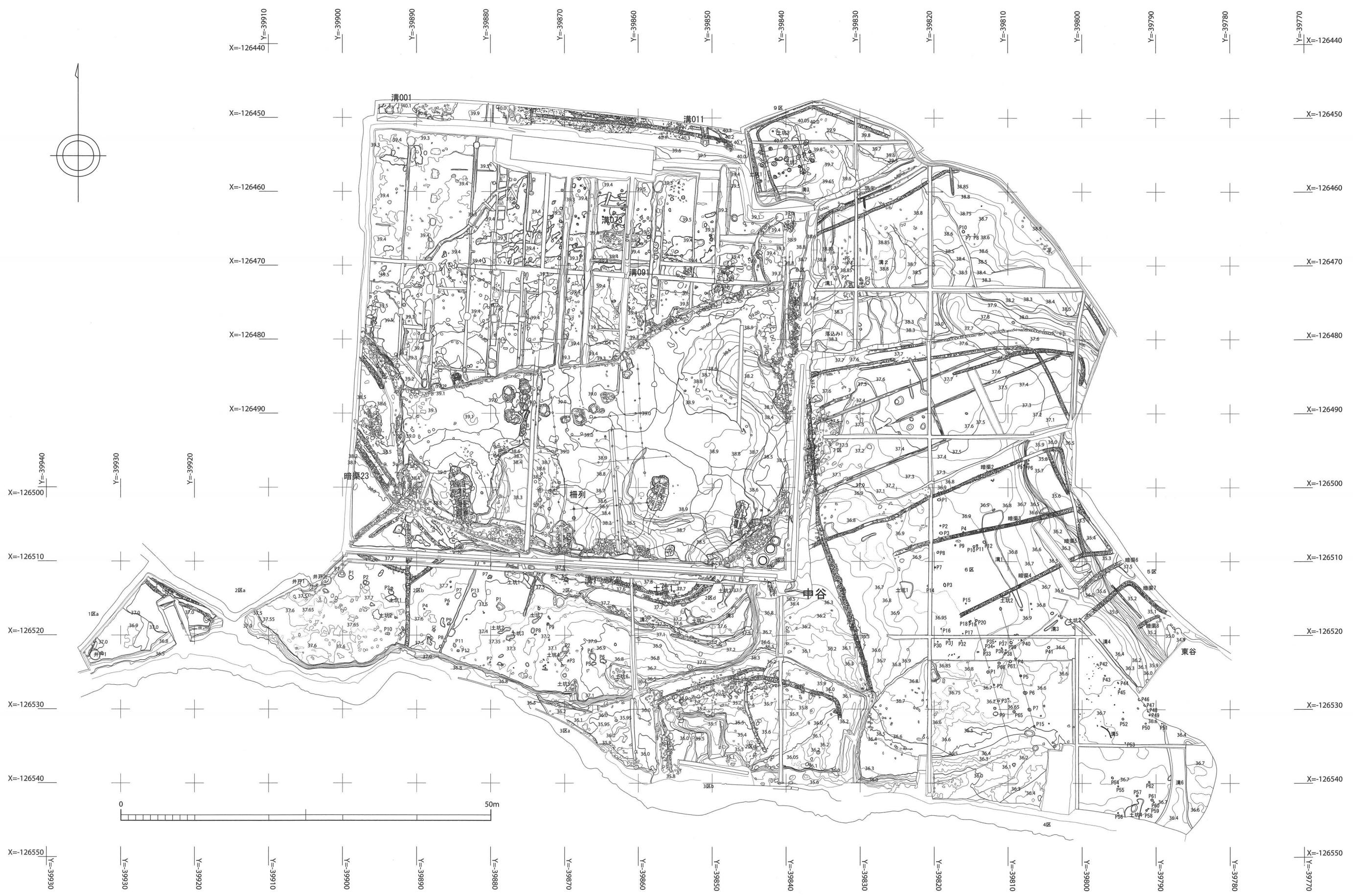


図6 桑原遺跡調査区全体 中世遺構平面図 (平成16・17・18年度)

は耕作土層の供給土となり、重なっている。

調査区南端中央部の谷において、谷埋土の10層に多くの巨石がある（図4）。これも石室の石を除去したものであるが、堆積としては比較的新しいものである。C3号墳左側壁の東側には石垣があり、その石垣より東は雑壇が1段落ちるため墳丘は著しく削平されている。その石垣周辺には石組みの構築物があり、キセルや多数の陶磁器片が出土した（図7-3・8・11）。このようなことからも、中世面をも削平する大幅な景観の変化は近世以降に行われたと判断してよいであろう。

（注1）ここで出土した磚も、豊穴式小石室内から出土した磚とともに第6章の図19に図示した。

第3節 出土遺物

平成17年度下半～平成18年度上半に出土した、桑原遺跡上層の出土遺物を報告する。主に陶磁器、土師器、須恵器が出土している。

第4節 小結：古墳の再利用及び土地改変

中世の段階では、古墳を必要以上に損なうことなく耕作を営んでいた様子が伺える。造成された段階でも、一部の古墳の奥壁石材は、頭を突き出したまま周辺で耕作をおこなっていた。

石室内や周辺からも、後世の遺物が発見されている。C1号墳の石室内では、床面にほど近いところから、9世紀代の土師器及び黒色土器の杯が出土した（注1）。石室にあたる位置の上層からは瓦器碗も出土している。B1号墳においても同様に、年代の下る土師器の杯が出土した（注2）。両古墳ともにこのような新しい土器が石室床面近くからほぼ完形で出土していることから、混入とは考え難い。追葬が継続的に行われていたかどうかは不明であるが、たとえ一旦の断絶を経ていたとしても、埋葬施設であるという認識はその頃まで継続しながら墓として再利用されたのであろう。近世以降になって、現状に雑壇造成による広域な耕地獲得が進み、大幅な土地景観の改変が行われた。雑壇に伴う石垣もこのころから築造されはじめた。

石室の大きな天井石は再利用のために持ち去られた可能性が高い。今回の調査において、石室

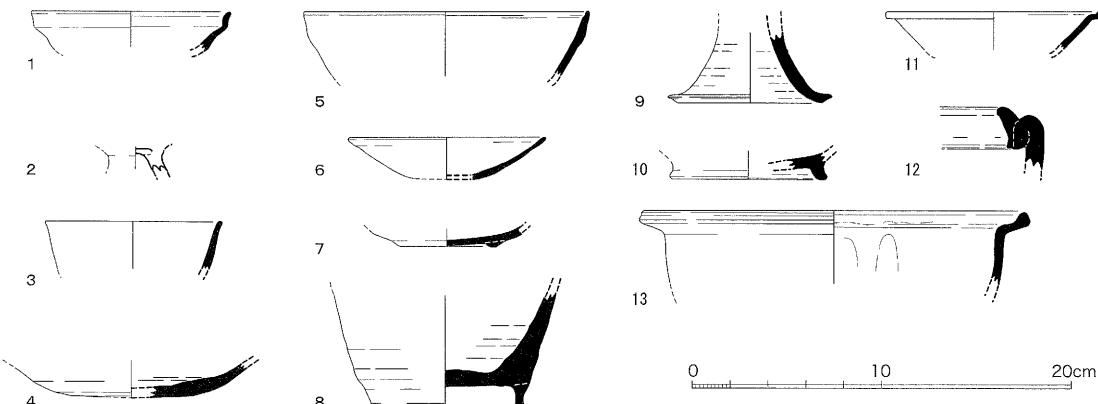


図7 平成17年度調査区上層出土遺物

表2 平成17年度調査区上層出土遺物一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	709	C3周辺	須恵器	杯身	古代～	(10.4)	—	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	—	黒灰色	灰色	—	密	良好	261	—
2	242	C1周辺	土師器	高杯?	古代～	—	—	(1.1)	ナデ	ナデ	—	橙色	明褐色	—	密	良好	237	—
3	418	C3周辺	施釉陶器?	椀	中・近世	(9.2)	—	(3.0)	ナデ	ナデ	—	褐色	褐色	—	密	良好	236	—
4	—	周溝埋土	須恵器	杯身	古墳～飛鳥	—	—	(1.6)	回転ヘラケズリ 回転ナデ	一方向ナデ 回転ナデ	—	灰白色	灰白色	—	密	良好	294	—
5	316	A5周辺	瓦器	椀	中世	(15.0)	—	(3.3)	ミガキ	ミガキ	—	黒褐色	黒褐色	—	密	良好	241	—
6	197	B7周辺	瓦器	皿	中世	(10.4)	—	(2.2)	ナデ	ナデ	—	暗灰色	暗灰色	灰白色	密	良好	223	—
7	175	B3周辺	瓦器	椀	中世	—	(5.0)	(0.9)	ミガキ	ミガキ	—	黒褐色	黒褐色	—	密	良好	243	—
8	395	C3周辺	須恵器	壺?	古代～	—	(7.6)	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白色	青灰色	暗赤褐色 ～青灰色	密	良好	224	—
9	—	周溝埋土	須恵器	高杯(脚)	古代	—	(7.7)	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	淡灰褐色	—	—	密	良好	292	—
10	—	周溝埋土	黒色土器	椀	古代～	—	(8.0)	(1.4)	ナデ	ナデ	—	白橙色	黒色	—	密	良好	295	—
11	563	C3周辺	陶器?	壺?	中・近世	(11.2)	—	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	黒褐色	密	良好	270	—
12	171	C1周辺	陶器	甕	近世	—	—	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	—	赤褐色	赤褐色	—	密	良好	239	—
13	188	B7周辺	陶器	鉢	近世	(20.2)	—	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	—	オリーブ色	水色・ オリーブ色	—	密	良好	266	—

※()内数値は反転復元後の数値及び残存高

側壁の上に乗った状態の天井石を検出した古墳は全くなかった。調査区中央部及び南端を東西に横断する、近世以降に耕作地が離壇形成された際の地目境にあたる石垣や、石室に残された石には多数の矢穴が見られ、石室の巨石は再利用されていることがわかった。しかしながら、周辺に残された巨石は、石垣に再利用されているものや調査区南端中央部及び東端の谷に落とし込まれていたものを数えても、群内の全ての石室の天井を架けるには大幅に不足する。石室内部に落とし込まれている巨石も長辺が石室の幅に満たず、天井石ではなく側壁に使われていた石材である。一般的な横穴式石室に見られるように、全ての石室の奥壁から開口部端まで天井石が隙間なく架けられていたわけではない可能性もある。

平成16年度調査区と合わせて検討の結果、桑原遺跡は平安時代～中世にかけて、居住地及び耕作地として利用されていたことがわかった。特に調査区北東から、北の中央部にかけての微高地部を居住地とし、谷間に近い低い土地を耕作地としていたようである。古墳石室の残存状況より、居住・耕作用地を獲得するために、古墳を破壊という認識なく改変した様相が観察できた。石室の側壁周辺を掘り込み、両側壁の間に割られた天井石もしくは側・奥壁の石が落とし込まれている。石室の空洞部には礫等が丁寧に投げ入れられ、地盤を固めた上に屋敷地及び耕作地として利用されている。そのため、それ以降に盗掘されずにかえって良好な状態で石室埋葬時の様子が残存していたとも考えることができる。

(小川)

(注1) 第9章 図39-11～13

(注2) 第8章 図30-5・6

第5章 桑原西古墳群の概要

第1節 古墳の分布と概要（図版3・5）

桑原遺跡では、平安時代～中世における居住地及び耕作地の下層より、古墳時代終末期の群集墳である桑原西古墳群を検出した。古墳群では、少なくとも21基（注1）の古墳を確認し、多くは周溝を共有した状態で密集して築造されていた。すべての墳丘は、横穴式石室を埋葬施設とし、内8基の石室は非常に良好な残存状況にあった。残されている横穴式石室は、どれも無袖タイプで、長め、もしくは長方形の玄室南端の開口部に直接墓道が繋がるというプランが基本型である（注2）。墓道についても、長さや幅の詳細は確定できずとも、ほとんどの古墳においてそ

表3 桑原西古墳群古墳一覧

支群	古墳番号	築造時期	被葬者数 (最低)	墳丘 形状	墳丘規模 (m)	主体部	玄室長 (m)	玄室幅 (m)	玄室 長幅比	墓道長 (m)	墓道幅 (m)	主軸	耳環	棺釘	備考
A i	A 0 ・1	—	—	円	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	平成16年度調査区
A i	A 2	桑原Ⅱ期	—	円	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	墳丘北1/3のみ残存
A i	A 3	桑原Ⅲ期	3	円	約12.90	無袖 横穴式石室	3.70+ α	1.32	—	—	N 1° E	銀大1 金小1	有 陶棺	須恵質四注式陶棺・棺釘多・人骨 須恵・土師器あるが土器少	
A i	A 4	桑原Ⅴ期	2<	円	約11.90	無袖 横穴式石室	4.92	1.20	4.10	排水溝 3.67	0.80	N 21° E	—	有	墳丘ひびつ・盛土美・床礫敷 副葬土器多・墓道よりも土器
A i	A 5	桑原Ⅰ期	—	方	約11.60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	墓道痕跡と巨石のみ
A i	A 6	桑原Ⅰ期	—	長方	約11.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	主だった主体の痕跡なし
A ii	A 7	桑原Ⅱ期	2<	方	約10.10	無袖 横穴式石室	6.00	1.04	5.77	—	—	N 21° W	金小1	無	副葬土器多・墓道よりも土器 人骨
A ii	A 8	桑原Ⅱ期	3	円	約10.00	無袖 横穴式石室	5.07	1.07	4.74	—	—	N 16° E	銀大2 (1対)	無	掻き出し 石室内土器少
A ii	A 9	桑原Ⅰ期	—	方	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	周溝のみ 主体不明
A ii	A 10	—	2<?	方	—	—	—	—	—	—	—	金小1	—	—	墳丘テラス?・バラス敷き 主体不明
B	B 1	桑原Ⅴ期	2<	円	約14.40	無袖立柱? 横穴式石室	6.70+ α	1.58	—	—	N 11° W	—	有	石室墳丘大・床バラス敷 石室内副葬土器器中心で少なめ	
B	B 2	桑原Ⅰ期	—	方	約11.50	無袖? 横穴式石室	6.52	1.20	5.43	排水溝 4.32	0.20	N 14° E	—	—	石組み排水溝・玄室は痕跡のみ 開口部左巨石を袖石とするか?
B	B 3	桑原Ⅲ期	1<	円	約12.20	袖は不明 横穴式石室	1.27+ α	1.89	—	—	N 12° E	—	有	墳丘・石室北1/3以下のみ残存 床礫敷き	
B	B 4	桑原Ⅱ期	1<	方	約10.50	無袖 横穴式石室	6.60	1.24	5.32	—	—	N 7° E	金大1 掘乱より 陶棺	無	石室は痕跡より復元 床礫敷き・焼呑管玉・陶棺破片
B	B 5	—	—	方	—	袖は不明 横穴式石室	—	—	—	—	—	—	—	—	存在不確定 主体不明
B	B 6	—	—	方	約11.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	存在不確定 主体不明
B	B 7	桑原Ⅳ期	1?	円	—	無袖 横穴式石室	4.34	0.95	4.57	1.71	0.87	N 11° W	金中2 (1対)	無	土師器一括資料・人骨 墓道須恵器甕
B	B 8	桑原Ⅰ期	1<	円	約11.80	無袖 横穴式石室	2.25+ α	1.00	—	—	—	N 6° E	—	有	石室は痕跡より復元 須恵器杯H(他より古め)
C	C 1	桑原Ⅰ期	2<	方	約8.00	無袖 横穴式石室	4.27	0.96	4.45	—	—	N 13° E	銀中2 (1対)	無 陶棺	石室内須恵器のみ 陶棺破片(石室内・周溝より)
C	C 2	桑原Ⅱ期	—	円	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	大部分が平成16年度調査区 周溝に土壇墓
C	C 3	桑原Ⅳ期	1	八角	径約10.0 一边約4.00	無袖 横穴式石室	5.45	1.20	4.54	—	1.38	N 13° W	銀小3	有	副葬土器多一部土器内ベンガラ 单葬墓であることが明確
C	C 4	桑原Ⅴ期	—	円	約9.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	大部分が平成16年度調査区 周辺から陶棺片
C	C 5	—	—	方	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	大部分が平成16年度調査区
C	土壤墓	桑原Ⅲ期	1	—	—	—	2.77	1.46	1.90	—	—	N 15° E	—	—	須恵器杯・台付長頸壺・土師器杯 など多 C 2周溝内
A i	小石室	桑原Ⅴ期	1?	—	—	豊穴式 小石室	1.38	0.45	3.07	—	—	N 1° E	銀小3	無	刀子1・大白歯 墳丘なし・磚敷き

* 築造時期に関しては、第11章 第4節における桑原西古墳群の形成過程を参照されたい。

の存在は確認することができ、中には排水溝の役割を兼ねたものもあった。これらに加えて、墳丘を持たない磚敷きの竪穴式小石室及び土壙墓、各々 1 基を検出した。

A 0・1 号墳は平成 16 年度調査時の航空写真において改めて確認した、溝や暗渠の位置、及び周辺の地形より存在の可能性が示唆される。A 2 号墳、C 4・5 号墳の大部分は平成 16 年度調査区に位置しているが、平成 17 年度調査区においても周溝の一部を明瞭に検出し、前年度調査区の溝とのつながりからも、古墳の周溝として判断できる。

A 5 号墳は周溝らしき溝の形状から、方墳であると考える。溝の周辺に散乱している巨石が石室の残骸で、平成 17 年度撮影の航空写真においても確認できる、南東の谷部に向かってのびる暗灰色の遺構が、残りが悪いものの墓道の痕跡である可能性は高い。



図 8 桑原西古墳群墳丘測量図

A 6号墳は、尾根の一番高い位置にあったため、墳丘は著しく削平されて主体の痕跡とともに消失している。しかしながら、完掘後の周溝及び推定する墳丘にかけての等高線から、長方形墳であると判断する。完全掘削後のA 4号墳墳丘の円形がいびつな形状をしているのは、先行するA 6号墳の直線的な周溝をも完掘してしまったため、後から盛られたA 4号墳の墳丘の一部を除去してしまったからである。

A 9号墳は、平成17年度調査区内でも、北側に近い微高地に位置していたため削平による損壊が著しいが、周溝内において石室石材の一部であったと見ることができる巨石と豊富な土器類が出土したことから、その存在は確認できる。周溝であろう溝も、南側は明確に検出できた。

A 10号墳は平成17年度調査区北端の高台部において、一部検出をした。しかし、大半が調査対象区外に存在しており、墳丘の南端近くであると考えるバラス敷き、溝、溝内の土器など断片的な情報を検出できたにすぎない。

B 6号墳も削平が著しく、周溝の可能性がある溝を一部検出したのみで、古墳の存在は本調査区のみでは確定しづらい。

上記で確認をした21基に含んでいないのは、A 0・1号墳、及びB 6号墳の3基である。

その他の古墳については、残存状況の良かった古墳を中心に、第6章以降にて、出土遺物とともに1基ずつ報告するが、情報の全体は表3に示す。なお、石室図については紙幅の関係で個々の状況と分析の記述を優先させ、割愛するが後日あらためて報告したい。

(注1) 主体部の痕跡が確認できておらず、削平による損壊が著しいが、周溝の痕跡や周辺の遺構などから古墳である可能性が示唆されるものが、この21基の他に3基ある。各々位置を示す際の便宜もふまえて古墳番号はあてがった。

(注2) 基本的に無袖の横穴式石室の平面プランを踏襲している石室ばかりであるが、一部袖を意識した構造のものも存在する。例えば、B 1号墳においては、立柱に準ずるような巨石が両側壁に存在する。A 4号墳は玄室に直接排水溝を兼ねた墓道が取り付けられているが、その他の多数の石室は無袖の横穴式石室ではあるが、平面プラン上では、羨道を意識して玄室が長くのびる構造に見える。各々の石室については、第6～8章で詳しく報告する。



図9 桑原西古墳群分布図

第2節 立地の特徴と支群

第2章でも述べたように、桑原西古墳群は谷沿いの微高地の斜面上に形成されている。尾根を背後に従え、3方向は谷に囲われており、その先の谷裾には水源となる川が存在する。近接する塙原古墳群のA支群及びC支群はよく似た立地にある一方で、桑原西古墳群においては群を形成する古墳の密集度合いが際立っている。ブランクとなる古墳間のわずかな空白地域及び谷間が数カ所存在することを除いては、古墳は各々の周溝を共有して密集している。古墳検出面における調査区の標高はTP+39.00～40.00m前後であり、群集墳はおよそ南北80m、東西70mの範囲に広がる。

当時の原地形にある谷を利用した墓道によって石室開口部の方向が定められ、支群に分けることができる。平成18年度の段階では（注1）①調査区中央の尾根の稜線沿いを中心に分布するA支群（0～10号）、②調査区西南に位置する谷筋からアクセスできる位置にならぶB支群（1～8号）、③調査区東側の谷筋からアクセスできる位置に並ぶC支群（1～5号）の3つに大別した。

その後に検討を重ねた結果、A支群はさらに二分することができると考えた。ここではそれらを、A i 支群とA ii 支群と呼ぶことにし、細かくは桑原西古墳群を4つの支群に分けることにする。周辺の古墳に先行して、尾根上の一一番高い場所に造られているA 6号墳が、A i・A ii両支群の間に位置し、この長方形墳を中心に支群が展開していったのであろう。

調査区南の谷からアクセスが可能であり、中央の尾根沿いの南半に位置するA 0～6号墳をA i 支群、A 6号墳に向かって墓道がのび、A 6号墳を経由して東の谷からアクセスができるA 7～9号墳をA ii 支群とする。A 9号墳は後世の削平や立地条件の悪さから、古墳の全体像が明確に把握できていないが、仮にどちらも存在を認めるとすれば、このA 6号墳を経由して東の谷からアクセスがはかれるA ii 支群に属すると考える。A 10号墳については、特異な性格を多く備えているため、調査区外の北側に別支群を構成する可能性もあると考えるが、調査から得られた情報はそれを断定するには不十分であるため、ここでは立地上最も近接するA ii 支群の項で報告する。

（小川）

（注1）平成18年4月22日配布「桑原遺跡の古墳時代終末期群集墳現地説明会資料」

大阪府教育委員会 2006『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』9

第6章 A i 支群の調査成果

第1節 A 2号墳（図版6・7）

概要・墳丘及び周溝

平成17年度下半～平成18年度調査区（以降は調査区と省略する）において、南端の東側において検出した。墳丘の南約3分の2は消失しており、墳丘北側の周溝と墳丘の一部のみが残存していた。平成16年度調査区において、溝1として検出した遺構の東端のカーブはA 2号墳の周溝の南側に沿っている（注1）。当初、残存している墳丘上に土壙を検出したため、主体の痕跡の可能性を考えて掘削をしたところ、主体の痕跡ではなく、後世、おそらく中世の土坑であったことを確認した。しかしながら、土坑完掘後の底では石の抜き取り穴らしき土坑を確認できた。このことより、主体部は、同古墳群内の他の古墳と同様に横穴式石室であったことがわかる。同古墳群内の円墳に関しては、横穴式石室の奥壁が墳丘北側の墳丘裾よりも比較的離れた位置にあるが（注2）、A 2号墳もC 1号墳並に墳丘が小さく、石室奥壁が墳丘の北側裾に近かった可能性がある。

周溝は、明瞭で比較的深く、U字形の底部を持つ。周溝断面（図11）より、A 4号墳に先行して築造されたことがわかる。周溝埋土も隣接する古墳とは異なり、やや茶色味がかった黒で、

粘度が低くふかふかとした状態であった。周溝内のちょうど推定主体部の背面にあたる位置から土師質の長胴甕が出土した（図11）。

出土遺物

A 2号墳に関連する出土遺物は、周溝内から出土したものばかりである。図10-1の須恵器杯G蓋はつまみが欠損している。このような例はA 8号墳においても多数出土した。6の口縁部と7の体部との間に直接の接合関係は確認できないが、同一個体で平瓶とな

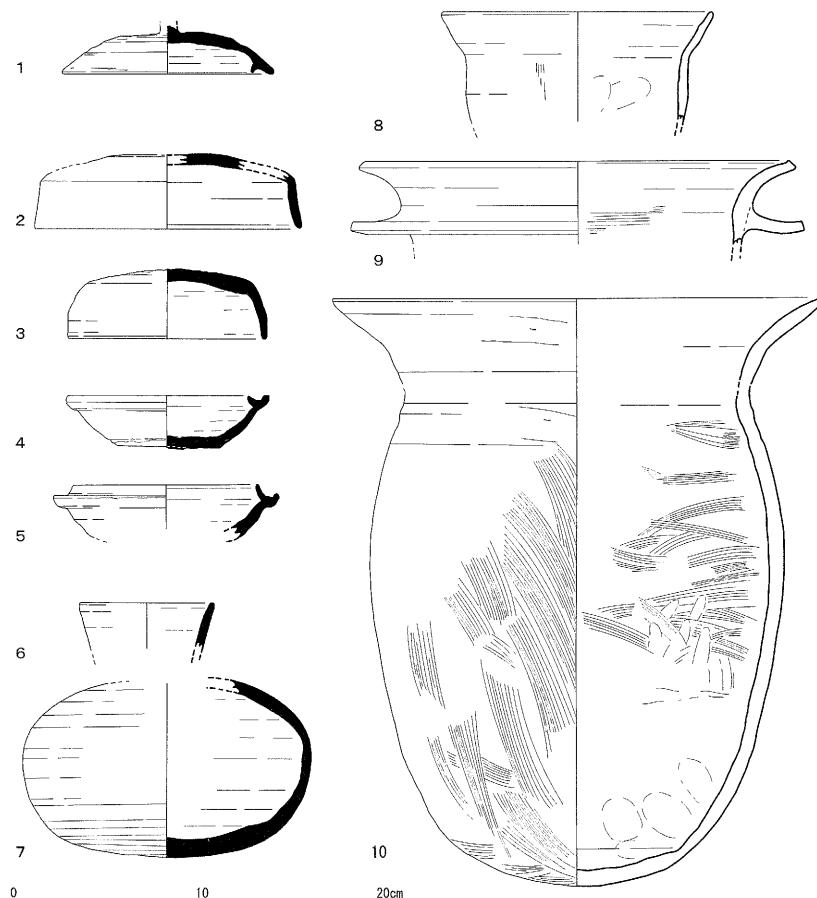


図10 A 2号墳周溝出土土器

る可能性がある。長胴甕 10 は図 11 の出土状況図のものである。底部の内側に上半部全てが入り込むようにして崩れた状態で出土した。内外面とも密にハケが施された暗赤褐色の体部にススが付着し、ややすばまったく頸部の上に急激に開く口縁が取り付く。

(注 1) 卷頭図版 1・図 6 調査区全体遺構平面図参照。

(注 2) 石室の残存状況の良好なものを観察した結果、円

墳については大半の場合、約 4 m の距離がある。

方墳の場合は、墳丘の端近くまで石室の奥壁がきており、墳丘北側裾から約 1.5 ~ 3 m の距離しか

ない。

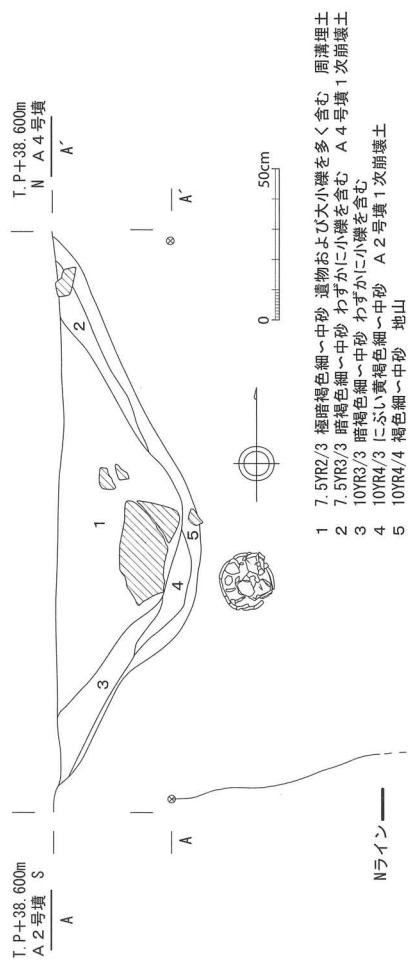


図 11 A 2号墳周溝断面・長胴甕出土状況図

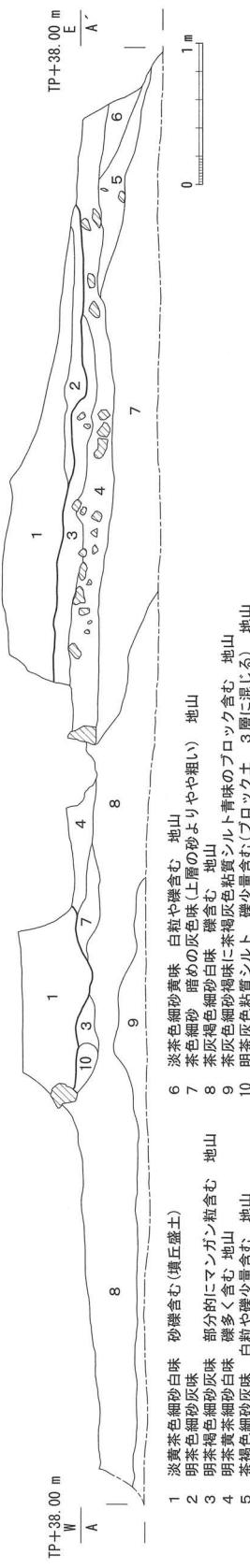


図 12 A 2号墳周溝断面図

表4 A 2号墳周溝出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整			色 調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	504	A2溝	須恵器	杯蓋	古墳時代	11.3	—	(2.6)	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠・ツマミ欠損	暗青灰色	暗灰色	暗灰色	密	良好	41	—
2	307	A2溝	須恵器	蓋	古墳時代	(14.0)	—	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	暗赤灰色	密	良好	250	—
3	307	A2溝	須恵器	杯蓋	古墳時代	(10.6)	—	3.6	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	不調整	淡青灰色	淡灰褐色	灰白色	粗	粗	42	—
4	524	A2溝	須恵器	杯身	古墳時代	8.8	—	2.7	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	不調整	淡青灰褐色	淡オリーブ灰褐色	暗灰～紫灰色	粗	良好	39	—
5	306	A2溝	須恵器	杯身	古墳時代	(9.9)	—	(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	—	淡青灰色	淡青灰色	オリーブ灰～紫灰色	密	良好	40	—
6	524	A2溝	須恵器	平瓶?	飛鳥時代	(7.0)	—	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	暗灰色	暗灰色	暗灰色	—	—	214	—
7	307	A2溝	須恵器	平瓶?	飛鳥時代	—	—	(9.4)	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	カキメ	淡黄橙色	淡黄橙色	淡黄橙色	密	—	213	—
8	524	A2溝	土師器	甕	飛鳥～古代	(14.2)	—	(5.7)	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	—	明黄褐色	明黄褐色	—	密	—	205	—
9	307	A2溝	土師器	羽釜	飛鳥～古代	(22.4)	—	(4.9)	ナデ	ナデ、ハケメ	—	灰色	明黄褐色	—	密	—	203	—
10	480 482 517	A2溝	土師器	長胴甕	飛鳥～古代	25.8	—	31.2	ナデ、ヘラケズリ、ハケメ	ナデ、ハケメ	外・ハケメ 内・指頭圧痕	赤褐色～黒褐色	赤褐色	赤褐色	密	良好	150	—

※()内数値は反転復元後の数値及び残存高

第2節 A 3号墳（図版7～11）

墳丘及び周溝

調査区南端の中央部において検出した、横穴式石室を伴う円墳である。墳丘の南端が削平され、石室開口部が欠損しているため、石室の全長は不明である。墳丘裾から石室奥壁までの距離は遠く、約4.5mある。削平された墳丘及び石室の断面に、破壊を受けた天井石の残骸もしくは側壁の石（注1）が崩落し、陶棺がその下敷きになっている様子が生々しく観察できた（図版7上段）。落ち込んだ巨石の上からもさらに、多くの礫が空洞を埋めるように投げ込まれていた検出状況であった。

隣接するA 4号墳とは、上層では周溝を共有しているように見えるが、両古墳の周溝間に一部、どちらの周溝にも削平を受けていない地山の高まりが残存し、2つの周溝の壁の直接な切り合い関係は観察できなかった。この2古墳の周溝はどちらも緩やかなカーブを描いた浅い溝であり、埋土の黒褐色シルト及び墳丘一次崩壊土の灰黄褐色味を帯びたシルトなど、類似した特徴をもち、築造時期の差はそれほどないであろう。

西側に隣接しているB 1号墳とは、ブランクとなる谷間を経ている。この谷間は支群分けの根拠の一つでもある。A 3号墳の周溝は石室の背面よりもやや西寄りのあたりで、途切れてしまう。B 1号墳の周溝も同様に、2古墳間の谷にぶつかる位置でとぎれ、調査区南端で同質の土が再び観察できる（図4-7層）。また、その地層から上層の谷埋土の堆積にかけては自然な堆積であり、削平を受けた様子がないため、谷は後世に掘削されたわけではなく、谷を周溝の一部として利用していたと考える。

横穴式石室及び埋葬主体

埋葬主体は横穴式石室である。奥壁は1石で1段、両側壁は2段が残存していた。最下段には、上段と比べて明らかに大きい石が使用されている。床面には川原石が敷き詰められていた。玄室開口部が破壊されているため、全長や開口部の様子は確認できなかったが、全体の3分の2以上は残存しており、袖石はない。調査区南端の墳丘断面から（図版7中段）、まず地山を掘り込ん

で石室側壁最下段の石を据え、墳丘をある程度まで盛った後、墓壙を掘り込み、さらに石を積んで石室の構築が続けられた。

石室内の埋葬主体は、棺釘と炭化した木片から復元できる木棺2基と須恵質家形四注式陶棺1基の3体であった。陶棺はほぼ完形に復元できる（巻頭図版4上段、図版32・33）。石室奥のやや西よりの区画（1.6×0.7m）において、平たい川原石が周辺より丁寧に敷き詰められており、そこが初葬の陶棺が据えられていた原位置である（図版12中段）。その南側、開口部に近づくにつれて不揃いな川原石が多くなり、隙間を埋めるように約5～7cmの大バラスが敷き詰められていた。後に陶棺は西に寄せられ、石室奥の西側と右手前に1基ずつ木棺が追葬された。まず木棺を燃やし陶棺を手前に引きずり、天井石を石室内に落とし込んで陶棺を下敷きにしたという状態が復原できる。陶棺の蓋の破片は著しく飛び散っているが、石室奥に集中して出土しており、陶棺内と推定される位置から人骨及び副葬品は出土しなかったため、石室を破壊する前に蓋は外されていたであろう。蓋はさらなる追葬の棺台に使われた可能性もある。蓋片の出土位置付近で方形と円形の栓が1点ずつ出土した。また、初葬の1基とは別個体の陶棺身の破片が出土し、1枚の板状に復元できた。出土状況より、この板は陶棺内にある遺体の下に敷かれていたと考える。

このように先行する埋葬を除去しようとする行為は、追葬時に行われたと考える。A8号墳においても、初葬に伴う副葬品はガラス玉や耳環に及ぶまで著しく掻き出された状況にあり（注2）、同様の傾向がある。

2基の木棺が炭化した木材と棺釘が石室の東半に集中して出土した。木棺にはモミ属の木材が使われていた（付論2）。その炭化した木材のAMS¹⁴C年代測定を行ったところ、645AD～670AD（68%）という結果が出た（付論1）。木棺に混じって、人骨が出土したが、部位の同定はできなかった（付論7）。

出土遺物

石室内の主な出土遺物は副葬土器、耳環及び棺釘である。副葬土器は石室の残存状況の良さにも関わらず、多くはなかった。須恵器低脚高杯、高杯の脚部、土師器杯蓋・甕（図13-2～5）は石室の奥壁近くから出土しており、石室造営後間もなく副葬されたことは確かである。土器は、裏返しや破片が散乱した状態で出土しているため断定はできないが、すべて東側に集中しているため陶棺に伴うのではなく、陶棺の直後に東側の奥に葬られたと推測できる1基目の木棺に伴う可能性が高い。須恵器杯B蓋1は開口部付近から出土した、最後の追葬時の遺物である。前者と比べると、8世紀に入ってからの新しいものである。この4点以外は周溝内もしくは周辺で出土したものである。

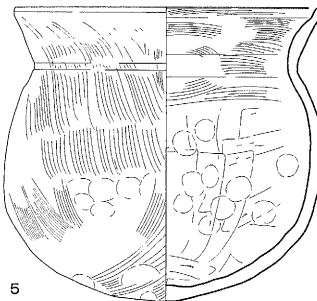
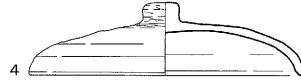
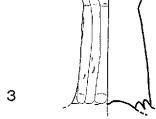
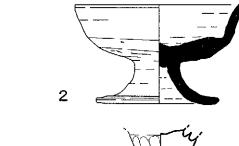
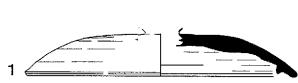
耳環は2点出土したが、法量の大きく異なる金環と銀環各1点であり、対にはならない（注3）。釘は多数出土したが、劣化が著しく、細かい破片になっていて完形の個体に復元できるものは少ない。すべて錆びの付着が著しく、鉄の部分は消失し、錆びぶくれの殻しか残されていない状態であった。図48-釘1の1点のみは、錆びぶくれを釘の頭部とするにはあまりにも大きく、鉄

表5 A3号墳出土土器一覧

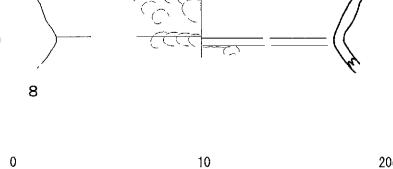
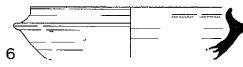
番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測 写真 番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面			
1	678	A3号墳	須恵器	杯蓋	飛鳥時代	14.4	—	(2.3)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ欠損、 ナデ	青灰色	青灰色	灰色	密	良好	232—
2	539	A3号墳	須恵器	高杯	飛鳥時代	8.8	6.5	5.2	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰～淡灰色	暗オリーブ灰 ～淡灰色	灰色	密	良好	151—
3	369	A3号墳	土師器	高杯	不明	—	—	(6.3)	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	—	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	153—
4	545	A3号墳	土師器	杯蓋	飛鳥時代	14.5	—	3.9	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	—	淡赤褐～ 明赤褐色	淡赤褐～ 明赤褐色	淡赤褐～ 明赤褐色	密	良好	263—
5	527 538 540 546	A3号墳	土師器	甕	飛鳥時代	16.2	—	15.5	ヘラケズリ、ハケメ ナデ、指頭圧痕	ハケメ、ヘラケズリ、 指頭圧痕	ツマミ貼付、 ナデ	淡赤褐色	淡橙色	淡橙色	密	良好	92—
6	257	A3号墳	須恵器	杯身	古墳時代	(10.6)	—	(2.6)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ハケ、 指頭圧痕	オリーブ灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	152—
7	257	A3号墳	須恵器	高杯	古墳時代	—	—	(1.6)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	淡灰～灰色	淡灰褐～ 暗オリーブ灰色	淡灰色	密	良好	154—
8	248	A3号墳	土師器	甕	飛鳥時代	(17.8)	—	(4.7)	ナデ	ナデ、ハケメ	—	淡赤褐～ 淡茶色	淡褐色	淡赤褐色	粗	良好	155—

※()内数値は反転復元後の数値及び残存高

石室内出土



周溝内出土



0 10 20cm

図13 A3号墳出土土器

鎌の可能性があるが、今回の調査では鉄鎌をはじめ、武器類は全く出土しておらず、ここに1点のみ武器が混在する可能性は低いと考える(注4)。

(小川)

(注1) 落ち込んでいる巨石も、各々単独で天井を架構するには、石室幅に対して充分な大きさがない。

(注2) 第7章 第2節を参照のこと。

(注3) 耳環の法量等の詳細については、本報告書付論6を参照されたい。

(注4) 耳環・釘などの金属製品は合わせて第10章 図48において図示した。

出土陶棺

須恵質家形四注式陶棺である。棺身の底部には脚が設けられている。脚部は3行で6列目までの計18本が残存していたが、蓋の法量を考えると本来は3行8列の24本が設けられていたものと考えられる。欠損部を復元後の法量は、全長は約154cmと想定され、蓋身をあわせた高さは約63cm、最大幅は約43cm、端部で幅約38cmを測る。焼成は全体に良好であるが焼き斑もあり、灰色から灰白色を呈する。

棺蓋は一方の短側面が欠損しているものの大部分は残存しており、全形を知ることができる。全長約150cm、幅108cm、高さは45cmを測る。長側面と短側面との間の稜は鋭く、底状に伸びる部分にも明瞭な稜が認められ、全体としてシャープなつくりである。棺蓋は断面に粘土接合痕が認められることから、粘土を積み上げて形作られたものと考えられる。成形には叩きが用

いられており、内面には同心円文当て具痕が残されている。内面の調整は稜付近では稜に沿ったナデが、それ以外の部分では横方向のナデが施され、同心円当て具痕を消している。一方外面上は稜部分では稜に沿ったハケが、そしてそれ以外の部分では横方向の 11 ~ 13 条 / cm の細かいハケを全面に施している。このことにより棺身外面にはタタキの痕跡が残されていないようである。庇状の部分の内側には棺身と合わせる部分が作り出されており、下端部は断面が凸字状になっている。この部分は内面に粘土を付け足し、この粘土を指でつまむようにして作り出している。また短側面には中央部分に径 14cm の円孔が外側から内側へ穿たれており、ここに栓がはめ込まれていたものと考えられる。

この孔にはめ込む栓は 2 個出土している。ひとつは円形の本体部分に断面が円形の軸部が付されている。器壁面は丁寧なナデにより仕上げられている。そしてもうひとつは、胴張り長方形の本体部分に断面が四角形の丁寧に面取りされた軸部が付されている。本体部分には緩やかな稜が作り出されており、器壁面は丁寧なナデにより仕上げられている。これらの栓はともに焼成が良好で灰色を呈している。

棺身は全体のおよそ半分程度が残存しており、棺蓋の状況や他の類例からみると、全長は約 154 cm ほどに復元することができる。また幅は 108cm であり、高さは棺身部分では 72cm、脚部を含む全高は 98cm を測る。この棺身は直方体状の箱形で長側面と短側面との間の稜も鋭く、こちらも全体的にシャープなつくりである。

棺身が粘土を積み上げて形作っているのか、それとも粘土板を組み合わせて形作っているのかは痕跡が確認できず不明である。成形には叩きが用いられており、内面には同心円当て具痕が残されている。調整は内面には一部では縦方向のナデも認められるが、全体的に横方向のナデを施し同心円文当て具痕を消している。一方外面上には横方向のナデと 7 ~ 8 条 / cm のハケを全面に施しており、底部ではナデの痕跡が多数残されている。このことにより棺身外面にはタタキの痕跡が残されていないようである。そしてこれらの調整をおこなったのちに、棺身の上端部の内側に粘土を付け足すことによって蓋の受け部を作り、棺蓋下端の断面が凸字状の部分と対応させている。この部分は横方向のナデにより仕上げられている。

脚は径 23 ~ 27cm、高さは 23cm ほどの側面が円台錐状の円筒形である。脚部の成形は粘土板を円筒状にまきつけて成形したか、粘土を巻き上げて成形したかは不明であるが、成形後に内外面ともにナデによる調整がなされている。これらの脚部に円孔が穿たれているものは認められない。これらの脚部は法量や形状に多少のばらつきが認められる。この脚部の棺身の底部への接合方法であるが、まず棺身に脚部を強く押し付け、そしてその後脚部の内側に粘土を充填してこの粘土を脚部へなでつけるとともに、外側にも周囲の粘土をなでつけて接合している。

出土陶棺（板）

出土状況でも述べたように、ほぼ関係に復元することができた陶棺のなかから出土した陶棺片である。形状から須恵質家形陶棺の破片であると考えられる。焼成は良好で灰色を呈する。

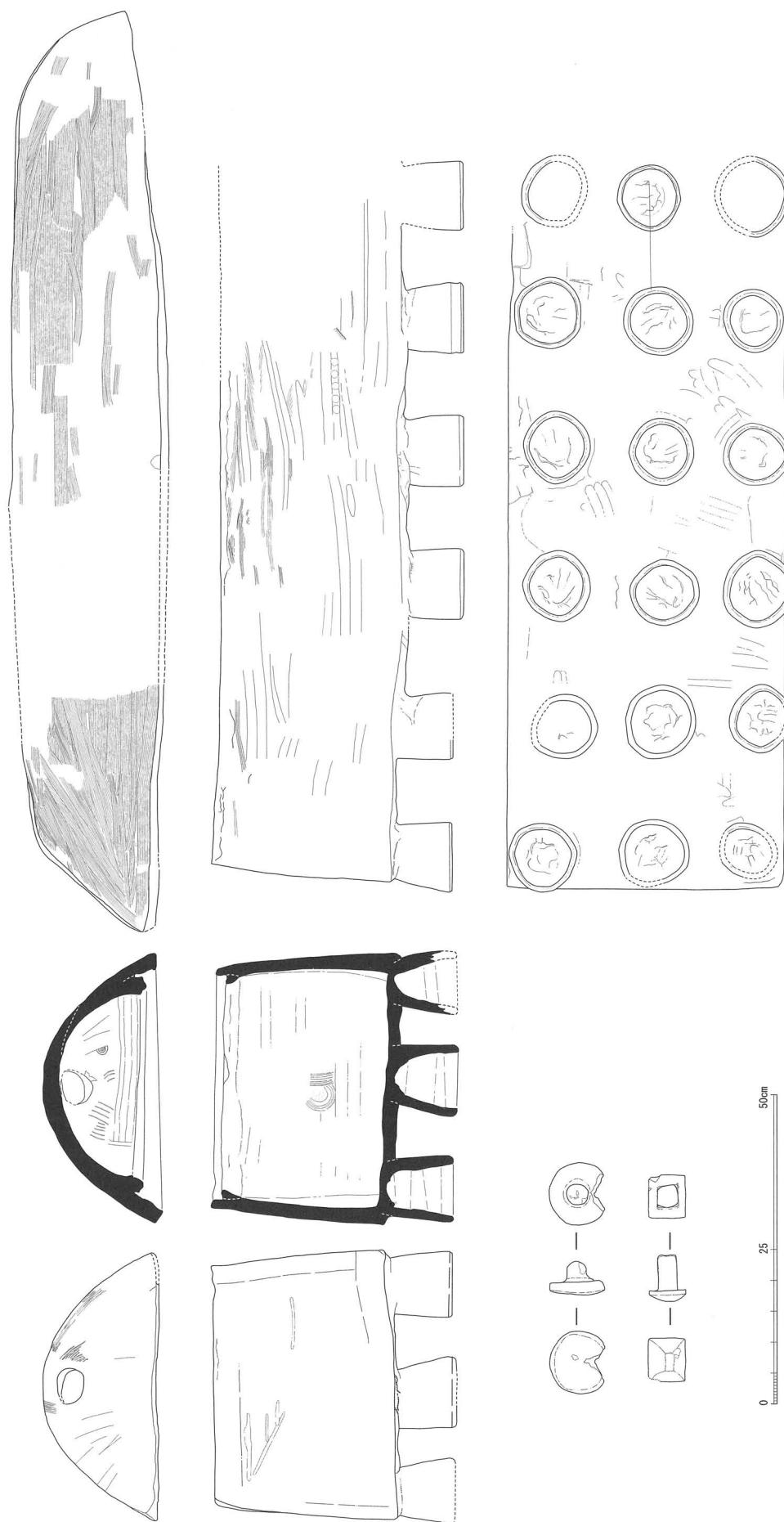


図14 A3号墳出土陶棺

この破片は陶棺の身の長側面にあたる部分である。受け部や一方の長側面から短側面への屈曲部を残しており、身の長側面をほぼ完全に残している。法量は縦25cm、横103cm、厚さ2.2cmをはかる。また径1.5cmの小孔がおよそ2cmの間隔で2個縦に並んで穿孔されている。このような小孔は2箇所で確認することができる。

外面は4～5条/cmの粗いタテハケが全面に施されている。それに対して内面には4～5条/cmの粗いタテハケを施したのちに横方向のナデを施し、タテハケを消そうとしている。ただし内面のタテハケは大部分が消されずに残っている。また内外面に施されたハケであるが、ハケの間隔や強さなど両者はきわめて類似している。
(前田 俊雄)

第3節 A 4号墳（図版11・12）

概要・石室

ややいびつな円墳で、横穴式石室を伴う（注1）。羨道を伴わない無袖の横穴式の玄室開口部に、急な傾斜の墳丘を下る墓道が取り付けられている。急な傾斜とV字形の底の形状より、墓道は排水溝を兼ねていたと考える。石室の床には、礫敷きが施されていた痕跡が一部残る。礫の隙間からは棺釘が4点（内2点はほぼ完形）、墓道から釘の一部が1点出土した。

A 4号墳の墳丘盛土には、先行する古墳の周溝を削平して築造された墳丘にしばしば含まれる周溝埋土である黒味を帯びた粘土が混じっていないが、石室の残りから見て削平具合が大きいからであろう。完掘後の周溝内の等高線からは、A 4号墳の周溝の方がA 3号墳のものよりも明瞭にカーブを描き、新しく築造されたように見える。群内の大半の横穴式石室（A 7号墳・B 1号墳をはじめ当該及びB 2号墳石室以外全て）が無袖でありながらも、玄室が羨道を意識した縦に長い構造をしていることに対して、A 4号墳の石室は長方形の玄室に排水溝を兼ねた墓道が直接取り付く群内で最も新しい形状の平面プランを示している（図15）。調査時に石室内から出土した土器も群内でもっとも新しい一括資料であり、飛鳥Ⅲ古段階、7世紀の第3四半期の終わり頃に相当すると考える（注2）。しかしながら、土器には片付けられた痕跡があり、排水溝内には初葬に伴う副葬土器が搔きだされているため、追葬は行われていた。

共有する周溝から、A 2号墳・C 1号墳よりは後に造営されたことがわかる（図10・38）。A 3号墳との関係は前節で述べた通りである。

出土土器

A 4号墳石室内出土土器は、まとまりのある完形の土器ばかりである。図16-11の土師器短頸壺を除いてすべて須恵器である。すべての土器は石室中央部を横断して3石が並ぶ仕切りより開口部側で出土し、片付けられた様子であった。床の礫敷きの残存状況から判断して、攪乱は床まで及び副葬土器も原位置を留めてはいない。しかしながら出土状況には、やはりまとまりがあり、焼成や調整などに統一感があることからも、石室内において完形で出土したもの（図16-1～12・18）は一括資料であるとみなすことができる（注3）。4の杯G蓋と6の杯B蓋に関

しても、組み合う身の器形は異なるものの端部の形状が酷似しており、同時期と見てよい。平瓶 18 は小型化し、高杯 12 はスカシもなくやや短脚化し、共に新しい特徴を備えている

墓道内では、多数の土器の碎片が南北にまんべんなく広がった状態で出土した。須恵器の大甕が 23 を含めて少なくとも 2 個体・高杯の杯部 16 及び壺体部 25 の破片、土師器杯 19・20 及び甕 21 が出土した。高杯 16 は口縁部と杯底部の境目にある沈線が石室内出土高杯 12 より明瞭であり、土師器杯 C も 19 底部から口縁部近くまでヘラケズリが施され、古い特徴を保持している。しかしながら杯 20 は口径に対して器高も低く、石室内の遺物とそう差はないようである。相対的に見て、石室内の資料は排水溝出土資料よりやや新しいが、それほど時期差はなく、墓道出土資料も 7 世紀第 2 四半期の末頃～第 3 四半期に相当すると考える。17 の壺は石室内の破片と墓道内の破片が接合

し、墓道出土土器に石室内から掻きだされたものが混じることを示す。石室開口部近く及び墓道内からは棺釘が各々 1 点出土した。これらのことより、大甕以外の 5 点の墓道出土土器は、副葬土器の掻き出しであると考える。大甕は石室開口部付近もしくは墓道付近の周溝内において、A 7・8 号墳・B 7 号墳・C 3 号墳などでも同様に出土しているため、墓道内が供獻原位置であると考える。13～15 の須恵器は周溝の石室背面から出土した。石室及び墓道から出土した遺物よりも、14・15 の杯 H は口径も大きく身の立ち上がりも高く、さらに古い様相を示す。周辺の古墳を含

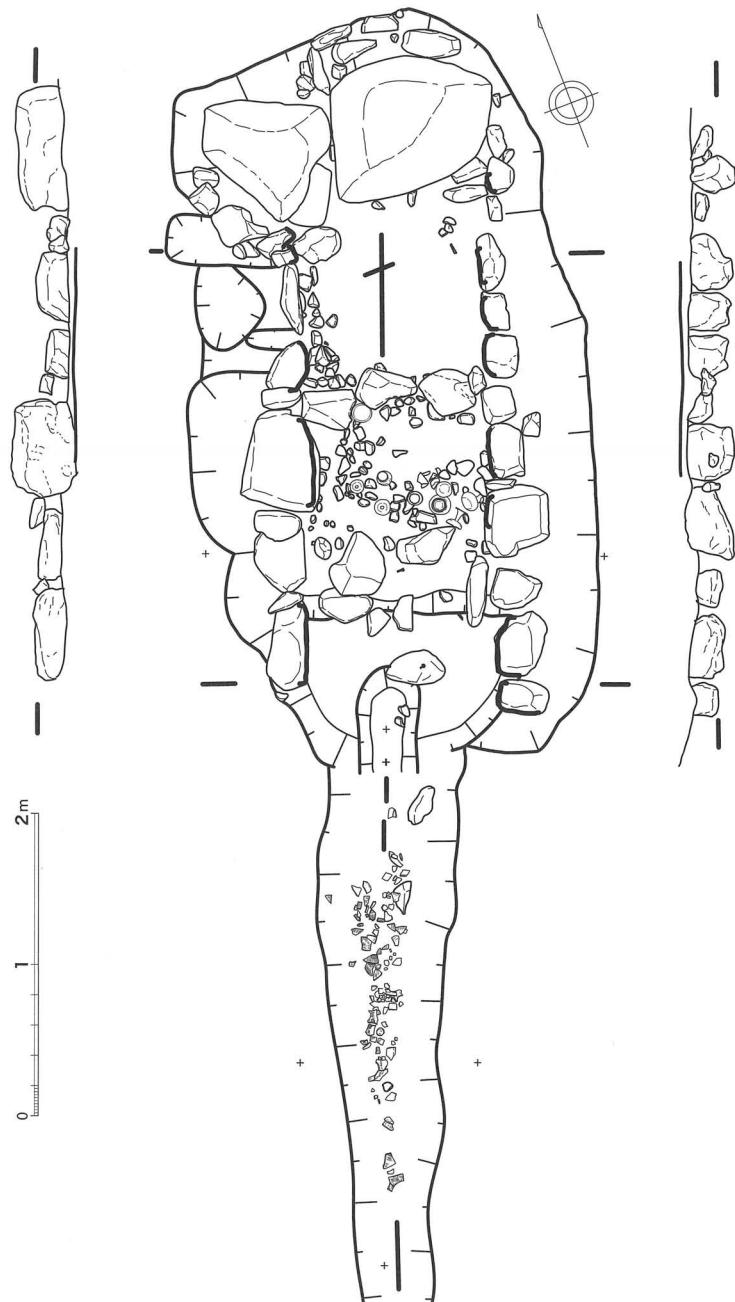


図 15 A 4号墳横穴式石室

め、どこかの石室の初葬に伴う土器であった可能性もあるが、この石室に伴う資料であると断定できる出土位置ではない。24の短頸壺と25の壺はそれよりはやや北の南北溝から出土しており、A 5号墳に伴う遺物であろう。

(小川)

(注1) 古墳の様々な計測値を含めた詳細情報は、表3の一覧にまとめた。

(注2) 飛鳥時代の土器編年は、奈良国立文化財研究所 1978『奈良国立文化財研究所学報第31飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ 藤原宮西方官衙地域の調査』による編年に準ずる。

(注3) 須恵器杯 H・G・B の共伴関係については近年議論されているところである。佐藤隆「難波地域の土器様式再論」平成19年9月15日 都城制研究会発表資料参照。

第4節 竪穴式小石室及び出土磚(図版13)

概要

A 4号墳の北、A 4号墳西側の墳丘が存在しない空白地に、墳丘を持たない竪穴式小石室が存在する。A ii 支群と B 支群を隔てる谷の斜面を東の A ii 支群側に上ったところで検出した。距離

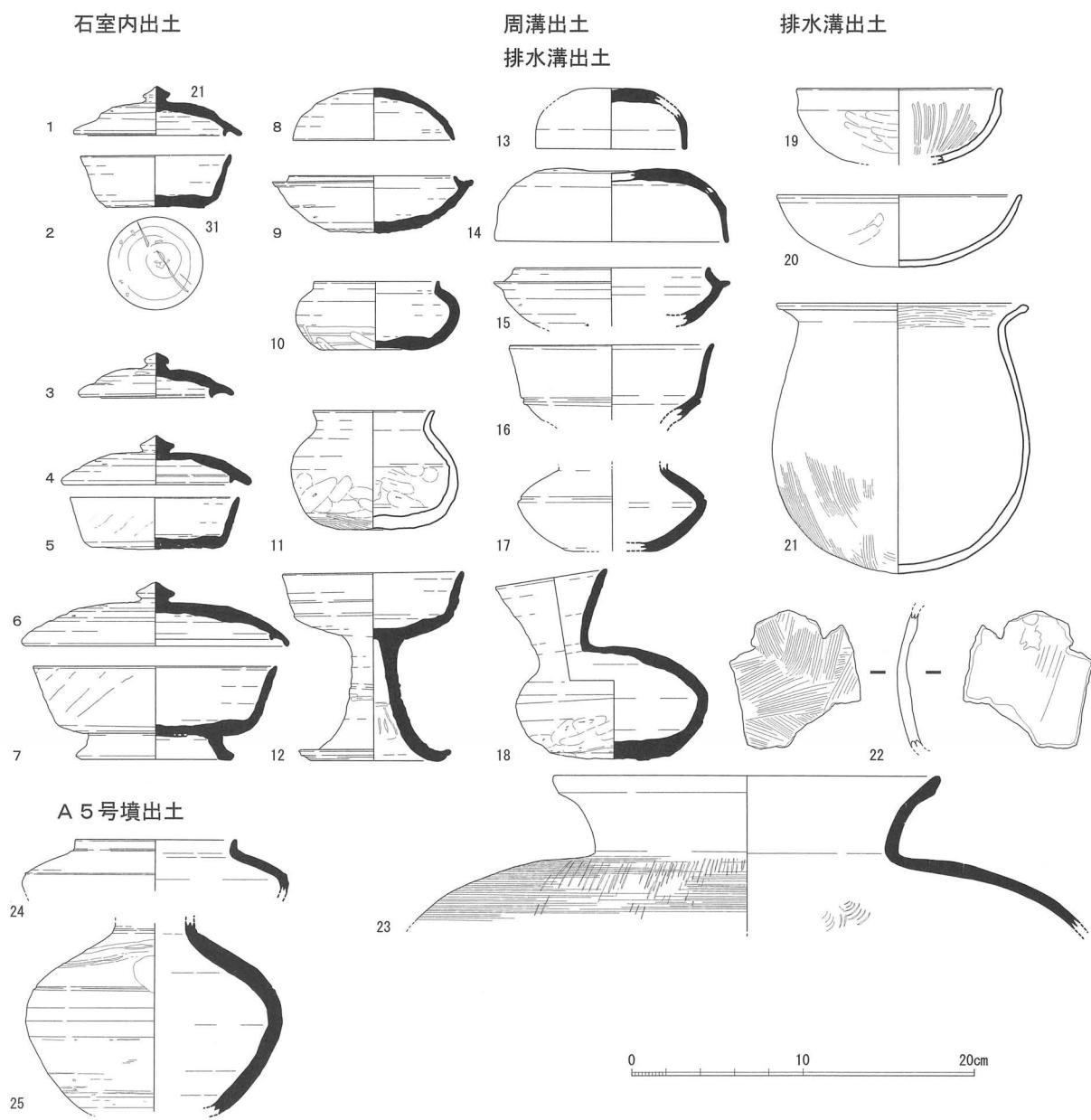


図 16 A 4号墳出土土器

表6 A4号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1 403	A4号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳~ 飛鳥	8.0	—	2.85	回転ナデ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	淡青灰色	淡青灰色	不明	密	良好	21	05	
2 502	A4号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳~ 飛鳥	8.9	—	3.05	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ記号か?	灰白色	灰白色	淡灰色	密	良好	31	06	
3 500	A4号墳 石室内	須恵器	蓋	古墳~ 飛鳥	6.4	—	2.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	暗灰色	青灰色	灰色	密	良好	24	09	
4 731	A4号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳~ 飛鳥	9.0	—	2.9	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	淡灰白色	淡灰白色	不明	密	—	30	03	
5 401	A4号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳~ 飛鳥	10.0	—	3.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	不調整	灰~ 暗オリーブ灰色	灰白色	明灰色	密	良好	23	04	
6 398	A4号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳~ 飛鳥	13.8	—	3.7	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	淡灰色	青灰色	暗灰色	密	良好	32	07	
7 405	A4号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳~ 飛鳥	14.3	9.2	5.5	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ、 中央部不調整	淡オリーブ 灰色	淡青灰色	不明	密	良好	33	08	
8 501	A4号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳~ 飛鳥	9.4	—	3.1	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ケズリ	青灰~暗灰色	明青灰色	不明	密	良好	22	01	
9 499	A4号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳~ 飛鳥	9.85	—	3.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	不調整	青灰色	淡青灰色	不明	密	良好	25	02	
10 402	A4号墳 石室内	須恵器	短頸壺	古墳~ 飛鳥	7.6	—	4.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外~ヘラケズリ	灰~明灰色	暗緑~灰色	不明	密	良好	26	10	
11 407	A4号墳 石室内	土師器	短頸壺	古墳~ 飛鳥	7.2	—	7.0	ナデ、ヘラケズリ ハケメ	ナデ、ヘラケズリ 内・ナデ 外・ハケメ	淡褐色	淡褐色	褐色	密	良好	115	13		
12 498	A4号墳 石室内	須恵器	高杯	古墳~ 飛鳥	10.7	7.6	11.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	淡紫灰~ 暗灰色	暗灰色	紫灰色	密	良好	34	12	
13 309	A4号墳 周溝	須恵器	蓋	古墳~ 飛鳥	(8.6)	—	(3.5)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	褐色	褐色	—	密	不良	220	—	
14 309	A4号墳 周溝	須恵器	杯蓋	古墳 時代	—	—	(1.2)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	暗褐色	褐色	—	密	不良	221	—	
15 309	A4号墳 周溝	須恵器	杯身	古墳 時代	(11.4)	—	(3.4)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	暗灰白色	灰白色	灰白色	密	良好	47	—	
16 —	A4号墳 排水溝	須恵器	高杯	古墳 時代	(12.0)	—	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	277	—	
17 565	A4号墳 排水溝	須恵器	短頸壺	古墳 時代	—	—	(4.8)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰色	灰白色	—	密	良好	278	—	
18 406	A4号墳 石室内	須恵器	平瓶	飛鳥 時代	6.6	—	11.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	明灰色	淡灰~暗灰色	灰白色	密	良好	111	11	
19 396	A4号墳 排水溝	土師器	杯	飛鳥 時代	(12.0)	—	(4.4)	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ミガキ	—	明黄褐色	明黄褐色	—	密	良好	283	—	
20 425	A4号墳 排水溝	土師器	杯	飛鳥 時代	(14.4)	—	4.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	—	密	良好	284	—	
21 —	A4号墳 排水溝	土師器	甕	古墳~ 飛鳥	(14.4)	—	(15.9)	ナデ、ハケメ	ナデ	外・ハケメ	明褐色	暗褐色	—	密	良好	276	—	
22 182	A4号墳 排水溝	土師器	甕 (体部片)	古墳~ 飛鳥	—	—	—	ハケメ	ナデ	—	灰褐色	褐色	—	密	良好	235	—	
23 306	A4号墳 排水溝	須恵器	甕	古墳~ 飛鳥	(22.4)	—	(8.6)	ナデ タタキ、カキメ	当て具痕	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	良好	298 —A	—	
24 271	A5号墳	須恵器	短頸甕	古墳 時代	9.5	—	(3.1)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	良好	048	—	
25 314 324 481	A5号墳	須恵器	壺	古墳 時代	—	—	(10.3)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	淡オリーブ 灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	145	—	

※()内数値は反転復元後の数値及び残存高

の上で最も近い位置にあるのはB2号墳であるが、1) 谷の東側に位置すること、2) A3号墳と主軸方向がほぼ同じであること（注1）を評価し、A3号墳と同じAii支群に関わる石室であると考える。

北側から石室内に崩落していた石の下から、耳環3点（1対+1点）、刀子1点（図18）及び歯1本（下顎第2大臼歯）が出土した。その歯の同定結果（付論7）より、性別は不明であるが成人に達する年齢（10代後半～20代）の人物が葬られていたことがわかった。1対の耳環と歯の出土位置より、遺体は北に頭を向けて埋葬されていたであろう。石室の床には6枚の磚が敷き詰められており、石室の南端のみ2枚重ねて置かれていた。磚の下には4～5cm弱の大きさの石が敷き詰められていた。この同じような石は、石室の壁との隙間を埋めるように2枚重ね磚の間や壁際にも数個詰められていた。

磚

床に敷かれていた6点の磚はどれも完形ではなく、短辺の片側を欠くものであった（図19-磚1～6）。全て厚みが4cm前後、短辺が25～27cm前後の同一規格のものである。6点のうちには、

2点で1枚の完形品になるような接合関係もなく、中途半端に欠損したものばかりであり、この石室のために焼かれたものではない。胎土がやや粗く及び焼成の悪いものがほとんどであり、あまり仕上がりの良い磚とは言えない。磚1は、割れ口に穿孔の痕跡が見える。穿孔部の粘土のよ

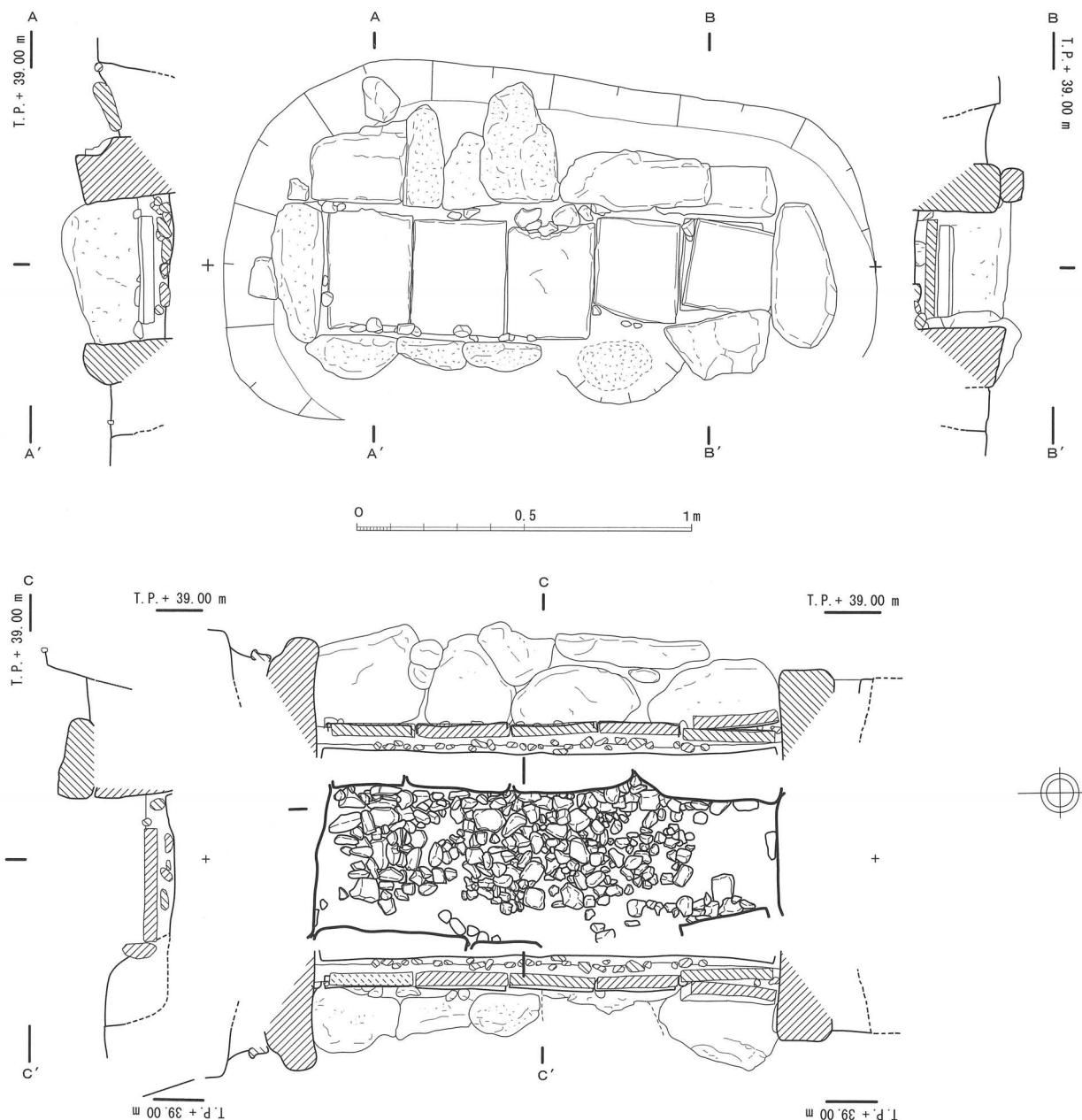


図 17 壇穴式小石室

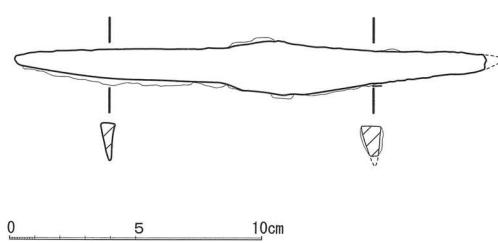


図 18 壇穴式小石室出土刀子

れ具合から、孔は焼成前に開けられていたことがわかる。磚を割るために開けた孔ではないが、この孔をきっかけに周辺がもろくなり、そこから欠損したことになる。

図 19- 磚 7 は A 7 号墳周溝内北東隅付近の攪乱をうけた土から出土した。8 ~ 10 の 3 点は B 7 号墳南側の暗渠 3 (図 6) の石組みに転用されていた。全ての磚はやはり 4 cm 前後の厚みで、両面にヘラ削りとナデが施されているが、磚 10 は青海波タタキが施された後にややナデ消されている。

図 21 は、桑原西古墳群出土の磚と、初田 1 号墳、阿武山古墳、牛石 14 号墳、田辺廢寺などから出土した磚と規格を比較したところ (図 20・注 2)、桑原西古墳群、初田 1 号墳、阿武山古墳の 3 カ所から出土の磚は酷似している。全ての磚に施されているわけではないが、青海波タタキが施されているものについては、当て具痕のパターンは一致する。桑原古墳群出土磚の中では、磚 10 の両面にタタキが施されていた。阿武山古墳出土磚 (注 3) の内で青海波タタキが施されているものには、タタキ目のパターンが 2 種存在する。1 つは桑原西古墳群及び初田 1 号墳の磚 (注 4) に施されているものと同様のパターン (図 19- 磚 10) であり、もう 1 つは図 21- 5 に示すように、前者と比べてやや粗く痕跡も明瞭でないパターンである。いずれの古墳から出土したものに關しても、すべての磚にタタキが施されているわけではなく、両面ともヘラケズリ及びナデ調整が施されているものも含まれている。

桑原西古墳群出土の磚に完形のものは含まれず、完形に接合復元できるものもない。その一方で、初田 1 号墳出土の磚には、報告された 31 点の内 4 点の完形品が含まれる (注 4)。しかしながら、石室内に使用された磚はすべて破片で、完形のものは接合によって完形に復元されたものばかりである。4 点のうち 1 点は他よりも長辺が短辺の 1.6 倍と、他 3 点の 2 倍より短く、やや分厚いが、この特異な 1 点を除いた大多数である細長く厚みが 3.5 ~ 4.0 cm のタイプが、今回観察し得た阿武山古墳出土資料と共に通する仕様である。阿武山古墳出土の磚にも、棺台に使用されていたものは「縦九寸五分、横八寸、厚一寸二分」の正方形に近い形状で、被覆に用いられていたものは「長方形で横八寸四、五分、長さ一尺七寸内外あり其の大部分は一面に所謂朝鮮土器の内面意見ると同様な同心圓の捺型文を印して居り…」とあったと報告されている (注 5)。観察し得た資料は細長いタイプのみであり、こちらが初田・桑原の出土品と共に通する仕様である。現在観察可能なものは

図 21- 5 に図示したタイプを除く全ては、ほぼ完形である。焼成も堅緻で青灰色を呈している (注 6)。現時点での遺物には接合痕が見られるものもあるが、完形に復元されているものがほとんどである。発掘調査時の磚被覆及び磚敷きの出土状況図においては、すべての磚が完形であるように表現されている (注 5)。

図 21- 1 ~ 4 の阿武山古墳出土須恵器から見ても、桑原西古墳群・初田古墳群と同時代に築造された古墳であることは疑いなく、3 カ所から出土した磚は、このように多くの特徴を共有しており、生産地が同一である可能性が高い。このことより、1 カ所の窯で焼かれた磚の内、焼成・

形状ともに良好な状態であったものは阿武山古墳に使用され、その他のB級品以下のものは初田1号墳もしくは桑原西古墳群に、選別に漏れたものを転用利用したと考えられる。特に当古墳群出土のものは焼成も悪くもろいものが多く、竪穴式小石室の磚も、数点は取り上げ最中に再度破損してしまった。初田古墳群出土資料にも土師質のものが含まれると報告されている（注4）。

図19－磚1の欠損部断面に観察できる穿孔の痕は、焼成前から存在した孔の部分がもろく、それがきっかけとなってその位置で破損した痕跡である。また、6枚の竪穴式小石室（磚1～6）の長辺の長さにはばらつきがある。故意に割ったものならば、もう少し同じ長さのものがそろう

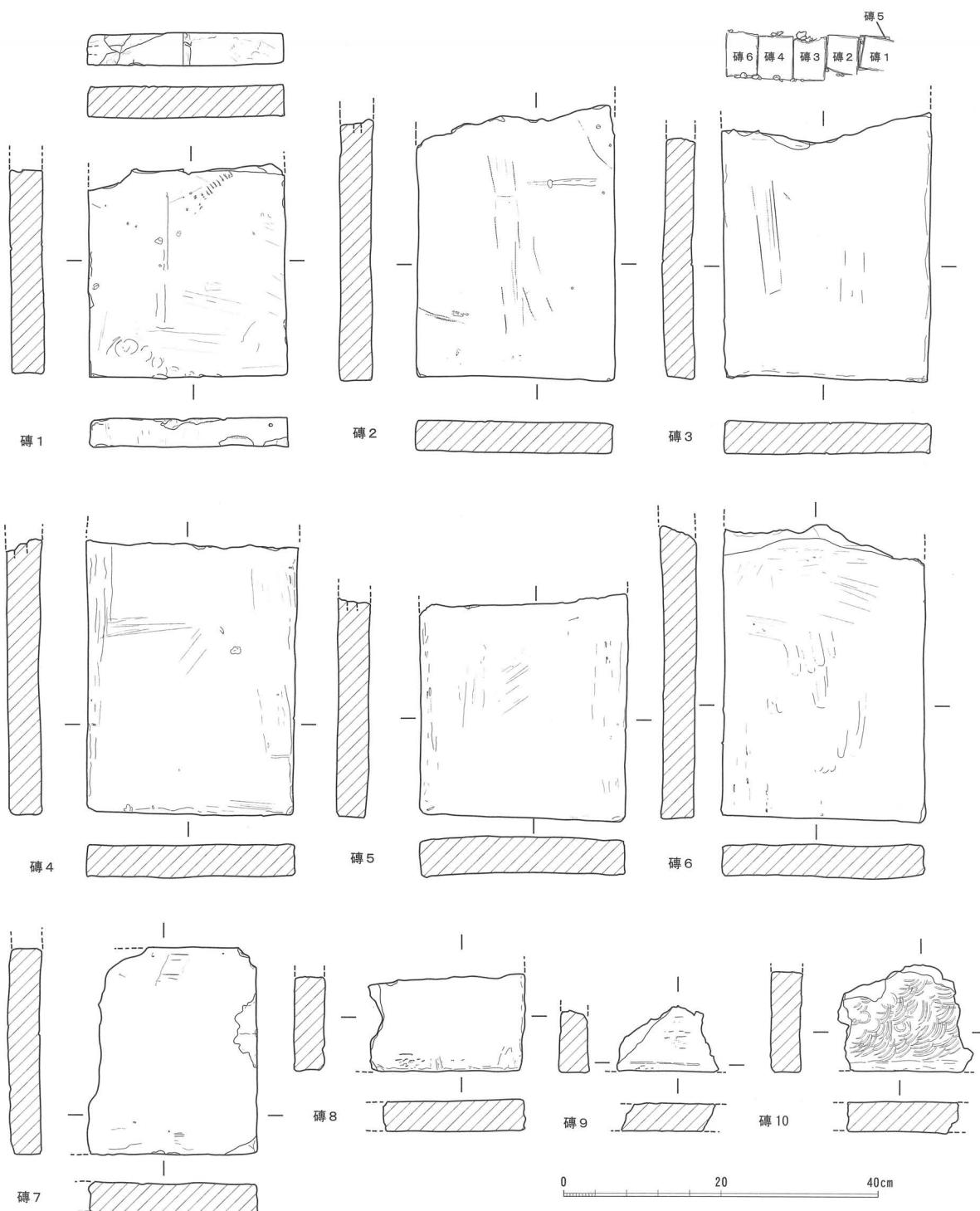


図19 桑原西古墳群出土磚

表7 桑原西古墳群出土磚一覧

番号	登録番号	出土地点	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号
						表面	裏面	側面	表面	裏面	断面			
1	736	竪穴式 小石室床	27.0	25.1	4.2	ナデ	ケズリ 指頭圧痕明瞭	ナデ後、表側から 裏側へかけてケズリ	淡灰～灰褐	淡灰～灰褐	暗灰～紫灰褐 一部白～褐	密 小石 チャート	良	1
2	737	竪穴式 小石室床	35.0	25.4	4.1	ケズリ	ケズリ	ケズリ、ナデ	暗褐～淡灰 一部淡黄褐	暗褐～淡灰	暗褐～淡灰	密 小石 チャート	良	2
3	738	竪穴式 小石室床	34.0	26.5	4.0	摩耗のため 調整不明	ケズリ、ナデ	ナデ	灰白褐色味	灰白	灰白褐色味	密 小石 チャート	やや 軟	3
4	739	竪穴式 小石室床	34.2	27.0	4.2	—	ケズリ	ケズリ	暗赤灰	暗灰 一部淡赤褐	暗灰	密 小石 チャート	良	4
5	740	竪穴式 小石室床	28.3	26.6	4.5	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	暗灰～灰白 一部褐色味	暗灰～灰白 一部褐色味	暗灰～灰白 一部褐色味	密 小石 チャート	良	5
6	741	竪穴式 小石室床	36.3	25.9	4.5	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	暗灰～淡灰	暗灰～淡灰	暗灰	密	良	6
7	717	M5攢乱	21.2	26.4	4.1	ケズリ	—	—	暗灰	暗灰	淡赤褐～淡灰	密 小石 チャート	良	7
8	285	J10暗渠	18.5	12.4	4.1	ケズリ	ケズリ、ナデ	ナデ	暗灰～明灰	暗灰～明灰	暗灰～明灰	密 小石 チャート	良	8
9	072	2C区 038周溝	12.0	8.4	3.5	ケズリ	指ナデ	ケズリ	淡灰	淡灰褐 やや赤味	灰白	密 小石 チャート	やや 軟	9
10	285	J10暗渠	14.0	13.5	4.0	タタキ	タタキ	ケズリ	淡灰色	淡灰色	淡灰色 (暗茶に変色)	密	良	10

※()内数値は反転復元後の数値

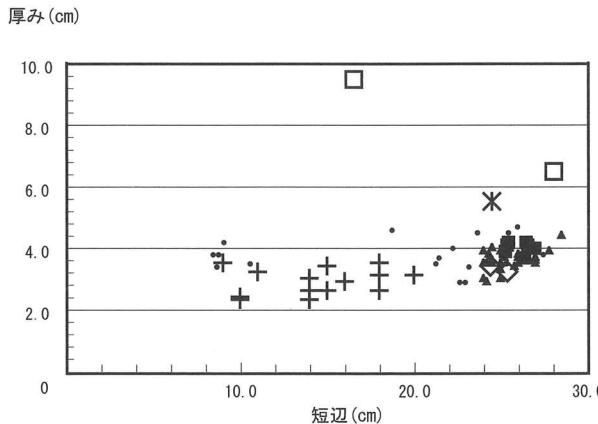


図20 出土磚短辺・厚み比較図

- ◇ 阿武山
- 桑原
- ▲ 初田
- 田辺廃寺
- * 仏陀寺
- ・ 牛石14号
- + 陶器

ように割られるのが自然であろう。これは、竪穴小石室の磚が、転用のために故意に割られたわけではなく、欠損部のある不良品のうち、比較的残存長の似通ったものを集めて、石室の床敷きに転用されたことを示唆している。
(小川)

(注1) 表3 桑原西古墳群一覧参照。

(注2) 本古墳群より完形のものは出土していないため、長辺を比較対象の数値とすることはできなかった。比較は厚みと短辺を分類基準の数値とした。

(注3) 阿武山古墳出土遺物については、図21の須恵器は高槻市立埋蔵文化財センター蔵、磚は京都大学総合博物館蔵である。両機関には遺物の観察及び実測に際してご協力をいただいた。ここに謝意を表したい。

(注4) 初田1号墳の磚についての詳細は、大阪府教育委員会2007『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡』を参照されたい。三島地方出土の他資料との比較も述べられている。

(注5) 大阪府1936『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書 第7輯 摂津阿武山古墓調査報告』

(注6) 大阪府1936『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書 第7輯 摂津阿武山古墓調査報告』「…棺臺所用乃至壁の一部のものと同じ青鼠色の堅緻な薄手品であるが、時に白灰色をした吸水性の多い遺品を混じ…」(pp.16)

表8 阿武山古墳出土遺物一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号
									外面	内面	底部(天井部)	外面	内面	断面			
1	820 528	阿武山古墳 前面南トレンチ	須恵器	杯蓋	飛鳥 時代	(10.1)	—	3.7	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後不調整(外面) 回転ナデ後一方向ナデ(内面)	淡灰褐色	灰褐色	紫灰褐色	やや粗	良	1
2	820 528	阿武山古墳	須恵器	杯蓋	飛鳥 時代	10.3	—	3.4	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後不調整(外面) 回転ナデ後不定方向ナデ(内面)	灰色 オリーブ味	灰色 オリーブ味	紫灰色赤味	精良	良	2
3	820 528	阿武山古墳	須恵器	杯蓋	飛鳥 時代	(10.7)	—	復元値 4.1	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	—	淡灰色	淡茶灰色 一部淡茶色	—	やや粗	不良	3
4	820 528	阿武山古墳	須恵器	杯身	飛鳥 時代	8.6	—	復元値 3.2	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	—	淡灰色～ 淡茶色	淡茶色 一部灰色	淡茶～淡灰色	やや粗	不良	4
番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	長辺(cm)	短辺(cm)	厚み(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号
									表	裏	側面	外面	内面	断面			
5	—	阿武山古墳	—	磚	飛鳥 時代	25	18.5	4.0～4.2	ハケメ	ハケメ	ハケメ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	粗	不良	5

※() 内数値は反転復元後の数値

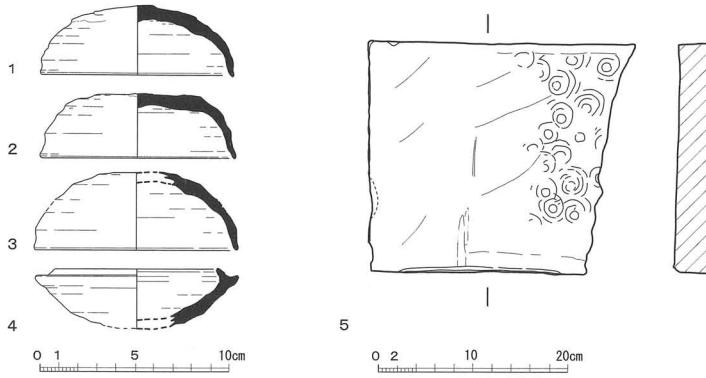


図21 阿武山古墳出土須恵器及び磚

第5節 小結—A i 支群について

A i 支群に属する古墳として、A 0～6号墳の7基を確認した。調査区の南側に位置する谷より、墓道にアクセスが可能な一群で、すべては円墳である。平成16年度調査区に位置するA 0号墳及びA 1号墳は、削平が著しく詳細は不明であるが、前述のとおり航空写真に移された地形の観察により存在の可能性を推測した。その北側に位置するA 2～4号墳は、共有する周溝掘削時の観察などから、概ねA 2号墳→A 3号墳→A 4号墳の順に築造されたと判断する。谷にアクセスがよく、しかも尾根沿いの立地条件の良い位置にあることからも、この支群が他の支群に先行して形成されたであろう。A 0・1号墳の詳細は分からぬが、立地から考えて、基本的には両古墳から北側へ向かって形成されたと考える。ただ、A ii 支群との間にあり、支群形成の核となるA 6号墳も先行して築造されている。最後に、先行するA 6号墳との間に空いたスペースにA 4号墳が築造されることになるだろう。A 4号墳の墳丘はA 6号墳の周溝とわずかに重なって築造されており、A 4号墳墳丘の円形がいびつな形状をしているのはこのためであると考える。

(小川川)

第7章 A ii 支群の調査成果

第1節 A 7号墳（図版14・15）

概要・墳丘及び周溝

無袖の横穴式石室を伴う方墳である。石室が墳丘いっぱいを占め、奥壁が北側の墳丘裾に近い（約2.5m）。無袖の横穴式石室は玄室長が長く、開口部に直接墓道が取り付く。石室の一部であったと見られる石が石室の西側から石室内部に崩落した状態で、石室を検出した。石室内からは、散乱状況から副葬時の原位置を留めているものは少ないが、破片も含めて多くの土器が石室内より出土した。石室開口部真正面の墓道では、後世の雑壇耕作地の地目境となる石垣の巨石の下から須恵器の大甕が出土した。墓道はA 6号墳を経由し、A 8号墳の墓道とともに、東の谷からのアクセスが可能である。隣接する古墳との関係では、A 8号墳よりは先行して築造された

（図22）。出土土器については続いて詳細を報告するが、A 8号墳との型式差はないため、ほぼ時期をあけることなく続いて築造されたと考える。B 4号墳との間には現代の搅乱を挟むため、共有する周溝の断面が一部

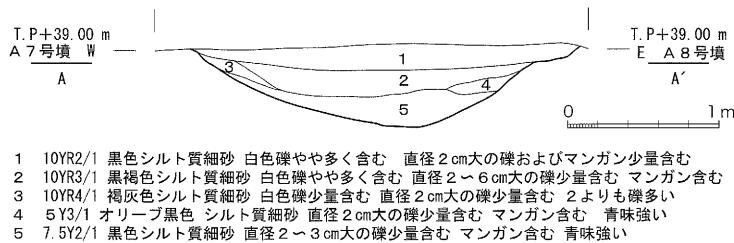


図22 A 7・A 8号墳間周溝断面図

明瞭に観察できないが、B 4号墳が先行する可能性が高い。A 5号墳との間には石垣をはさみ観察両古墳の切り合いは観察できないが、A 5号墳はA 6号墳と共に周辺の古墳に先行するため、A 7号墳はこれらの古墳よりも後に築造されたであろう。

出土遺物

主な出土遺物は土器である。搅乱が著しいため、出土地が副葬時の原位置を留めているものは少ないと推定でき、細かい破片も多いが、群内で一番多くの土器が出土した。しかしながら、須恵器杯H・G（図23-1～20）が中心で、やや大ぶりの他の器種（提瓶・平瓶など）は出土しなかった。崩落した石の下からは土器（土師器台付長頸壺25など）とともに人骨片が出土した。人骨は肋骨片及び左側上腕骨遠位部の一部であった（付論7）。土師器は21・22・25の3点のみであり、胎土・色調・焼成などに比較的統一感がある。墓道付近からは大甕の他に高杯を含む26～32が出土した。須恵器の杯H・Gが供伴するが、杯G（11・13・15）のつまみが整ったな擬宝珠形でなく、口縁部の立ち上がりも高く、古い様相を見せるまた、つまみのみが欠損している杯G蓋が4点（9・10・16・18）出土した。A 2号墳の例と同様に、故意に打ち欠いている可能性がある。この2基の古墳の時期は、距離が離れているために副葬土器からの推測しかできないが、よく似た特徴を示し、ほぼ並行していることも、特徴的である。

第2節 A 8号墳（図版 16）

概要

調査区北東隅近くで検出した円墳である。側壁の石に消失しているものが多いが、最下段の石の抜き取り穴から復元できる石室は無袖の横穴式石室であり、羨道の存在を意識した長い玄室をもつ構造である。墳丘の立地的には、C 3号墳に近接し、C支群を形成する尾根上に築造されたように見えるかもしれない。しかしながら、石室開口部及び墓道がA 7号墳の方角を向いており、石室から目指すアクセスをA 7号墳と共有し、A 7号墳とともにA ii支群を形成する。墳丘盛土

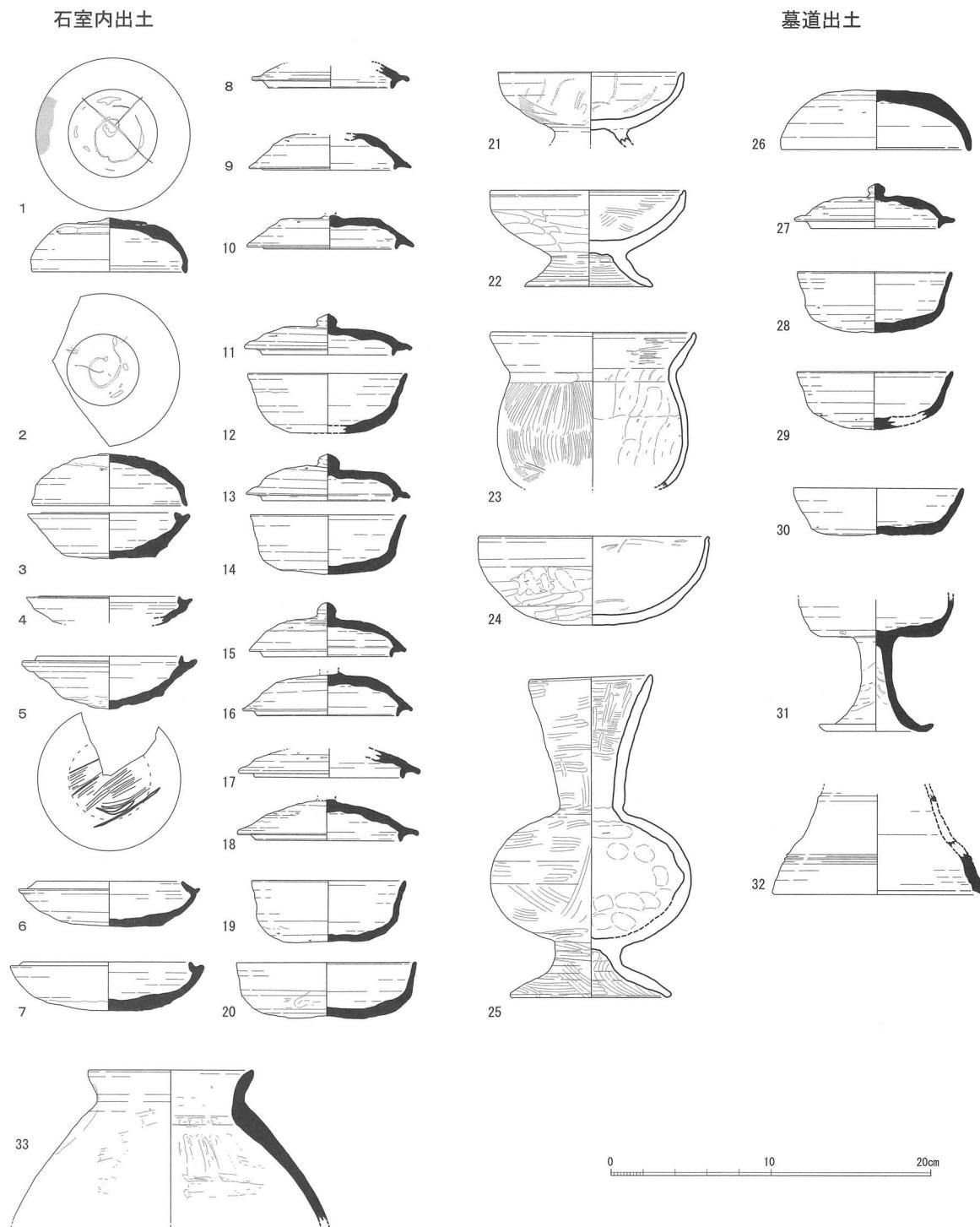


図 23 A 7号墳出土土器

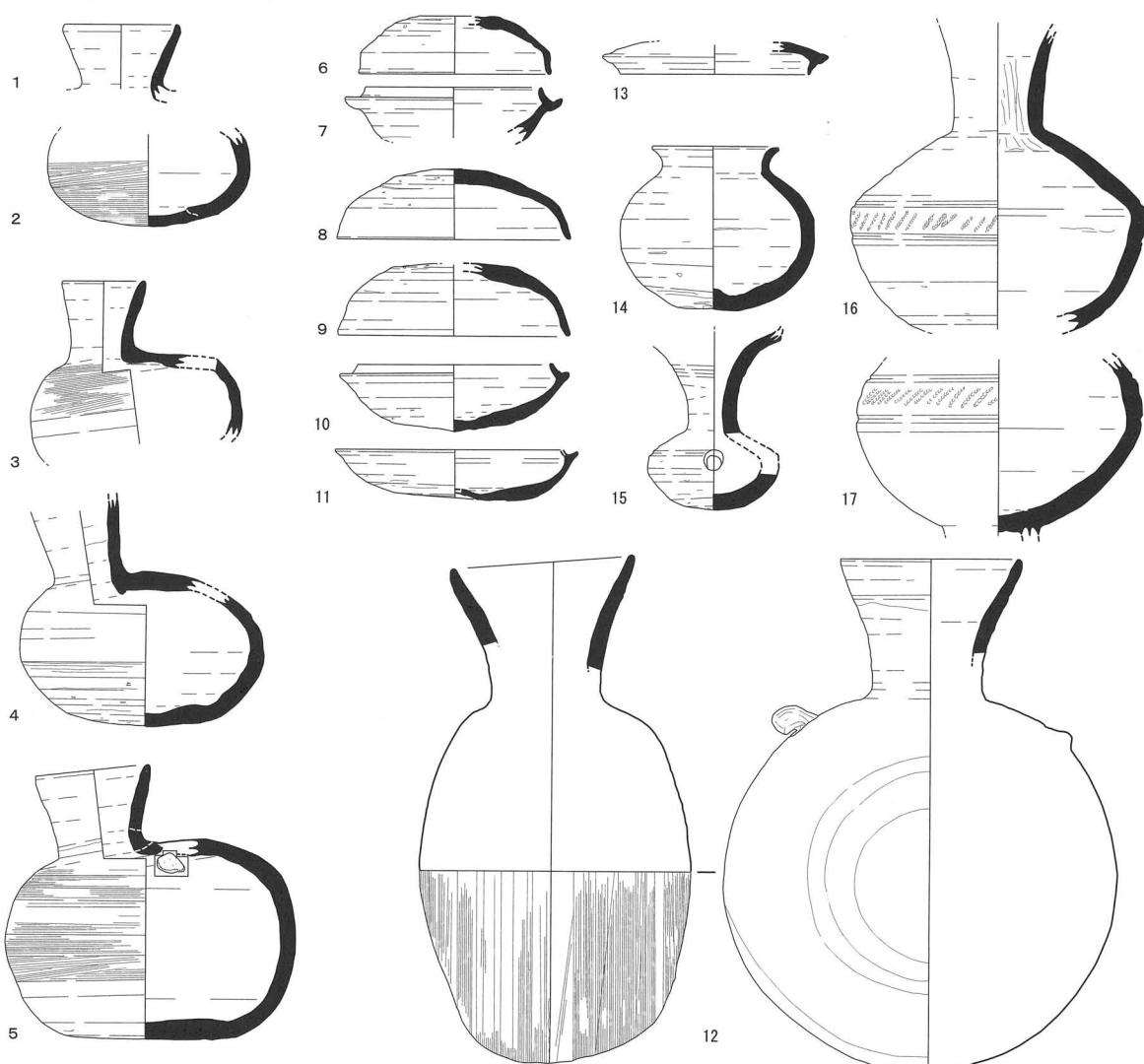
表9 A7号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	577	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	9.8	—	3.4	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整、 ヘラ記号	灰白～暗灰色	青灰色	青灰色	密	—	12	—
2	581	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	9.6	—	3.2	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整、 ヘラ記号	暗オリーブ灰～ 暗灰色	暗赤紫灰色	灰色	粗	良好	9	—
3	582	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	8.4	—	2.85	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	オリーブ灰色	オリーブ灰色	不明	密	良好	2	16
4	573	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(8.8)	—	(1.7)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	暗灰白色	灰白色	淡赤紫色	密	—	7	—
5	604 561	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	9.4	—	3.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整、 ヘラ記号	灰色	灰色	赤紫色	密	良好	5	—
6	585	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	9.2	—	2.9	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	暗青灰色	暗青灰色	不明	密	良好	20	14
7	572	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	10.6	—	3.1	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰白色	淡灰白色	淡灰白色	密	不良	15	—
8	556	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(9.2)	—	(1.5)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	暗青灰色	暗青灰色	暗灰色	密	良好	18	—
9	636	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(8.2)	—	(2.25)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	淡灰褐色	青灰色	淡灰色～灰色	粗	良好	14	—
10	556	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(8.4)	—	(2.1)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ欠損、 回転ナデ	灰白色	灰白色	灰白色	粗	良好	13	—
11	580 604	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	8.3	—	2.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	灰白色	灰白色	赤茶紫色	密	良好	1	—
12	604	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	(9.9)	—	3.8	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	淡赤紫色	密	良好	6	—
13	602	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	8.2	—	2.9	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	灰白色	灰白色	赤茶褐色	密	良好	4	17
14	606 579 604	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	9.7	—	3.7	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	灰白色	灰白色	赤茶紫色	密	良好	3	18
15	384	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(8.2)	—	(3.4)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	紫灰～青灰色	明青灰色	暗紫灰色	密	良好	77	—
16	600	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	8.85	—	(2.55)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ欠損、 回転ナデ	淡紫灰～灰色	灰白～灰色	灰色	粗	良好	11	—
17	576	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(9.4)	—	(1.7)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰色	暗灰色	暗紫灰色	粗	良好	10	—
18	578 576	A7号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	9.1	—	(2.5)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ欠損、 回転ナデ	暗灰色	灰白色	乳茶褐色	粗	良好	8	—
19	606	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	9.7	—	3.8	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	灰白色	灰白色	赤紫色	—	—	19	—
20	—	A7号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	(11.4)	—	3.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	にぶい青灰色	青灰色	紫灰褐色	密	良好	73	—
21	584	A7号墳 石室内	土師器	高杯	飛鳥時代	11.7	—	(4.5)	ナデ、ハケメ	ナデ、ミガキ	—	不明	不明	不明	—	—	68	—
22	573 557	A7号墳 石室内	土師器	高杯	飛鳥時代	(12.2)	8.0	6.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ミガキ	ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	明赤褐色	密	良好	72	—
23	557	A7号墳 石室内	土師器	甕	古墳時代	(12.9)	—	(9.7)	ナデ、ハケメ ヘラケズリ	ナデ、ヘラケズリ	—	淡褐～褐色	淡橙～淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	80	—
24	586	A7号墳 石室内	土師器	杯・椀	古墳時代	(14.4)	—	5.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ミガキ	外・ヘラケズリ 内・ミガキ	淡褐～淡黄褐色	淡褐～淡黄褐色	淡褐～淡黄褐色	密	良好	126	—
25	557	A7号墳 石室内	土師器	台付 長頸甕	飛鳥時代	7.6	10.0	20.0	ナデ、ミガキ	ナデ、ヘラケズリ 指頭压痕	—	淡黄褐～淡橙色	淡黄褐～淡橙色	淡黄褐色	密	良好	90	—
26	572	A7号墳 墓道	須恵器	杯蓋	古墳時代	(11.9)	—	3.8	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰白色	淡灰白色	淡灰白～淡灰色	密	不良	79	—
27	383 384	A7号墳 墓道	須恵器	杯蓋	飛鳥時代	8.1	—	2.7	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ、 回転ナデ	淡青灰色	淡灰色	紫灰色	密	良好	28	—
28	384	A7号墳 墓道	須恵器	杯身	飛鳥時代	(9.8)	—	(4.3)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	明灰色	淡青灰色	淡紫灰色	密	良好	27	—
29	384	A7号墳 墓道	須恵器	杯身	飛鳥時代	(9.8)	—	(3.6)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	29	—
30	382 384	A7号墳 墓道	須恵器	杯身	飛鳥時代	(9.7)	—	3.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰褐～灰色	灰褐～灰色	灰～褐色	密	良好	122	—
31	383	A7号墳 墓道	須恵器	高杯	飛鳥時代	—	(7.1)	(8.2)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	明灰～青灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	69	—
32	637	A7号墳 墓道	須恵器	壺	吉墳時代	(15.5)	—	(2.5)	ナデ、ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	(スカシ有)	淡灰白色	淡灰白色	暗淡灰色	密	良好	17	—
33	599	A7号墳 石室内	須恵器	壺	不明	(9.3)	—	(9.5)	ナデ、ヘラケズリ タタキヌカ?	ナデ、ヘラケズリ	—	オリーブ灰色	青灰色	茶灰色	粗	良好	16	—

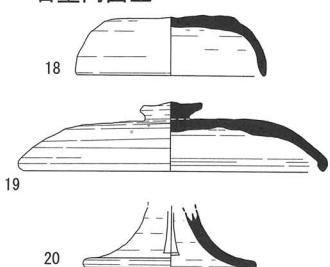
に黒褐色の土が混じることより、隣接する古墳の周溝に堆積した土を巻き上げて墳丘を築造したと考える。A7号墳とは、出土遺物からは時期差がほぼないが、周溝の切り合いよりA8号墳が先行することは前節でも述べたとおりである(図22)。C3号墳との比較では、切り合い関係が平面状においても明瞭であり、A8号墳が先行する。

A8号墳において特徴的であったのは、石室内に残された副葬土器が極端に少なかったことである。そして、墓道のやや東側より、C3号墳周溝に切られる位置に多量の土器、耳環、及びガラス玉が出土した。下層から出土した須恵器の大甕(図版40-60)は、A7号墳・B7号墳・C

掻き出し土器（墓道出土）



石室内出土



周溝及び周辺出土

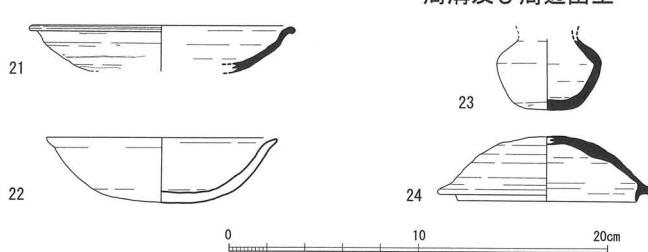


図24 A8号墳出土土器

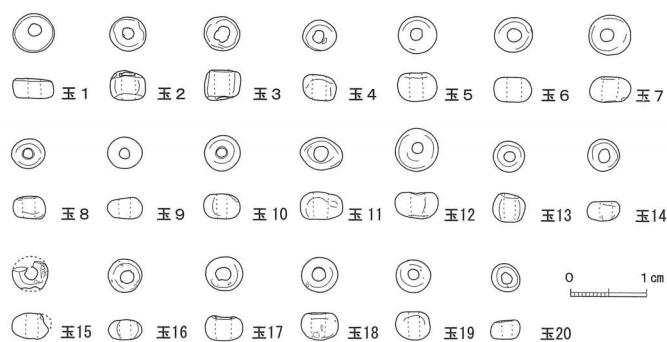


図25 A8号墳出土ガラス玉

3号墳などと同様に、もともとその位置に供献された遺物であろう。その上層から出土していること、土器のみではなく従来は石室内に副葬されている耳環やガラス玉が供伴していること、墓道出土土器の方が石室内出土土器よりも古い特徴を備えていることなどから、周溝内埋葬ではなく、もともと初葬時に副葬された遺物が、追葬のために掻き出されたと言える。また、それを行うために墓道の正面からよけられた可能性がある。

出土遺物

石室床面から出土した土器は、図 24-18～20・22 の 4 点のみであり、21 は床面よりは上層から出土した。20 の須恵器高杯の脚部はスカシが明瞭であることからも、他の 3 点と比べて時代が遡る遺物であり、先行する埋葬主体に副葬されていたと考える。他の 3 点はいずれも 8 世紀（須恵器杯 B 蓋 19）～9 世紀（土師器杯 22）と新しく、22 は奥壁側に据えられた状態で出土したことからも（図版 15）、混入ではなく追葬に伴い、そのために古墳築造当初の埋葬主体を掻き出したといえる。

墓道に掻き出された土器はすべてが須恵器である。他古墳と比較して、平瓶 2～5・提瓶 12・台付長頸壺 16・17 など特異な大物が目立つ。平瓶は少なくとも 4 個体、長頸壺は 2 個体、確認しており、2・3 の小振りな平瓶と 5 の径が大きく取手の痕跡も残る平瓶との間に時期差が存在する。掻きだされた土器は埋葬主体 1 体分ではなかった可能性が高い。10・11 の須恵器杯 H 身 2 点のみは A 8 号墳と A 7 号墳の周溝が交わる箇所で出土しており、A 8 号墳石室内から掻き出された遺物であるとは断定できない。

ガラス玉は出土状況をおさえることができたのは 3 点で、残りの 17 点は出土地の土を洗浄して得ることができた（図 25）。おもに引き延ばし技法で製作されたソーダガラスである。耳環は銅芯に金銀合金を巻いた中実のものであり、2 点は 1 対を成す（注 1）。

（注 1）法量、製作行程等の詳細は、ガラス玉については付論 3、耳環については付論 6 を参照されたい。耳環は第 10 章 第 2 節の図 48 に、他古墳出土のものと合わせて図示した。

第 3 節 A 9 号墳（図版 17）

後世に居住域とされていた調査区の北部に位置し、著しく削平をうけているため、墳丘及び主体部の痕跡を確認することができなかった。周溝の痕跡とその内部及び周辺から出土した遺物が、A 9 号墳の存在を示唆している。直線的な東西溝が直角に北上する様子を検出した方墳である（図 6-溝 073）。溝内の土器は全て須恵器であり、大甕 1 点と図 26 の遺物を含む。溝の北側の肩からは提瓶と有孔円盤が出土した（図版 17 上段）。

第 4 節 A 10 号墳（図版 17 中・下段）

調査区の北端、掘削前は小道が通っていた微高地部において検出した、多数の須恵器を伴う溝及びテラス状のバラス敷きから古墳の存在が示唆される。想定される墳丘の大半は調査区外に位置しているため、埋葬施設や規模などの詳細について明らかにできなかった。周辺か

表 10 A 8 号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	476	土器群A~C	須恵器	平瓶	飛鳥時代	(6.0)	—	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	灰色	密	良好	207	—
2	381	土器群A~C	須恵器	平瓶	飛鳥時代	—	—	(4.8)	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	外・カキメ 内・接合痕	灰色	灰色	灰色	密	良好	210	—
3	435	土器群A~C	須恵器	平瓶	飛鳥時代	4.5	—	(9.0)	回転ナデ、カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	青灰色	青灰色	紫灰～ 青灰色	密	良好	143	—
4	381 723 784	土器群A	須恵器	平瓶	飛鳥時代	—	—	(11.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・回転ヘラケズリ	オリーブ灰～ 明灰色	オリーブ灰～ 淡灰色	灰白色	密	良好	98	—
5	642	土器群A	須恵器	平瓶	古墳時代	(6.2)	—	14.7	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	外・回転ヘラケズリ	灰～淡灰色	灰白～淡灰色	淡灰色	密	良好	96	50
6	451	土器群A~C	須恵器	杯蓋	古墳時代	(10.4)	—	(3.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰～灰色	淡灰色	淡灰～紫灰色	密	良好	147	—
7	435 454	土器群A~C	須恵器	杯身	古墳時代	(9.6)	—	(2.8)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	淡灰色	淡灰色	淡灰色	密	—	146	—
8	382	土器群A~C	須恵器	杯蓋	古墳時代	(12.6)	—	3.8	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	青灰色	淡灰色	密	良好	97	—	
9	381	土器群A~C	須恵器	杯蓋	古墳時代	(12.4)	—	(3.9)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	オリーブ灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	129	—
10	496	土器群C	須恵器	杯身	古墳時代	10.1	—	3.6	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰色	淡灰褐色	不明	密	良好	64	48
11	465	土器群A~C	須恵器	杯身	古墳時代	—	—	(3.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	灰白色	灰白色	密	不良	131	—	
12	781 457 452	土器群A	須恵器	提瓶	古墳時代	9.8	—	27.3	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	カキメ	明灰色	明灰色	不明	密	良好	95	49
13	0060	土器群A~C	須恵器	杯蓋	飛鳥時代	(10.2)	—	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	暗灰色	暗赤褐色	密	良好	227	—
14	389 455 456	土器群A	須恵器	短頸壺	古墳時代	(6.8)	—	8.8	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	明青灰色	明青灰色	灰色	密	良好	99	—
15	438	土器群A~C	須恵器	趣	古墳時代	—	—	(9.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	灰白～灰色	淡灰褐色	淡灰色	密	良好	142	—
16	381 462	土器群B	須恵器	台付長頸壺	古墳時代	—	—	(16.2)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	粗	不良	100	—
17	462 642	土器群A~C	須恵器	台付長頸壺	古墳時代	—	—	(9.3)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	密	不良	144	—	
18	683	A8号墳石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(10.2)	—	3.1	回転ナデ	回転ナデ	外・不調整	淡灰白色	淡灰白色	密	不良	54	—	
19	671 688	A8号墳石室内	須恵器	杯蓋	奈良時代	16.3	—	3.7	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	暗灰～ 淡灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	110	19
20	673 720 453 381	A8号墳石室内	須恵器	高杯	古墳時代	—	(9.2)	(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	(二方向スカシ)	淡青灰色	青灰色	淡紫灰色	密	良好	67	—
21	673	A8号墳石室内	須恵器	皿?	飛鳥時代	(14.1)	—	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	青灰色	青灰色	青灰色	密	良好	63	—
22	687	A8号墳石室内	土師器	杯	飛鳥時代	12.2	—	3.5	ナデ、ミガキ	ナデ	ナデ	淡橙色	淡橙色	密	良好	66	—	
23	674	A8号墳周溝	須恵器	趣	古墳時代	—	—	(3.8)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	灰白色	灰白色	—	密	良好	257	—
24	130	A8号墳周辺	須恵器	杯身	古墳時代	(11.5)	—	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰白色	密	良好	202	—	

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

表 11 A 9 号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	620	A9号墳	須恵器	杯蓋	古墳時代	(11.4)	—	(3.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	青灰色	青灰色	青灰色	密	良好	226	—
2	86	A9号墳	須恵器	杯身	古墳時代	9.6	—	3.5	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	明青灰色	明灰色	暗灰色	密	良好	108	21
3	330	A9号墳	須恵器	杯身	古墳時代	9.3	—	3.5	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	青灰色	明青灰色	灰色	密	良好	109	20
4	288	A9号墳	須恵器	趣	古墳時代	(10.0)	—	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	209	—
5	564	A9号墳	須恵器	趣	古墳時代	—	—	(2.5)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青灰色	灰色	密	良好	206	—
6	436	A9号墳	須恵器	平瓶	飛鳥時代	5.3	—	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	青灰色	青灰色	灰色	密	良好	208	—
7	—	A9号墳	須恵器	台付長頸壺	古墳時代	(9.0)	—	(19.8)	回転ナデ、カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	(二方向スカシ)	灰色	灰色	灰色	密	良好	271	—
8	—	A9号墳	須恵器	台付長頸壺	飛鳥時代	8.0	(11.4)	(9.3)	回転ナデ 回転ヘラケズリ 脚部貼付ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	灰褐色	—	密	良好	299	—
9	30 79	A9号墳	須恵器	平瓶	古墳～飛鳥	18.7	—	9.2	回転ナデ、カキメ 回転ヘラケズリ 指頭圧痕	外・カキメ	回転ナデ	淡灰色	淡灰色	密	良好	300	—	
10	—	A9号墳	須恵器	平瓶	古墳～飛鳥	(9.2)	—	(22.7)	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	外・カキメ	灰色	灰色	—	密	良好	272	—

※ 7・8は接合し、同一個体

ら出土した群集墳に伴う年代の土器は須恵器のみであり、甕を少なくとも 2 個体、その他に杯 H (図 26- 1)、器台の破片 5 などが出土した。上層の搅乱からは耳環 1 点が出土した (第 11 章 図 48- 耳環 15)。群内の古墳で、石室床面以外の墳丘の一部にバラス敷きを検出した例は他にな

い。立地的にも、A ii 支群の項で報告するものの、完全に尾根の上にのった高位地にあることから、調査区外の北側に別支群を形成していく可能性も高い。特に、検出した溝、バラス敷の範囲、及び現田畠の地目境と凹凸から推定する古墳規模は、府道茨木龜岡線を挟んで北側に見える2つの古墳状隆起とともに、調査区内の古墳と比較すると際立って大きい可能性もあり、特異な1基である。

第5節 小結：A ii 支群について

A ii 支群に属する古墳として、A 7～9号墳の3基を確認した。調査によって得ることができた情報量が少ないため、A ii 支群に属すると断定はできないA 9・10号墳も、立地関係上、本章において報告した。調査区中央部、A i 支群のすぐ北側にあるA 6号墳を媒介として、東側の谷にアクセスが可能な一群で、A 8号墳は円墳、それ以外は方墳である。良好な残存状況にあり、詳しい資料を得られたのはA 7・8号墳の2基のみであるが、その2基間において築造時期差はほぼなく、A 7号墳がA 8号墳にわずかに先行する。先行するA 7号墳は、C 1号墳に続いて築造されたA 2号墳とほぼ同時期に築造されたことが、副葬土器などから推測できる。しかしながらA 8号墳ですらも、C 3・4号墳に先行して築造されており、ここからA ii 支群はC 支群よりは、やや先行して形成されたことがわかる。A i 支群同様に谷を上った微高地沿いに位置するA ii 支群も、比較的早い段階に形成されたことがわかる。

(小川)

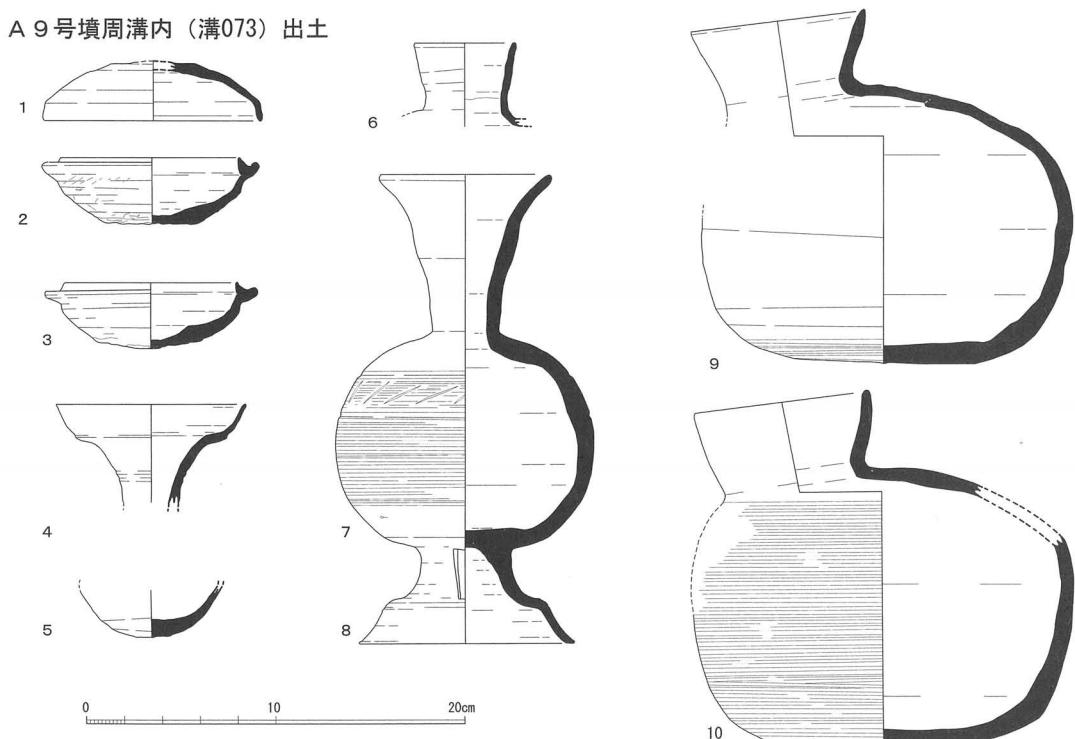


図 26 A 9号墳周溝内出土土器

表 12 A 10号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	114 119	A10号墳 バラス	須恵器	杯蓋	古墳時代	11.2	—	4.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整 回転ヘラケズリ?	淡灰色	明灰色	明灰色	密	不良	62	—
2	114	A10号墳	須恵器	壺?	不明	(9.8)	—	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰白色	灰白色	密	良好	246	—
3	112	A10号墳 溝002	須恵器	壺?	不明	(9.4)	—	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰白色	灰白色	密	良好	228	—
4	131	A10号墳	須恵器	台付 長頸壺	飛鳥時代	8.2	—	(21.4)	ナデ、ヘラケズリ 回転ケズリ	回転ナデ	(脚部 二方向スカシ)	明灰～灰色	灰色	赤紫色	密	良好	148	—
5	112	A10号墳	須恵器	器台	古墳時代	—	—	(6.2)	回転ナデ、 回転ケズリ	回転ナデ	—	暗灰色	灰白色	赤紫色	密	良好	149	—
6	17 58 59	A10号墳 溝008	須恵器	甕	古墳時代	(18.2)	—	(5.7)	回転ナデ、カキメ、 タタキ	回転ナデ、 当て具痕	—	灰色	灰色	—	密	良好	222 B	—
7	060	A10号墳 溝002	須恵器	甕	不明	(20.6)	—	(5.9)	回転ナデ、カキメ、 タタキ	回転ナデ、 当て具痕	—	灰色	灰色	—	密	良好	233	—

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

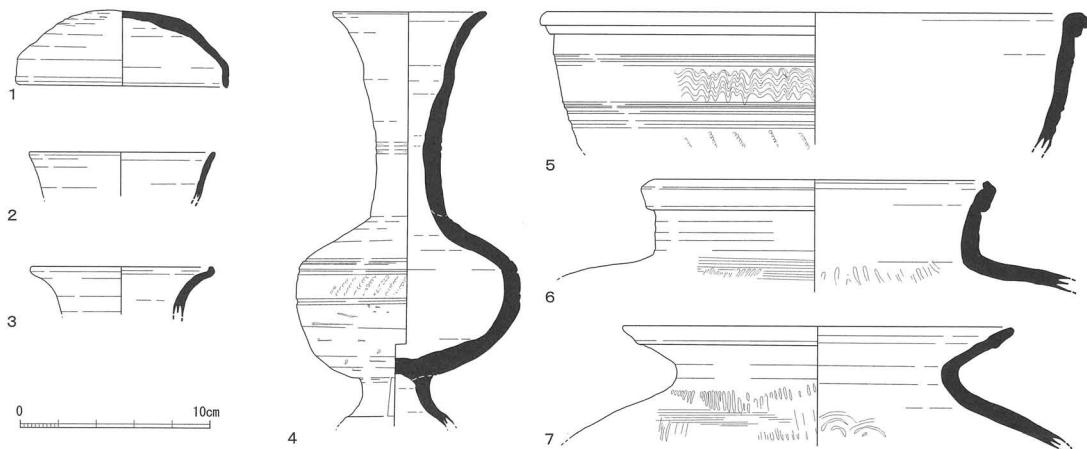


図 27 A 10号墳出土土器

第8章 B支群の調査成果

第1節 B1号墳（図版18～20）

墳丘・横穴式石室

調査区内の微高地部南東端に位置するB1号墳は、当群集墳内で最大規模の墳丘と横穴式石室をもつ。平面プランは無袖の横穴式石室とほぼ同一であるが、石室奥壁から2.9m付近において立柱を意識したような巨石が両側壁に立つ。その地点より開口部側でも石室幅は変わらないが、その立柱石のみやや内側に入った位置に据えられていた（図版18下段）。床には3～5cm大のバラスがびっしりと敷き詰められている。棺釘2点の出土より、少なくとも木棺1基が埋葬されていたことがわかる。石室の大きさや、石室内から出土した副葬土器のばらつきからも、繰り返し追葬は行われていたであろう。出土遺物は極端に少なく、石室検出時は、中世時の土地改変によって、他のどの石室よりも丁寧に内部に拳大～人頭大の礫がつめこまれた状況であった。

石室開口部と墳丘の南側約3分の1は後世の離壇造成によって現状では消失てしまっているが、推定される墳丘裾とほぼ一致する位置に石組み暗渠が弧を描いて造られている（図版19上段）。この不自然な形状は、この暗渠がB1号墳の墳丘裾が大幅に削られる前に築造されたからであろう。削平を受けた墳丘断面の観察により、墳丘に盛土を1層盛った後にその盛土と地山を掘り込み、側壁の基底部を据え、に側壁の石と盛土を交互に積むことを繰り返した、という墓壙の構築過程が復原可能である（図28・図版20-3段目）。石室の側壁から約2.8m外側に墳丘内排水溝を（東側のみであるが）確認した。周溝は両肩の傾斜が比較的急で、特に石室背面部において深く、U字形の底をもつ（図29）。周溝の東側はA3号墳との間を隔てる谷にぬけ、後世の井戸状遺構もあり、西側は西の谷に抜ける位置で、南へ回る途中に石室の両側で不明瞭になって

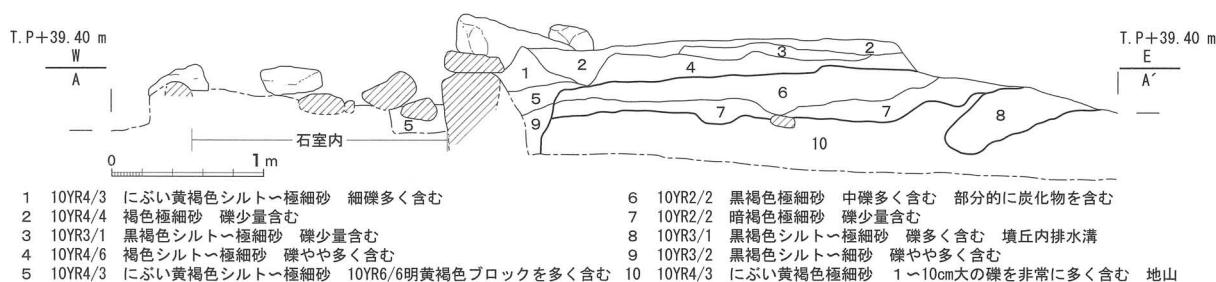


図28 B1号墳墳丘断面

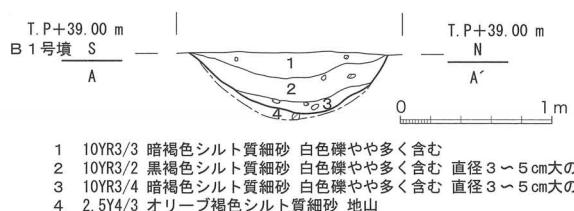


図29 B1号墳周溝断面図

表 13 B 1号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	568	B1号墳	須恵器	不明	不明	(7.3)	—	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	淡灰色	明青灰色	灰白色	密	良好	140	—
2	629	B1号墳	須恵器	短頸壺	古墳～飛鳥	4.8	—	4.8	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	淡灰～明灰色	明灰～淡青灰色	淡灰色	密	良好	133	—
3	628	B1号墳	須恵器	長頸壺	飛鳥時代	—	—	(6.9)	ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	—	明灰色	青灰色	暗紫灰色	密	良好	138	—
4	631	B1号墳	土師器	杯	飛鳥時代	11.0	—	3.0	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	外・ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	135	—
5	625 632 669	B1号墳	土師器	杯	古代	(13.8)	—	3.5	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	指頭圧痕	淡褐～淡赤褐色	淡褐～淡赤褐色	淡褐色	密	良好	137	—
6	630	B1号墳	土師器	杯	古代	(14.2)	—	(3.9)	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	—	淡褐～明赤褐色	淡褐色	淡褐色	密	良好	134	—
7	633	B1号墳	土師器	杯	飛鳥時代	17.0	—	5.0	ナデ、ヘラケズリ ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	141	—	
8	667 668	B1号墳	土師器	杯	飛鳥時代	(17.4)	—	(5.4)	ナデ、ミガキ、 指頭圧痕	ナデ、ミガキ	外・指頭圧痕	不明	不明	不明	—	—	136	—
9	627 635	B1号墳	土師器	杯	飛鳥時代	17.3	—	7.6	ナデ、ヘラケズリ ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	139	—	
10	468	B1号墳	須恵器	高杯蓋	古墳時代	8.9	—	3.2	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ・ 回転ナデ	明灰色	明灰色	灰色	密	良好	132	—
11	199	B1号墳	須恵器	杯B	飛鳥時代	—	(14.8)	(1.4)	回転ナデ、 回転ケズリ	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色	青灰色	暗赤褐色	密	良好	225	—

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

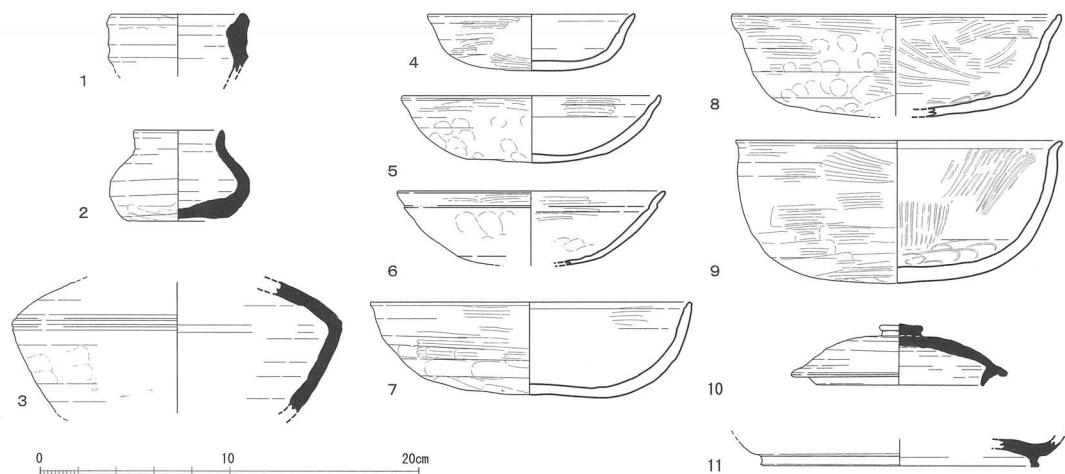


図 30 B 1号墳出土土器

いる。西の谷に位置するB 7号墳はこれに先行して築造された。谷及び後世の遺構を間に隔てるため、A 3号墳との切り合い関係は断面からは明白でないが、周溝のカーブの明瞭さ、地山に礫が多く混じり掘削が困難で、しかも谷斜面に極端に近いという立地の悪さ、墳丘内排水溝の存在などから、この古墳が群内で最も新しく築造された古墳であると考える。

出土遺物

石室内の出土遺物は極端に少なく、9点の土器と2点の棺釘のみである。図30-9の土師器杯Cは金属器模倣の際立った良品である。須恵器高杯蓋10は周溝内のちょうど石室主軸の背面に当たる場所から出土した。その地点からは、周溝の中でも特に集中して須恵器が出土した。

第2節 B 2号墳（図版 21）

概要

B 1号墳の北東に位置する。墳丘は完全に消失し、周溝及び石室の残存状況も悪かったが、横穴式石室に伴う排水溝の石組みを検出した。排水溝の北では、大きな穴の中に落し込まれ割られ

た状態の石室石材の巨石、及び横穴式石室の平面プランを明瞭に示す側壁の石の抜き取り穴を検出した。復元できる石室は、使用されている石材からも群内で最も規模の大きな部類に属する。長方形の玄室に羨道を意識した構造といえる石組みの立派な排水溝が取り付く。排水溝はB 1号墳東側の谷芯へ向かう。

第3節 B 3号墳（図版 22）

墳丘の南半分が完全に削平された状態で検出した古墳である。石室側壁の石の抜き取り穴と床面の礫敷きの一部を検出したことから、石室奥壁が墳丘の中心近くに位置するタイプの横穴式石室を伴う円墳であることがわかった。石室の南側の大半が消失しているため、袖の有無をはじめとする構造の詳細は不明なままである。礫敷きの上層の石は動かされた痕跡があったものの、床面に座っている石は整然と目が詰まった状態で敷かれており、石の並ぶ方向から石室主軸方向が推定できる。

石室及び周溝から、B 3号墳に伴うと断定できる土器は出土しなかったが、周辺より1点の須恵器杯H身（図34-16）が出土した。石室内の礫床上では多数の棺釘が出土した（注1）。

（注1）釘の出土位置は図32、釘の実測図は図48を参照されたい。

第4節 B 4号墳（図版 23）

概要

調査区の中央、B 2号墳の北に位置する方墳である。主体部である横穴式石室は著しく破壊されているが、側壁の石の抜き取り穴から平面プランを複原することができた。礫床

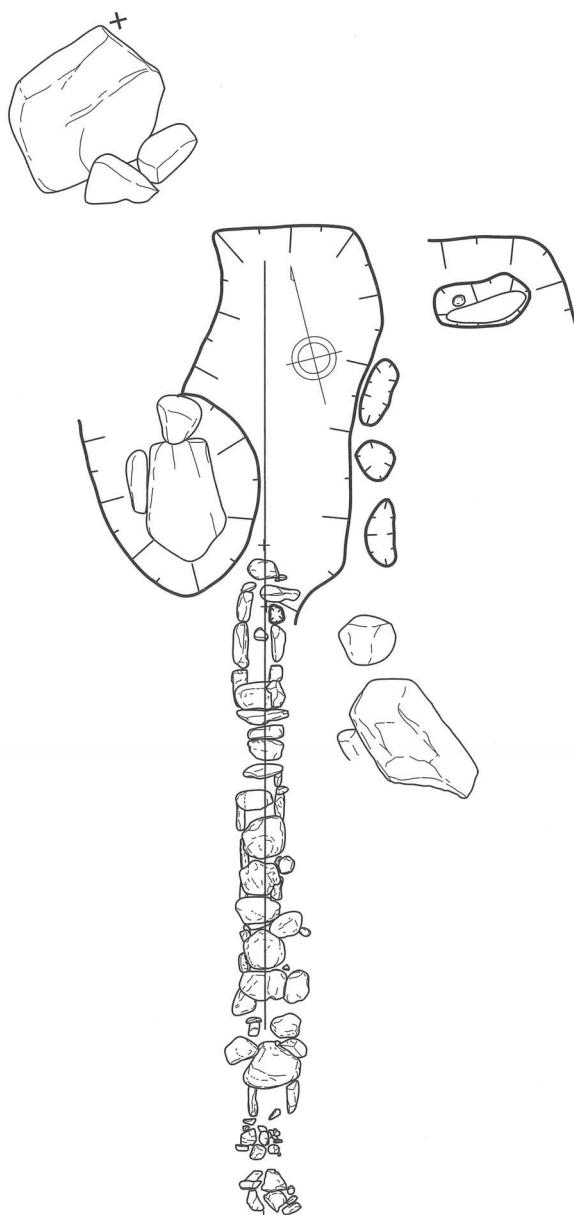


図31 B 2号墳横穴式石室

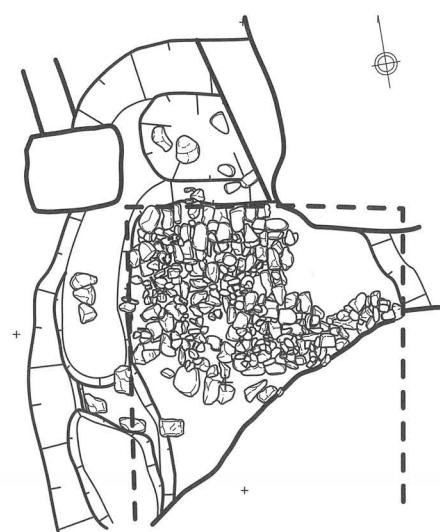


図32 B 3号墳横穴式石室

表 14 B 2・3・4号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			実測	写真番号	
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面			
1	515	B4号墳石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(9.8)	—	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	—	青灰色	青灰色	—	密	良好	255
2	549	B4号墳石室内	須恵器	蓋	古墳時代	(10.0)	—	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	234
3	592	B4号墳石室内	須恵器	杯蓋	飛鳥時代	(9.8)	—	(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	外・不調整	灰褐色	灰褐色	—	密	不良	298 B
4	515	B4号墳石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(10.4)	—	(2.5)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰色	黒灰色	—	密	良好	256
5	553	B4号墳石室内	須恵器	蓋	古墳時代	(12.0)	—	(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	249
6	553	B4号墳石室内	須恵器	杯身	古墳時代	(9.4)	—	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	251
7	553	B4号墳石室内	須恵器	杯蓋	古墳~飛鳥	(10.7)	—	3.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	宝珠ツマミ 回転ナデ	赤灰色	灰色	暗灰色	密	良好	231
8	553	B4号墳石室内	須恵器	蓋	飛鳥時代	(10.8)	—	(1.8)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	褐色	褐色	—	密	不良	259
9	515	B4号墳石室内	須恵器	蓋	古墳時代	(11.0)	—	(0.8)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	—	密	良好	253
10	515	B4号墳石室内	須恵器	蓋	古墳時代	(11.4)	—	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	—	褐灰色	褐灰色	—	密	不良	252
11	513	B4号墳	土師器	甕	飛鳥時代	(10.8)	—	(8.5)	ナデ、ハケメ	ナデ、ヘラケズリ	—	黄橙色	黄橙色	—	密	良好	287
12	—	B4号墳周溝内	須恵器	平瓶?	不明	(6.6)	—	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰褐色	灰褐色	—	密	不良	296
13	433 460 721	B4号墳周溝内	須恵器	短頸甕	古墳時代	(11.0)	—	(16.4)	回転ナデ、カキメ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	良好	274
14	—	B4号墳周溝内	土師器	高杯?	不明	—	—	(2.0)	ナデ	ナデ	—	黄橙色	黄橙色	—	密	良好	290
15	—	B4号墳周溝内	土師器	椀	古代	(13.9)	—	(5.6)	ナデ	指頭圧痕	—	黄白色	黄白色	—	密	不良	289
16	618 B3・4号	B3・4号墳周溝内	須恵器	杯身	飛鳥時代	10.2	—	(3.6)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰~灰色 オリーブ味	淡灰色白味	淡白色	密	良好	121
17	—	B2号墳周溝内	土師器	長頸甕	飛鳥時代	(8.6)	—	(6.6)	ナデ、指オサエ、 ハケメ	ナデ、 ミガキ、ハケメ	—	黄橙色	黄橙色	—	密	不良	301

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

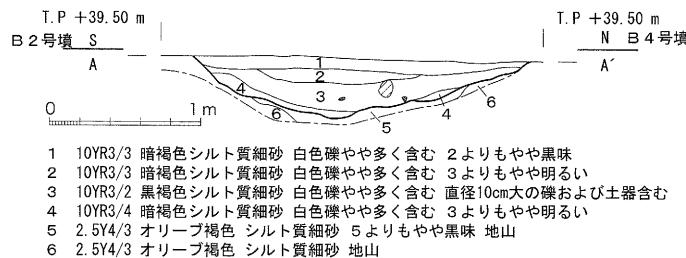
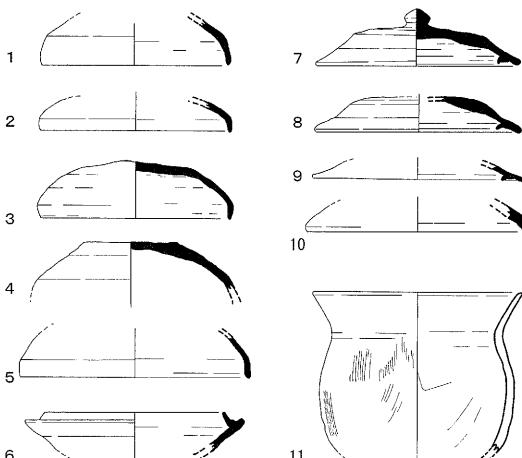
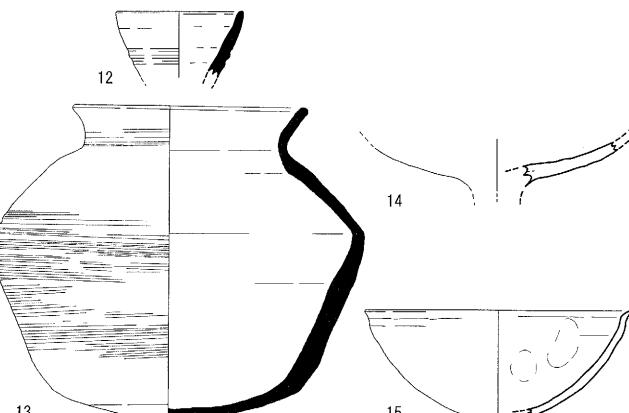


図 33 B 3・4号墳間周溝断面

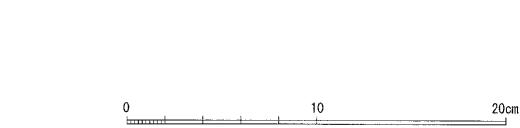
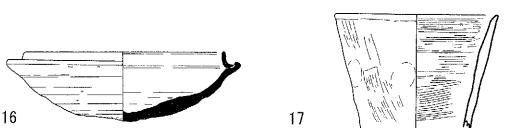
B 4号墳石室内出土



B 4号墳周溝内出土



B 3・4号墳間周溝出土



B 2号墳周溝出土

図 34 B 2・3・4号墳出土土器

をもつ無袖の横穴式石室であった。B 2号墳と共有する周溝の断面から、B 4号墳の方が後に築造されたことがわかる（図33）。石室開口部付近の石の抜き取り穴より、陶棺の足及び身の破片が出土し、少なくとも1基の陶棺が埋葬されていた。礫床の隙間より、琥珀製の管玉が出土した（注1）。

出土遺物

石室内は攪乱が著しく、床の礫もほとんど剥がれてしまっているため、埋葬時の原位置ではないであろう。石室の範囲内から須恵器杯H蓋5点（図34-1～5）・身6・杯G蓋3点（7～9）・土師器甕11などが出で、周溝からは須恵器の短頸壺13・土師器高杯14などが出土した。

（注1）琥珀の詳細については付論4を参照されたい。

第5節 B 7号墳（巻頭図版2上段・図版24）

概要

調査区南西隅の谷間に築造されており、無袖の横穴式石室を伴う。群内の立地上のスペースから、円墳であったと推定する。石室は、中近世における耕作地獲得のための土地改変の影響を著しく受けており、上層にはB 1号墳に次いで多量の礫が投げ込まれていたが、残されていた側壁及び石の抜き取り穴は、石室の平面プランを把握するに充分であった。石室主軸及び墓道がB 1号墳の東にある谷の方を向いているため、B支

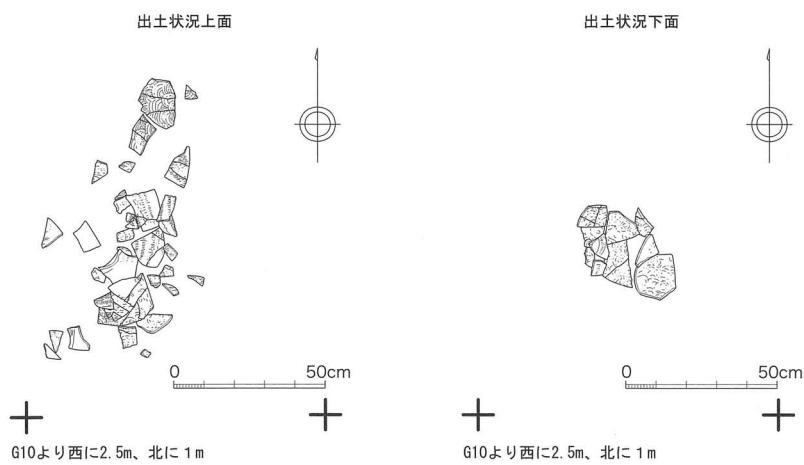


図35 B 7号墳墓道大甕出土状況

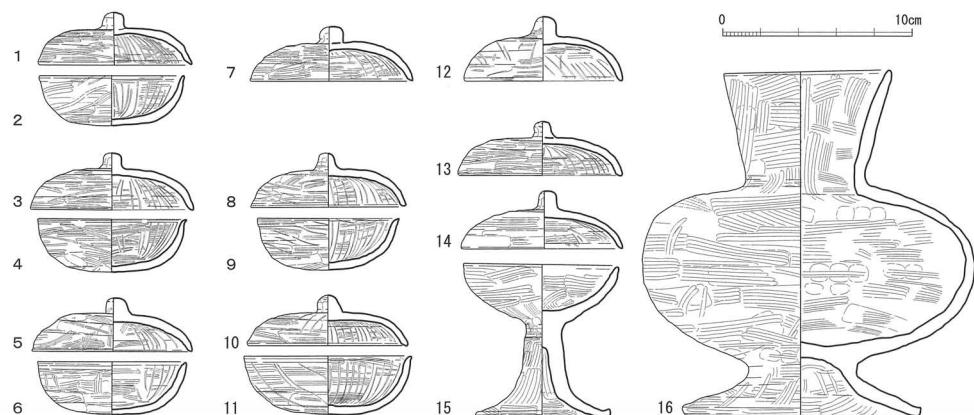


図36 B 7号墳出土土器

表 15 B 7号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	489	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.2	—	2.8	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ、ミガキ	淡褐～赤褐色	淡赤褐色	明赤褐色	密	良好	56	23
2	484	B7号墳	土師器	杯	古墳～飛鳥	7.7	—	2.7	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	外・ヘラケズリ ミガキ	淡橙～淡赤褐色	淡赤褐色	にぶい赤褐色	密	良好	57	24
3	491	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.2	—	3.0	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ、ミガキ	淡褐～淡褐色	淡褐～淡褐色	赤褐色	密	良好	60	—
4	486	B7号墳	土師器	杯	古墳～飛鳥	7.9	—	2.8	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	外・ヘラケズリ ミガキ	赤褐色	赤褐色	赤褐色	密	良好	58	—
5	492	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.6	—	2.8	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	外・ヘラケズリ ツマミ、ミガキ	淡赤褐～赤褐色	淡赤褐～赤褐色	赤褐色	密	良好	59	—
6	486	B7号墳	土師器	杯	古墳～飛鳥	8.0	—	2.8	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	外・ヘラケズリ ミガキ	淡赤褐～明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	75	—
7	492	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.1	—	2.9	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ・ヘラケズリ ミガキ	淡赤褐～明赤褐色	淡赤褐～明赤褐色	明赤褐色	密	良好	76	—
8	493	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.2	—	2.9	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	外・ヘラケズリ ツマミ、ミガキ	淡赤褐色	明赤褐色	淡赤褐～明赤褐色	密	良好	87	27
9	495	B7号墳	土師器	杯	古墳～飛鳥	7.5	—	2.7	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ナデ、ミガキ	淡橙～淡赤褐色	淡赤褐色	不明	密	良好	86	28
10	496	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.5	—	2.7	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ・ヘラケズリ ミガキ	明赤褐色	明赤褐～淡赤褐色	不明	密	良好	85	25
11	494	B7号墳	土師器	杯	古墳～飛鳥	8.9	—	3.1	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ナデ、ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	淡褐色	密	良好	84	26
12	497	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.4	—	3.4	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ、ミガキ	淡褐～赤褐色	淡褐～赤褐色	赤褐色	密	良好	61	—
13	491	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.8	—	2.9	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ・ヘラケズリ ミガキ	淡赤褐～明赤褐色	淡褐～明赤褐色	淡褐～明赤褐色	密	良好	78	—
14	497	B7号墳	土師器	杯蓋	古墳～飛鳥	8.6	—	3.1	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ツマミ・ヘラケズリ ミガキ	淡橙～明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	74	—
15	485	B7号墳	土師器	高杯	古墳～飛鳥	8.3	7.2	8.1	ナデ、ヘラケズリ ヘラミガキ	ナデ、ミガキ 放射暗文	ナデ、ミガキ	淡褐～淡赤褐色	淡褐～淡赤褐色	淡褐色	密	良好	88	30
16	489	B7号墳	土師器	台付長頸壺	古墳～飛鳥	8.8	12.6	18.2	ナデ、ヘラケズリ、 ヘラミガキ、 指頭圧痕	ナデ、ミガキ、 ヘラミガキ、 指頭圧痕	ナデ、ミガキ	明赤褐～淡赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	89	29

※（ ）内数値は反転復元後の数値及び残存高

群に属することがわかる。墓道とB 1号墳の周溝とが交わる付近から、須恵器の大甕が出土した(図35)。石室の石の抜き取り穴付近からもこの甕の破片が1点出土しており、甕はこの古墳に伴って埋納された遺物であると推定する。谷間という他の古墳に比べて極端に粗悪な立地条件が、B 7号墳の築造時期も比較的遅い段階にあることを示している。立地条件のよい微高地が他古墳によってすでに埋められた後に、空いたスペースを探して築造されたのであろう。

出土遺物

前述の大甕以外の出土土器はすべて土師器である。石室内から須恵器杯Gもしくは金属器椀の模倣と思われる、小振りでつまみを持った杯蓋9点と対になる杯身5点(図36-1～14)・低脚高杯15・台付長頸壺16がほぼ完形の状態で出土した。供獻土器に全く須恵器が混じらない非常に特徴的な一括資料である。加えて1対の耳環(付論6)及び人骨(付論7)が出土した。出土土器の一括性から埋葬主体は1体のみであった可能性は高いが、石室が著しく破壊されていること、人骨の出土位置は奥壁近くであったにもかかわらず膝から下の骨ばかりであり、主体も動かされていることから、確定はできない。

第6節 B 8号墳(図版25上段)

調査区の西端に位置し、調査区内で検出できたのは墳丘及び主体部の東半分のみであった。主体部は削平が著しく石室の石は一石も残っていないが、石の抜き取り穴の検出状況より、横穴式石室が存在したことがわかる。石の抜き取り穴や石室内部から棺釘が出土し、少なくとも1基は木棺が埋葬されていた。墳丘及び石室の南半分は後世の離壇造成により消失している。周溝の切り合いからも、周辺に隣接する古墳に先行して築造されたと考える。

表 16 B 8号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1 215 38	B8号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳時代	(13.4)	—	4.2	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰褐色	暗灰白色	淡灰色	粗	良好	49	—	
2 338	B8号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	11.6	—	4.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	不明	不明	不明	粗	不良	43	22	
3 340	B8号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳時代	11.0	—	4.1	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	オリーブ褐色	灰白色	灰色	密	良好	45	—	
4 275	B8号墳 石室内	須恵器	短頸壺	古墳時代	(7.0)	—	(3.9)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	青灰～淡灰色	淡灰褐色	青灰色	粗	良好	46	—	
5 271	B8号墳 石室内	須恵器	短頸壺	古墳時代	(9.5)	—	(3.1)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰白色	灰白色	灰白色	密	良好	48	—	
6 105 339	B8号墳 石室内	須恵器	長頸壺	飛鳥時代	9.3	—	(13.0)	回転ナデ、 しづり痕	回転ナデ	—	明青灰色	明青灰色	明青灰色	密	良好	71	—	
7 38	B8号墳 石室内	須恵器	高杯	飛鳥時代	(11.6)	—	(2.9)	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	灰褐色	灰白褐色	灰白～紫灰色	密	良好	44	—	
8 216	B8号墳 石室内	土師器	甕	古墳時代	(11.6)	—	(5.1)	ナデ、ハケヌ、 ヘラケズリ	ナデ、ヘラケズリ	—	淡橙色	淡橙色	淡褐色	密	良好	70	—	

※ () 内数值は反転復元後の数値及び残存高

出土遺物は多くはないが、石室内から土器が出土している。主なものに、須恵器杯H蓋（図38- 1）・身2点（2・3）・土師器短頸壺4・短頸壺5・長頸壺6・高杯7・甕8があった。

1～3の杯Hは、本古墳群から出土した杯のなかでは径が最も大きく、天井や底部の調整も、ヘラ切り後は不調整であるが調整が及ばない範囲がせまく、比較的丁寧なつくりである。そのため、この古墳の初葬時期は他古墳よりやや時期を空けて、7世紀第1四半期頃まで遡る可能性がある。長頸壺6や甕7は残存率が高くないため確定はできないが、時代が下る可能性があり、追葬もしくは石室の再利用が行われていた可能性がある。

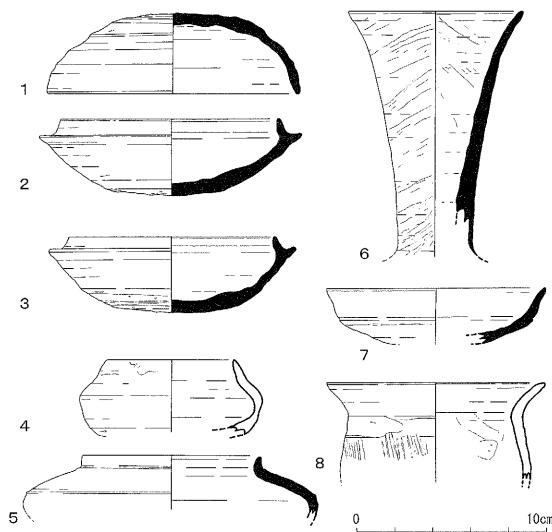


図 37 B 8号墳出土土器

第7節 小結：B 支群について

B 支群に属する古墳として、B 1～4・7・8の6基の古墳を明瞭に検出した。B 5・6号墳周辺は微高地部にあたるため、墳丘部の削平は著しく、各周溝の痕跡より、存在の可能性が示唆されている、としか言えない。尾根沿いの立地条件のよい位置から築造された。まず、谷を上がってすぐの位置に、B 2・B 8号墳が、次いでB 4号墳が造られ支群が北の高台側へ形成されていったのである。B 1号墳及び7号墳のみ例外的に、最後に空いていた立地条件の悪いスペースを埋めるように築造された。B 7号墳はB 1号墳にわずかに先行する。支群内の全ての古墳はA 3・B 1号墳間から南へ抜ける谷間にと墓道が導かれている。A 支群との形成時期の差はほぼないと考える。

(小川)

第9章 C支群の調査成果

第1節 C1号墳（図版25・26）

概要

調査区の南東隅に位置する、横穴式石室を伴う方墳である。無袖の横穴式石室の主軸は玄室内部ではA支群側を向くが（注1）、開口部付近で屈曲し、墓道は東側の谷へ下る。西側に隣接するA4号墳と共有する周溝の断面から、C1号墳が先行して築造された（図38）。副葬土器の検討からも、矛盾しない。石室の玄室幅、墳丘規模ともに群内で一番小さく、一般的に時代が下るほど古墳及び石室の規模が縮小されていくという畿内における典型的な横穴式石室の発展傾向には当てはまらない。石室奥壁と北側の墳丘裾の距離も約1mと非常に近く、墳丘も石室を覆うのみの小規模なものである。背後に位置するC2号墳は、墳丘の東側大半が消失しているが、西側周溝の一部を検出し、C1号墳より後に築造されている。

出土遺物

石室内から出土した副葬土器は須恵器のみである（図39）。蓋杯は杯H（1～6）のみの出土であり、丸みがあり径が大きく取手の痕跡が残る平瓶8、同じく径が大きく取手の痕跡が残る提瓶10、他石室出土のものと比べても高い長脚2段スカシと杯部の底近くに装飾をもつ高杯7などの遺物もすべて古い特徴を見せている。杯Hはすべて焼成が悪く、暗赤やベージュに近い色をしている。土器の他には、耳環が1対出土した。石室開口部付近からは、陶棺の破片が出土し、埋葬主体に少なくとも1基は陶棺が使用されていたことがわかる。

古墳築造時のものではないが、石室からは第4章 第4節であげた、黒色土器と瓦器の椀（図39-11～13）が出土した。石室の床面に近いところで出土したため、混入品などではなく時期を隔てた墓利用、つまり石室を埋葬施設であるという認識は継続している状態で、再利用をしたことによる遺物であると考える。開口部付近から出土した陶棺の破片は、その際に引き出された残骸であろう。

（注1）表3古墳一覧の主軸角度参照。

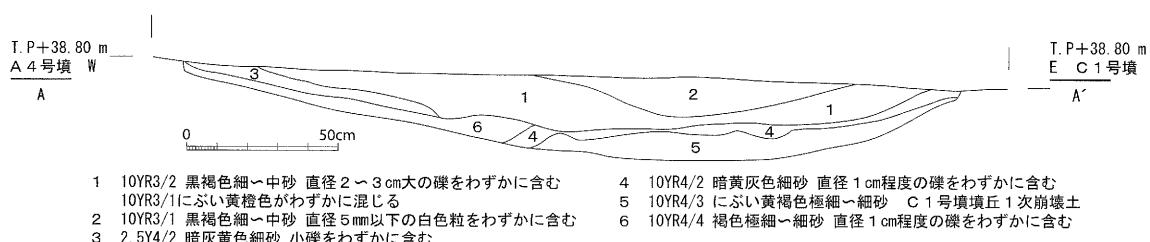


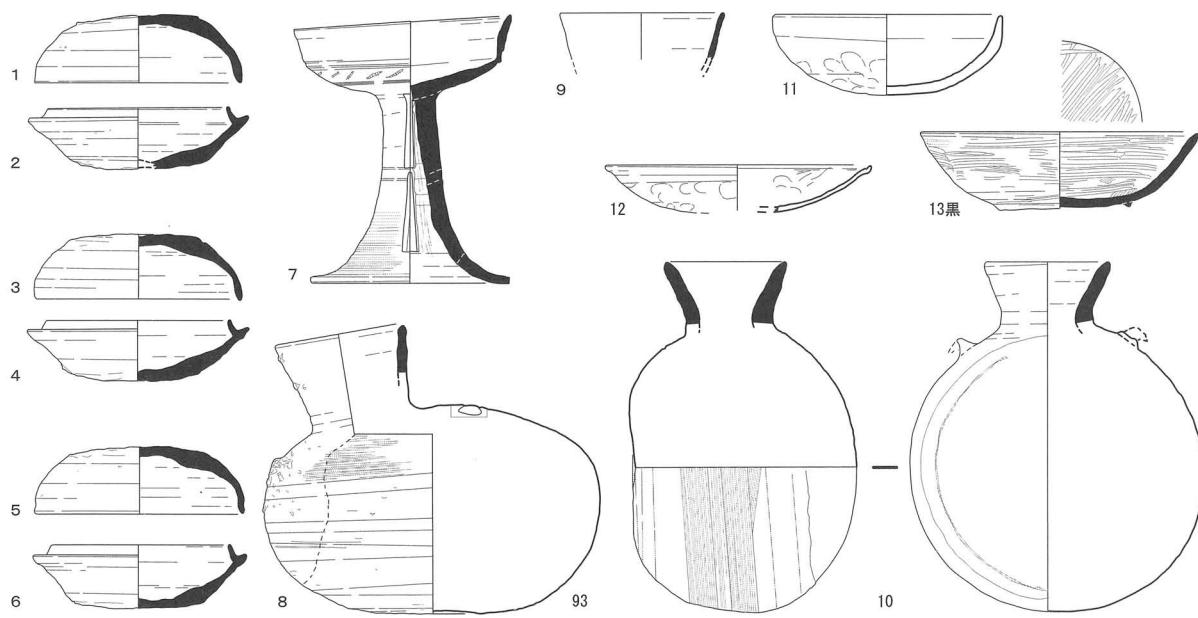
図38 A4・C1号墳間周溝断面

表 17 C 1号墳出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測番号	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1 372	C1号墳 石室内	須恵器	環蓋	古墳時代	11.1	—	3.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	密	不良	119	—	
2 370	C1号墳 石室内	須恵器	环身	古墳時代	9.7	—	3.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	密	不良	120	—	
3 373	C1号墳 石室内	須恵器	环蓋	古墳時代	10.9	—	3.5	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	暗赤褐～ 淡黄褐色	淡赤褐色	淡褐色	粗	不良	104	35	
4 379	C1号墳 石室内	須恵器	环身	古墳時代	9.8	—	3.2	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	暗赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	密	—	103	36	
5 374	C1号墳 石室内	須恵器	环蓋	古墳時代	11.5	—	3.5	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡褐色	淡褐色	不明	密	不良	101	33	
6 375	C1号墳 石室内	須恵器	环身	古墳時代	9.5	—	3.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡褐～ 淡赤褐色	淡赤褐色	不明	粗	不良	102	34	
7 377	C1号墳 石室内	須恵器	高环	古墳時代	11.6	10.6	13.9	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	脚部カキメ	淡灰褐色	淡灰褐色	粗	不良	127	—		
8 368	C1号墳 石室内	須恵器	平瓶	古墳時代	7.0	—	17.9	回転ナデ、カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラケズリ	淡灰色	淡オリーブ灰	淡紫灰色	密	良好	93	32	
9 312	C1号墳 石室内	須恵器	平瓶?	古墳～ 飛鳥	(8.6)	—	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	黑灰色	青紫灰色	不明	密	良好	260	—	
10 376	C1号墳 石室内	須恵器	提瓶	古墳時代	6.6	—	18.4	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	カキメ	淡灰～ 淡オリーブ灰色	淡灰色	暗紫灰色	密	良好	94	31	
11 371	C1号墳 石室内	土師器	坏	古代	12.2	—	4.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	指頭圧痕	淡橙色	淡橙色	淡褐色	粗	—	125	—	
12 414	C1号墳 石室内	土師器	皿	古代	14.1	—	(2.5)	ナデ	ナデ	指頭圧痕	淡赤褐色～ 淡褐色	淡赤褐色	淡褐色	密	良好	65	—	
13 294	C1号墳 石室内	黒色 土器	椀	奈良・ 平安 時代	14.7	6.4	4.1	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ、 貼付け高台	淡赤褐色	黑色	淡赤褐色	密	良好	130	—	
14 172	C1号墳 石室内	須恵器	甕 (体部)	古墳 時代	—	—	—	タタキ、カキメ	当て具痕	—	黑～灰色	紫灰色	青灰色	密	良好	218	—	
15 172	C1号墳 石室内	須恵器	甕 (体部)	古墳 時代	—	—	—	タタキ	当て具痕	—	青灰色	青灰色	赤褐色	密	良好	219	—	
16 172	C1号墳 石室内	須恵器	甕	古墳 時代	(22.6)	—	(3.9)	回転ナデ	回転ナデ	—	灰色	灰色	灰色	密	良好	217	—	

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

石室内出土



C1周辺

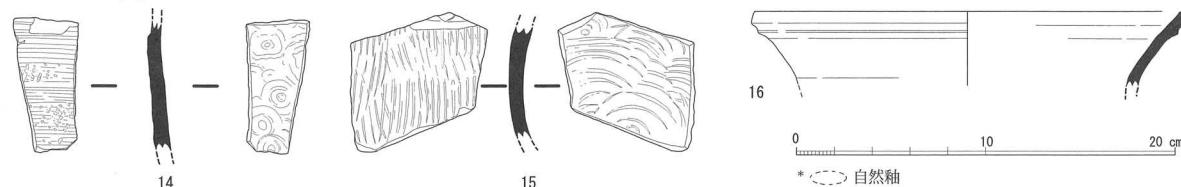


図 39 C 1号墳出土土器

第2節 C 2号墳及び土壙墓（図版 27）

前節でも触れたように、C 1号墳の北側に築造され、周溝の西側一部のみ検出した円墳がC 2号墳である。墳丘や主体についての情報は消失しているが、周溝内に土壙墓を検出した。周溝堆積土を掘削した後に、残存している周溝の北端と中央よりやや南において溝幅が不安定に広がった位置との2カ所から土壙を検出した。北側の土壙は掘削後も遺物は何もなく、単なる土壙、もしくはA 3・B 1号墳間の谷で検出したような井戸状の溜まりであり、埋土からすれば祭祀土坑であった可能性もある。南側の土壙からは、完形品の土器が7点出土し（図41-1～9）、土壙墓であることがわかった（図40）。

図41-2・4の杯H身はともに立ち上がりが低く、それらの底部及び対になる蓋1・3の天井部はヘラ切り後の調整がない。2の身の底部にはヘラ記号のようなものが見える。5の高杯は低

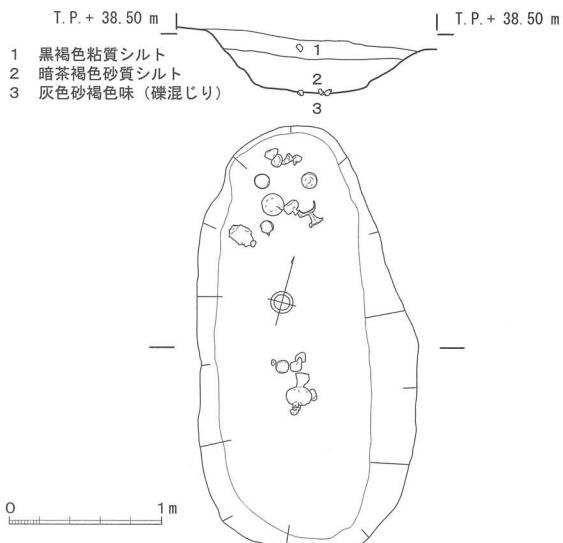


図40 土壙墓

脚化がすすみ2カ所のスカシも形骸化している。6の瓶は壺のように見えるが、体部と口縁部は一体としてつくられたものではなく、口縁部をあとで取り付けた痕跡が残り、平瓶に近い器種である。土師器杯は2点ともミガキが密に施され、内面には暗文が描かれている。8にはもともとは牛角取手がとりつけられていた。全体を通じてみて、明らかにC 1号墳よりは新しい特徴を備えた土器の一括資料である。C 2号墳はこの土壙墓とC 1号墳との築造時期の間に造られた。

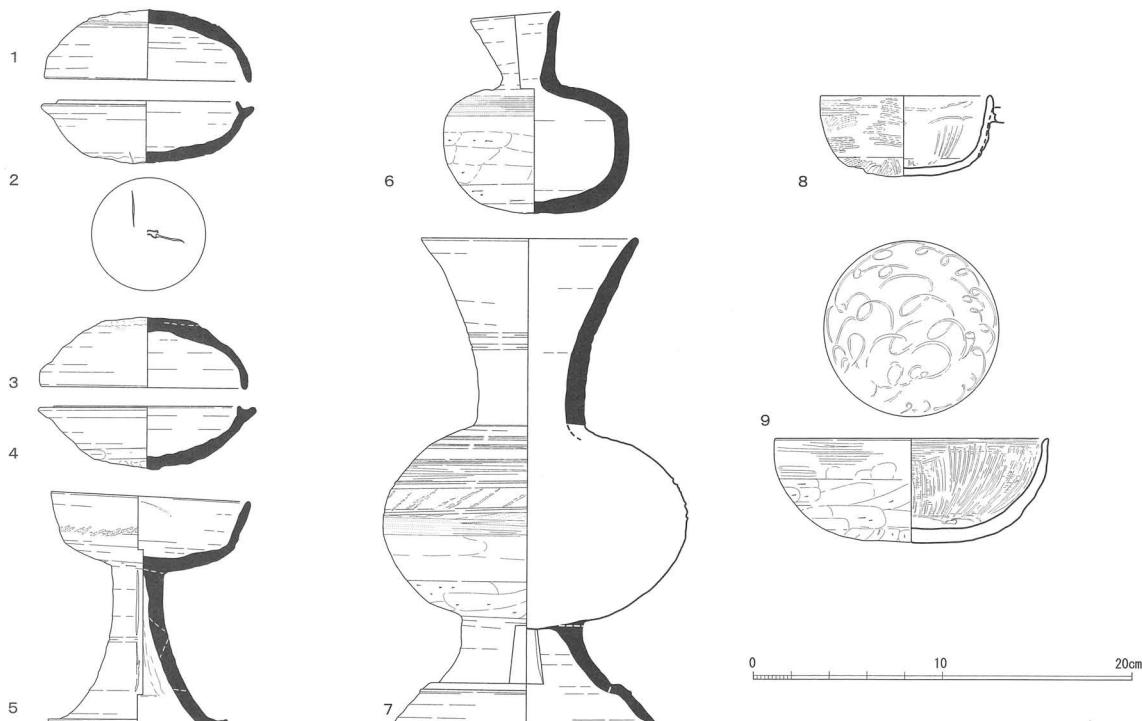


図41 土壙墓出土土器一覧

表 18 土壙墓出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成実測写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面		
1	510	土壙墓	須恵器	杯蓋	古墳~飛鳥	11.0	—	3.6	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	明オリーブ灰色	淡オリーブ灰色	不明	密	良好 36 52
2	691	土壙墓	須恵器	杯身	古墳~飛鳥	9.1	—	3.25	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	ヘラ記号	淡灰褐色	淡灰色	不明	密 良好 37 53
3	507	土壙墓	須恵器	杯蓋	古墳~飛鳥	11.2	—	3.6	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰褐色	淡灰褐色	青灰色	密 不良 35 54	
4	509	土壙墓	須恵器	杯身	古墳~飛鳥	9.8	—	3.3	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡灰褐色	淡灰色	淡灰白色?	密 良好 38 55	
5	505	土壙墓	須恵器	高杯	古墳~飛鳥	10.5	—	12.3	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	脚部二方向二段スカシ痕跡	淡灰色	淡灰色	粗	良好 116 56	
6	506	土壙墓	須恵器	瓶	古墳~飛鳥	4.7	—	10.7	回転ナデ、カキメ回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラケズリ	淡灰~明青灰色	青灰色	淡灰色	密 良好 117 57	
7	512 695	土壙墓	須恵器	台付長頸壺	古墳~飛鳥	11.4	14.0	25.8	回転ナデ、カキメ回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラケズリ 脚部二方向スカシ	淡灰色	淡灰色	灰~淡灰色	密 良好 118 51	
8	508	土壙墓	土師器	取手付椀	古墳~飛鳥	9.2	—	4.3	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ、放射暗文	ナデ、ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	密 良好 113 59		
9	511	土壙墓	土師器	椀	古墳~飛鳥	14.5	—	5.6	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ	ナデ、ミガキ、放射暗文	外・ヘラケズリ 内・螺旋暗文	明赤褐色	明赤褐色	密 良好 114 58		

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

第3節 C 3号墳（巻頭図版2下段・図版27～30）

概要・墳丘及び石室

群集墳内で唯一の八角墳である。C 2号墳よりは後に、調査区北東端のC 4号墳には先行して築造され、墳丘盛土に黒褐色の粘土ブロックが多く混じることからも、他古墳の周溝に堆積した土を巻き上げて墳丘を構築していることがわかる。おそらく群集墳内で最期に近い時期に築造されたであろう。八角の稜角が石室主軸の前背面にあたる、奈良県桜井市舒明陵古墳に見られるタイプの八角墳である。周溝は墓壙を囲むように回り、その下には、上面がロート状に開き底部はV字形の断面を持つ墳丘内排水溝が、墳丘の北西側のみをまわる（図42）。排水溝埋土の上層は大ぶりの礫を多く含んでいる。明確に原位置において検出してないため断定はできないが、墳丘に、北西部は列石があった可能性がある。

八角形の墳丘の中心点が石室の左側壁上に位置し、石室の幅を1つの単位とすると、中心点から八角の各々の稜角まで4倍もしくは、5倍となり、規格性をもって故意に八角形に構築されたことがわかる。この墳丘に対する石室の位置は、ほぼ同規模の墳丘をもつ兵庫県宝塚市の中山莊園古墳に類似する。

主体部である横穴式石室は、石室壁を構成する石材も大きく玄室幅も広めで、他古墳より立派に造られている。石室床面には、奥壁から3mあまりの玄室端のラインまで拳大の角礫が整然と敷き詰められ、そのうえには石室主軸と直行して棺台になる石材が奥壁付近、中央部（2点）、開口部付近に計4点置かれていた。この棺台配置と棺釘の出土から、木棺が一基埋葬されていた

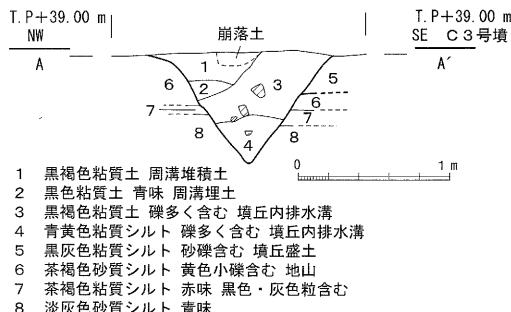


図42 C 3号墳墳丘内排水溝断面

ことがわかる。追葬の痕跡がなく、単墓であることが明白である。石室開口部には、東の谷に向かって下降する墓道を検出した（図43）。また、この1基のみは、開口部の検出状況により、大ぶりの石で閉塞されていた可能性がある。

出土遺物

副葬土器は一括資料であることを考慮すると、他古墳と比べて際立って点数が多い（図45）。杯H身は1点(9)出土したものの、立ち上がりが極めて低く形骸化している。杯Gの蓋は5点(1～4・6)出土したが全て、つまみが整美な擬宝珠の形をしており、口径がきわめて小さい。平

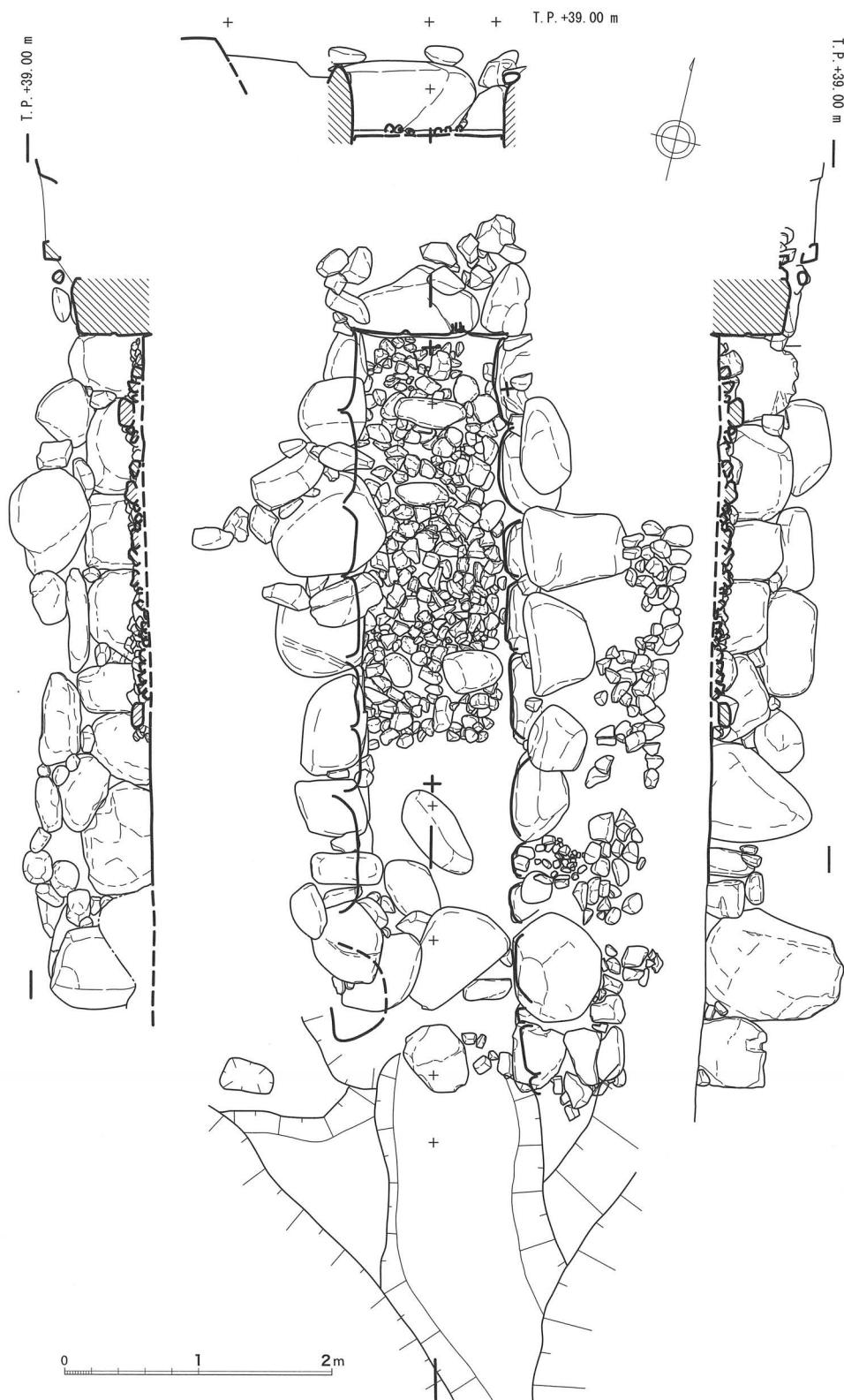


図43 C3号横穴式石室

瓶 10 も小振りで肩に明確な稜をもち、須恵器類はすべて新しい特徴を備えている。土師器については、低脚高杯 13・台付長頸壺 14・皿 2 点（11・12）すべてに丁寧なミガキが施され皿と高杯の内面には放射暗文が描かれている。2 点の甕（15・16）についても、外面のハケメ、内面のヘラケズリとともに密で丁寧に調整されている。甕 2 点と台付長頸壺の内面には赤色の顔料が付着していたが、分析の結果ベンガラであることがわかった（付論 5）。

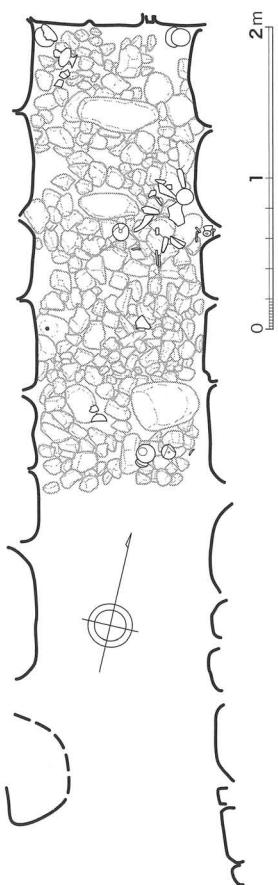


図 44 C 3号墳石室内遺物出土状況

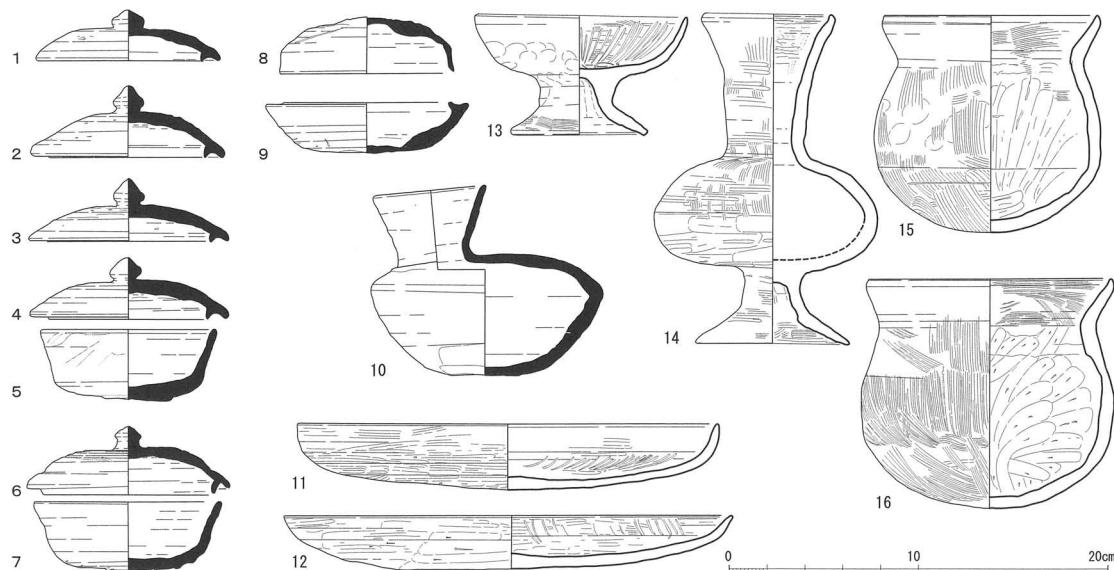


図 45 C 3号墳出土遺物

第4節 小結：C 支群について

調査区の東側に位置する谷からアクセスできる墓道をもつ古墳を C 支群とした。この谷は今回検出した群集墳の墓域の東限となる。C 4・5 号墳は平成 17～18 年度調査区に置いては、西側の周溝の一部しか検出できなかつたが、前年度の調査結果と合わせて検討したところ、整合した。周辺からは陶棺の蓋片も出土していた。南側の C 1・2 号墳と北側の C 3 号墳との間には、早くから存在した可能性の高い A 6 号墳を挟む。C 1 号墳は北側の古墳と比べて造墓時期も古い。このことから、墓道からアクセスする谷を共有するため、1 支群にまとめたが、北半と南半でさらに細分することは可能である。C 支群の中でも後半に築造された北側の 2 基（C 3・4 号墳）は、周溝の形状が他の 3 支群の古墳と比べて特異であること、また東側の谷に限りなく近い位置にあり立地条件が悪いことなどから、A・B 支群よりもやや時期が下って形

表 19 C 3 号墳出土出土土器一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	400	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	9.8	—	3.65	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	淡灰色	淡灰色	淡灰色	密	良好	106	42
2	696	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	10.3	—	3.8	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	明灰色	明灰色	不明	密	良好	107	44
3	399	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	10.1	—	3.3	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	灰白色	オリーブ灰色	灰白色	密	良好	123	—
4	659	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	8.6	—	3.25	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	暗青灰色	青灰色	青灰色	密	良好	51	37
5	663	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳～ 飛鳥	9.3	—	3.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	オリーブ灰色	淡灰色	不明	密	良好	105	38
6	660	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	9.1	—	3.5	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ツマミ、 回転ナデ	淡灰～ 淡オリーブ灰色	青灰～淡青灰色	灰色	密	良好	55	39
7	654	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳～ 飛鳥	9.9	—	3.6	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	青灰色	淡青灰色	不明	密	良好	50	40
8	664	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯蓋	古墳～ 飛鳥	9.3	—	3.0	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	淡青灰色	淡青灰色	不明	密	良好	52	41
9	656	C 3 号墳 石室内	須恵器	杯身	古墳～ 飛鳥	9.1	—	2.65	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・不調整	青灰色	青灰色	淡青灰色	密	良好	53	43
10	658	C 3 号墳 石室内	須恵器	平瓶	古墳～ 飛鳥	6.0	—	10.1	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	外・ヘラケズリ	灰色	灰色	灰色	密	良好	112	45
11	650	C 3 号墳 石室内	土師器	皿	古墳～ 飛鳥	22.3	—	3.5	ナデ、ヘラケズリ、 ミガキ、 放射暗文	ナデ、ミガキ、 放射暗文	ナデ、ミガキ	淡橙色	淡橙色	淡橙色	密	良好	82	—
12	622	C 3 号墳 石室内	土師器	皿	古墳～ 飛鳥	24.8	—	2.8	ナデ、ヘラケズリ、 ミガキ、 指頭压痕	ナデ、ミガキ、 放射暗文	ナデ、ミガキ	淡橙～淡赤褐色	淡橙～淡赤褐色	淡橙色	密	良好	81	—
13	662	C 3 号墳 石室内	土師器	低脚 高杯	古墳～ 飛鳥	(11.3)	7.3	6.3	ナデ、ミガキ、 指頭压痕	ナデ、ミガキ、 放射暗文	ナデ、ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	124	—
14	645	C 3 号墳 石室内	土師器	台付 長頸壺	古墳～ 飛鳥	7.1	8.2	17.6	ナデ、ヘラケズリ、 ミガキ、ハケヌ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	密	良好	83	47
15	644	C 3 号墳 石室内	土師器	甕	古墳～ 飛鳥	11.4	—	11.5	ナデ、ハケヌ、 指頭压痕	ナデ、ハケヌ、 ヘラケズリ	—	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	密	良好	91	46
16	649	C 3 号墳 石室内	土師器	甕	古墳～ 飛鳥	13.0	—	12.2	ナデ、ハケヌ	ナデ、ハケヌ、 ヘラケズリ	ハケヌ、 ヘラケズリ	淡橙～暗橙色	淡橙～暗橙色	淡橙色	粗	良好	128	—

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

第10章 桑原西古墳群以前の桑原遺跡

桑原遺跡には、古墳時代終末期に群集墳が形成される以前から遺跡が存在したことが今回の調査の結果わかった。古墳が埋没保存されることもあり、ある程度の所見を得ることができたため、古墳下部を保護するために、下層の発掘調査を行うのは妥当ではないと考え、平面的に下層遺構の検出は行わなかった。しかしながら、発掘調査時には弥生土器及び石製品等が出土した（図

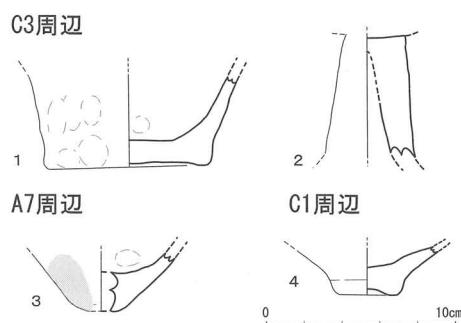


図 46 古墳時代以前の出土遺物

46・47）。攪乱や排水のために調査区の端に掘った排水溝の中から出土したものもあれば、古墳の墳丘盛土に混入して出土したものもあった。B 8号墳の周溝の底からは、内行花文鏡であると思われる破鏡が出土した。破片には穴があけられ、ペンダントとして転用されていた（図 47）。石鏃はサヌカイト製であり、平成 16 年度調査区から出土したものである。この他にも両調査区を通じて、サヌカイト剥片は数点出土している。（小川）

表 20 古墳時代以前の出土遺物一覧

番号	登録番号	出土地点	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整			色調			胎土	焼成	実測	写真番号
									外面	内面	底部・天井部	外面	内面	断面				
1	332	C3周辺	弥生土器	壺?	弥生時代	—	(8.7)	(4.8)	ナデ	ナデ	—	明黄褐色	明黄褐色	—	粗	良好	265	—
2	301	C3周辺	土師器?	高杯	不明	—	—	(6.4)	ナデ?	ナデ?	ナデ?	橙色	橙色	白色	密	良好	244	—
3	315	A7周辺	不明	不明	不明	—	(1.6)	(3.1)	不明	ナデ	—	明褐色	明褐色	—	密	良好	216	—
4	243	C1周辺	弥生土器	壺	弥生時代	—	3.0	(2.3)	不明	不明	—	橙色	橙色	—	粗	良好	222	—A

※ () 内数値は反転復元後の数値及び残存高

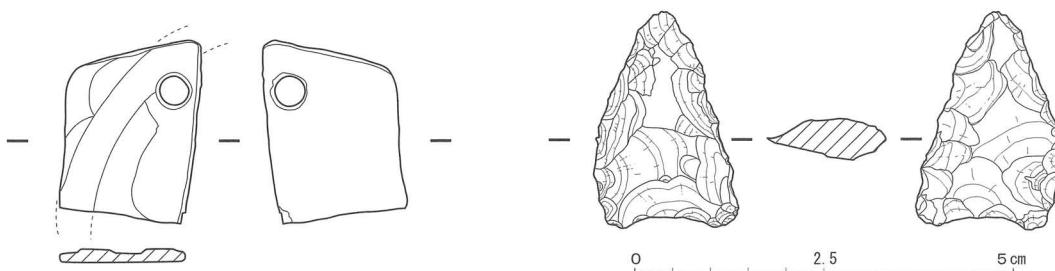


図 47 破鏡・石鏃

第11章　まとめ

第1節　桑原西古墳群出土陶棺について

桑原西古墳群では合計4基の古墳から陶棺が出土している。これらの陶棺のうちA3号墳出土のものは、ほぼ全体像をつかむことができる須恵質四注式家形陶棺である。この陶棺は近畿地方出土の須恵質陶棺のなかでは通有の形態のものということができるが、そもそも陶棺自体が近畿地方においてあまり一般的とはいえない形態の棺である。このような特殊な棺は、使用している古墳ならびに古墳群の被葬者の性格を考えていく上でのひとつの視点となるものと考えられる。そこで本稿では桑原西古墳群出土の陶棺自体を近畿地方の須恵質陶棺の中でどのように位置づけることができるのか検討し、桑原西古墳群の陶棺の被葬者像について検討をおこなう。

1 近畿地方の須恵質陶棺の研究史

陶棺への関心はその形態等の特異性から古くから存在し、陶棺に関する記述は明治期からしばしば見受けられる。近畿地方における須恵質陶棺の研究が本格的におこなわれるようになったのは1970年代以降である。須恵質陶棺の研究はこれまでおもにその編年的な研究とその被葬者像についての研究がなされてきている。近畿地方の陶棺の研究は古くよりおこなわれているが、齊藤和夫・森浩一両氏によって「日本陶棺地名表」が発表されて（齊藤・森 1949）基礎的なデータが提示されて以降、体系的な研究がなされるようになった。陶棺に関する研究はさまざまな角度からおこなわれているが、ここではその編年研究にしぼって研究史をふりかえる。代表的な近畿地方の須恵質陶棺の編年研究には、木村泰彦氏と宮本康治氏の研究があげられる。木村氏は土師質と須恵質の両方の陶棺を対象として、陶棺の棺身と棺蓋の合わせ方、陶栓の分類などから近畿地方における型式編年を行い、土師質陶棺から須恵質陶棺への漸進的な変化という考えを示した（木村 1979）。一方宮本氏は陶棺の棺身と棺蓋の合わせ方や外面の装飾などの分類から型式編年をおこなっている（宮本 1994）。

それでは桑原西古墳群出土の陶棺はどのように編年研究の中で位置づけることができるであろうか。今回の出土陶棺のさまざまな様相を木村・宮本両氏の編年基準に当てはめると、いずれの編年においてもその実年代を7世紀の中頃とすることができる。このことは、出土している土器の年代観とも齟齬をきたさない。このようなことから、桑原A-3号墳出土の陶棺は7世紀の中頃に比定するものであろう。

2 桑原西古墳群出土陶棺の問題点

先述のように桑原西古墳群出土の陶棺は近畿地方出土の須恵質陶棺のなかでは通有の形態のものである。しかしながらこのA-3号墳出土の陶棺には微細な点においていくつかの特徴的な点も見受けられる。そこでそれらの点について検討をおこない、桑原西古墳群の陶棺の示す特徴を浮かび上がらせていく。

まずこの陶棺の特徴として2種類の陶栓があげられる。ひとつの陶栓は円形の本体部に断面円

形の軸部をもつ通用のものであるが、もう一方は長方形の本体部に断面方形の軸部をもつきわめて特異な形状のものである。先行する出土例では異なる形状の陶栓が同時に出土した例は確認されておらず、果たして蓋の左右で異なる形状の陶栓が用いられていたのかは判断できない。また陶栓の軸の断面形状は蓋の孔の形状と対応している（表 21）。今回の出土例もこれまでの例にあてはまるのであれば、方形の孔に栓をしていたということになるが、A 3 号墳出土の棺蓋の孔は円形である。蓋の一方の短側面は欠損しており、こちらのほうの孔が方形であった可能性もあるが、そのような異なる形状の孔を持つ類例は確認されていない。このようなことから、もう 1 棺使用されていた可能性もあるがそのような明確な証拠は存在しない。いずれにせよ、このことはさらなる類例の増加を待って再度検討をおこないたい。

次の特徴として、第 6 章 2 節において出土状況でも触れたが、陶棺のなかから別個体の陶棺の長側面の破片を検出したことである。これは陶棺のなかに陶棺の破片を敷いて使用していたものと考えられる。このような状況もほかに例を見ないものである。いったいどのような意味があるのかは現状では判断するには手がかりが非常に少なく、こちらも類例の増加を待って検討したい。桑原西古墳群 A 3 号墳の陶棺の特徴についてみてきたが、ほかに類例のないような特徴が多く認められた。このことはこの陶棺のもつ特異性を示しているとともに、特異な存在をゆるす、陶棺という棺のもつ性格の一端を示しているとみることもできるであろう。

3 近畿地方の須恵質陶棺の様相

桑原古墳群出土陶棺のもつ特徴について検討を加えてきた。次にこの桑原古墳群中の陶棺を、近畿地方（注 1）の須恵質陶棺の中で位置づけをおこなっていく。そこでまず近畿地方の須恵質陶棺の様相について若干の検討をおこなう。

近畿地方の須恵質陶棺は現在のところ 100 例以上確認されている。近畿地方で須恵質陶棺が使用されるようになるのは T K 209 型式期（注 2）になってである。この時期には土師質亀甲形陶棺からの影響を受けて生まれたと考

表 21 陶栓出土陶棺

遺跡名	所在地	陶棺の型式	陶栓の形状		陶棺の蓋の孔の形状
			本体の形状	軸の形状	
西毛谷北古墳	三重県津市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
若松神社境内古墳	滋賀県大津市	土師質亀甲形	丸	四角	四角
横尾山 7 号墳	滋賀県大津市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
石見上里古墳	京都府京都市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
長野岡田古墳	京都府向日市	須恵質家型四注式	四角	丸	丸
芝 12 号墳 2 号棺	京都府長岡市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
北平尾古墳	京都府長岡市	須恵質家型四注式	丸	無し	丸
青谷古墳	京都府城陽市	土師質亀甲形	四角	丸	不明
桑原 A-3 号墳	大阪府茨木市	須恵質家型四注式	丸 四角	丸 四角	丸（もう一方は不明）
中井山 1 号墳	大阪府豊中市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
中井山 3 号墳	大阪府豊中市	須恵質家型四注式	丸？	丸？	不明
太古塚古墳群中	大阪府豊中市	須恵質家型四注式	丸	丸	丸
堂山 3 号墳	大阪府茨木市	須恵質家型四注式	四角	丸	丸
矢倉古墳	大阪府羽曳野市	須恵質	丸	丸	不明
和泉向代 1 号墳	大阪府和泉市	土師質亀甲形	丸	丸	丸
八十塚岩ヶ平 1 号墳	兵庫県芦屋市	須恵質家型四注式	丸	無し	丸
博地谷古墳	兵庫県三田市	須恵質家型四注式	不明	不明	丸
新堂寺古墳	奈良県奈良市	土師質亀甲形	丸	丸	丸
竜田御坊山 3 号墳	奈良県斑鳩町	須恵質家型四注式	丸	無し	丸

えられる須恵質亀甲形陶棺が使用されるようになる。一例として、中井山3号墳（注3）（大阪府豊中市）のものをあげることができる。この須恵質亀甲形陶棺は近畿地方ではごくまれなもので、継続的に使用されていくものではない（注4）。近畿地方の須恵質陶棺で広く使用される形態は家形四注式のものである。この家形四注式の陶棺もTK209型式期にはすでに確認ができるが、須恵質亀甲形陶棺よりは後出するものと考えられる。この須恵質家形四注式の陶棺はその後も近畿地方の通有の須恵質陶棺として継続的に使用されていくものとなる。

さらに分布の変遷を追っていく。先にも述べたように、近畿地方で須恵質陶棺の使用が始まるのはTK209型式期であり、この時期の須恵質陶棺は現在の大坂府豊中市の桜井谷窯跡群およびその周辺を中心として確認されている。そしてそれ以降になると、分布域は一気に拡大する。千里丘陵周辺をおもな分布域としていた須恵質陶棺は、乙訓地域や陶邑周辺、さらには近江へとの分布を拡大させていく。

これらの陶棺は近畿地方の各地に広く分布しているが、とくに集中しているのが千里丘陵や乙訓地域、それに和泉丘陵をあげることができる。これらの陶棺の集中する地域のなかでも千里丘陵や乙訓地域といった淀川流域の地域と、陶邑周辺では同じ須恵質であっても蓋の形状に違いが認められるなどの差異が存在している。そして桑原古墳群で出土している陶棺は、立地の面においても形態の面においてもこれまでに出土している淀川流域の須恵質陶棺との関連を考えるべき

であろう。

そこで淀川流域を中心としてその様相を製作技法や調整手法の面から検討する。淀川流域で集中する地域は、千里丘陵、乙訓地域、そして近江である。これら地域ごとに類似した手法がかたまっているということがわかる（表22～24）。すなわち、近江の場合では脚部の外面に力キメを施したり、棺身の内面に粘土接合痕がきわめて明瞭に残つてたりする。また千里丘陵と乙訓地域では、両者で共通した手法が用いられており製作技術の類似性が伺えるもののそれでも差異が認められ、

表22 千里丘陵須恵質家形陶棺

	棺蓋		棺身		脚部	
	外面調整	内面調整	外面調整	内面調整	孔	調整
五月丘古墳	—	—	ナデ・ハケメ	ナデ	あり	ナデ
新免宮山北塚古墳	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	あり	ナデ
中井山1号墳1号棺	ナデ	未調整	ナデ	ナデ	あり	ナデ
中井山1号墳2号棺	ナデ	未調整	ナデ	ナデ	あり	ナデ
中井山3号墳1号棺	ハケメ	ナデ	ハケメ	ナデ	なし	ナデ
中井山4号墳	—	—	ナデ	ナデ	あり	ナデ
岸本塚古墳？	—	—	ハケメ	ハケメ	あり	ハケメ
似禅寺裏山古墳	ハケメ	未調整	ハケメ	未調整	なし	ナデ

表23 乙訓地域須恵質家形陶棺

	棺蓋		棺身		脚部	
	外面調整	内面調整	外面調整	内面調整	孔	調整
石見上里古墳	ナデ	未調整	ナデ	ナデ	あり	ナデ
長野岡田古墳	ナデ	ナデ	ハケメ	ナデ・ハケメ	なし	ナデ
光明寺古墳	ハケメ	ナデ	ハケメ	ナデ	あり	ケズリ
走田古墳	ハケメ	未調整	ハケメ	ナデ	あり	ナデ
走田8・9号墳間出土	—	—	ハケメ	ハケメ	あり	ナデ
芝12号墳1号棺	ハケメ	ナデ	ハケメ	ハケメ	あり	ナデ・ハケメ
芝12号墳2号棺	ハケメ	ナデ	ハケメ	ナデ	あり	ナデ
北平尾古墳	不明	ナデ	ナデ	ナデ	あり	ナデ

表 24 近江須恵質家形陶棺

	棺蓋		棺身		脚部	
	外面調整	内面調整	外面調整	内面調整	孔	調整
夕日丘北遺跡	—	—	—	—	あり	カキメ
山ノ神遺跡	ハケメ	ナデ	ナデ	ナデ、粘土接合の痕跡明瞭	あり	ナデ
横尾山 7号墳	ハケメ	未調整	ナデ	ナデ、粘土接合の痕跡明瞭	あり	ナデ
横土井遺跡	ハケメ	ナデ	ハケメ	ナデ、粘土接合の痕跡明瞭	あり	カキメ

またこれまでにも指摘されているように、焼成の状況が大きく異なっている（木村 1979）。

つまり、淀川流域では形状の面からはきわめて類似した須恵質陶棺が広く分布しているが、製作技法や調整手法の面では地域ごとに高いまとまりが認められる。現状では明確な陶棺の製作址が認められるのは千里丘陵のみであるが、千里丘陵から淀川流域へと陶棺が広く流通していたと考えるのはやや困難ではないであろうか（注 5）。淀川流域で類似する形態、製作技法も広く認められることから、須恵質陶棺の製作手法などに関する情報の伝達はもちろん地域間であったものと考えられる（注 6）。しかし陶棺の製作と使用は、その陶棺が使用される地域の中で完結していると考えるほうが良いのではないであろうか。

4 桑原西古墳群出土陶棺の位置づけ

淀川流域の須恵質陶棺の様相の検討をおこない、一定の地域内での須恵質陶棺の生産およびおの消費の完結という構造を想定した。では桑原西古墳群出土の陶棺の場合はどうであろうか。また須恵質陶棺の生産と消費が完結する範囲とはいってどの程度のものであろうか。

桑原西古墳群出土の陶棺は先に見てきた、隣接する千里丘陵や乙訓地域出土の陶棺と比較すると、共通する点も多く認められるものの、製作技法などの面で多々差異が認められる。すなわち桑原西古墳群の陶棺は千里丘陵や乙訓地域からもたらされたものであると考えるよりは、桑原西古墳群の立地する地域で製作されて消費地である桑原西古墳群へと持ち込まれたと考えるほうがよいのではないであろうか。

須恵質陶棺の生産と消費が完結すると考えられる地域は、千里丘陵、乙訓地域、瀬田川流域、そして現在の茨木・高槻市域の 4 つの地域を想定することができる。この地域的な展開から、須恵質陶棺はその製作から消費までがきわめて狭い範囲内で完結していることが想定される。このように見ると須恵質陶棺の様相がほかの種類の棺の様相とは大きく異なっていることがわかる。たとえば家形石棺は使用される石材の産地が限られており、生産地から広く消費地へと運ばれていることが確認されている。このような製作地が限られていること、そして製作地から消費地までの移動距離の違いはその棺のもつ性格の違いに起因するものと考えられる。須恵質陶棺の製作地からの移動距離が家形石棺のそれと比べると短いということは、それだけ須恵質陶棺の使用が家形石棺の場合ほどの規制を受けていなかったと考えることもできるのではないかであろうか。

以上桑原西古墳群の陶棺について検討をおこなってきた。古墳時代後期の近畿地方において普遍的な棺であるとはいがたい陶棺を使用していることからその被葬者の特異性が想定されるが、その使用されている陶棺もほかに類例を見ない特徴をもっており、さらにこの被葬者の性格

を際立たせている。またこの被葬者は、陶棺が製作からその使用までが地域内で完結していると想定されることから、地域社会と密接な関係をもつ性格のものであると考えられる。

本稿では検討しきれなかった点も多く残されているが、それらについては今後の課題としたい。

(前田)

(注 1) 基本的には現在の大坂府・京都府・兵庫県・奈良県・滋賀県・和歌山県の 2 府 4 県を範囲とする。ただし兵庫県の西部（播磨・但馬）に分布する陶棺は、近畿地方からよりも吉備地方の陶棺からの影響が大きいものと考えられる。

(注 2) 須恵器による時期の比定は田辺昭三氏の編年に基づいておこなう（田辺 1966・1981）。ただし 7 世紀以降のものは、近年の調査の進展により変更が必要な点も出てきているものの、田辺氏の編年よりも西弘海氏の飛鳥・藤原宮地域の土器編年を用いるほうがより妥当性が高いものと考えられる。よって 7 世紀代の須恵器の時期比定は基本的に西弘海氏の編年を用いておこなう（西 1983）。

(注 3) 中井山 3 号墳の陶棺は近畿地方の最古段階の須恵質陶棺とされているが、これまでその時期は TK43 型式期とされることが多かった（宮本 1994 など）。しかし併存する須恵器の様相などからみると、そこまで古く比定するのは困難であると考える。

(注 4) 全国的に見ると須恵質亀甲形陶棺は家形のものと比較すると少ないが、それでも一定数以上存在している（中村 2001）。

(注 5) 木村泰彦氏も乙訓地域の陶棺をその焼成などから桜井谷窯跡群から持ち込まれたものではなく、現状ではまだ製作址は発見されていないものの乙訓地域で製作されたものと想定している（木村 1979）。

(注 6) 須恵質陶棺の製作技術の情報の発信源は淀川流域においては千里丘陵であったと考えられる。なお千里丘陵と陶邑周辺の陶棺の関係についてであるが、製作の開始時期などからは千里丘陵から陶邑への情報の発信があったことが想定できる。しかしこの両地域の関係については今後さらなる検討が必要であろう。

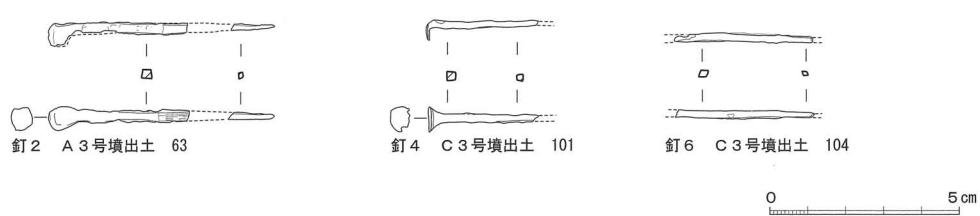
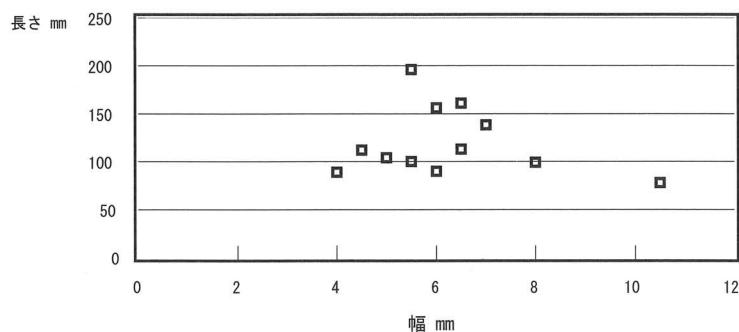
[参考文献]

- 木村泰彦 1979 「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第 1 集 長岡京跡発掘調査研究所
斎藤和夫・森 浩一 1949 「日本陶棺地名表」『古代学研究』第 1 号 古代学研究会
田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
中塚 良 1998 「須恵質四注式家形陶棺の諸特性」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 46 集 向日市埋蔵文化財センター
中村展子 2001 「東山 12 号墳出土の陶棺」『東山古墳群 II』中町文化財報告 25 兵庫県多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
中村展子 2004 「生産からみた陶棺の変容とその背景」『洛北史学』第 6 号 洛北史学会
西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』平凡社
菱田哲郎 2005 「須恵器の生産者—5 世紀から 8 世紀の社会と須恵器工人」『人と物の移動』列島の古代史 4 岩波書店
宮本康治 1994 「堂山 3 号墳出土陶棺の位置付けとその系譜」『堂山古墳群』大阪府文化財調査報告書第四五輯 大阪府教育委員会

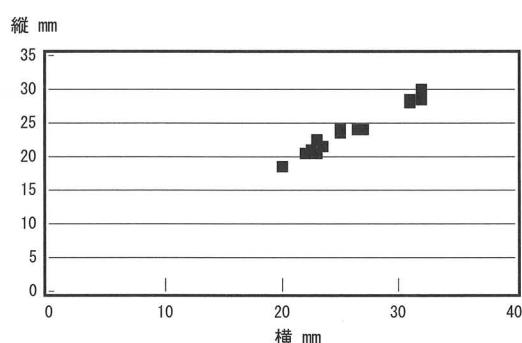
第2節 桑原西古墳群出土金属製品

桑原西古墳出土金属製品をここにまとめて図示する。

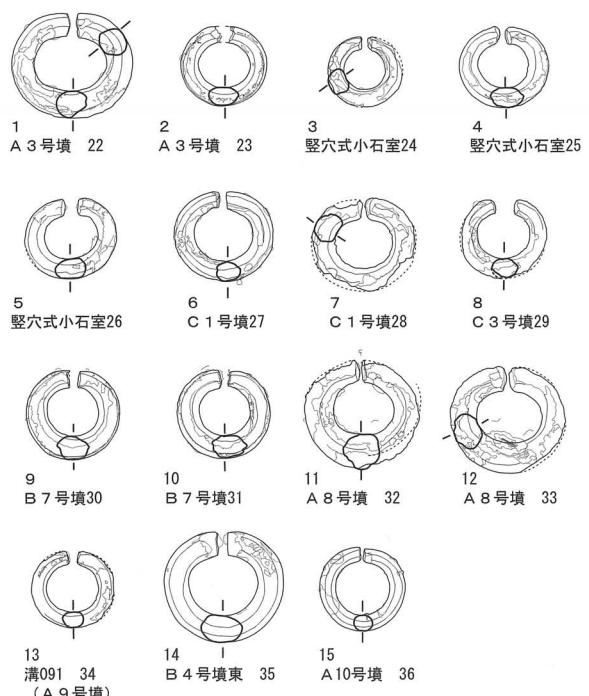
桑原西古墳群出土棺釘法量



桑原西古墳群出土耳環法量比較



耳環



桑原古墳群と東山古墳群出土耳環断面比較

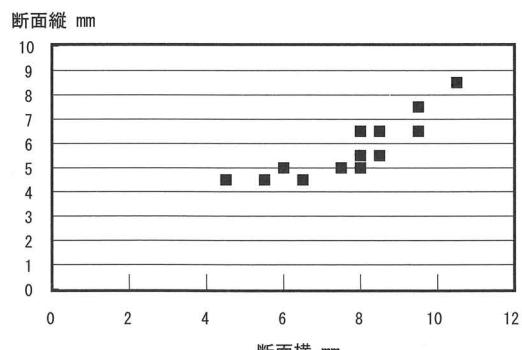


図 48 桑原西古墳群出土金属製品

第3節 桑原遺跡現地説明会アンケート調査について

桑原遺跡では平成18年4月22日（土）13時より、現地説明会を開催した。その際に現地説明会の来場者に、現地説明会の感想と遺跡に対する考え方を問う内容のアンケート調査をおこなった。当日の来場者は約900名、内817名にアンケート用紙を配布し、410名から回収した。約50%と半数に及ぶ回収率であったことより、回答者の傾向に、概ね来場者の傾向が反映されていると考える。しかしながら、回答者の約半数（210名）が性別欄に無回答であったため、性差を踏まえたクロス集計は難しい。

質問用紙は、18の質問と回答者自身の個人情報（性別、年齢、職業など）を問う項目で構成、A4サイズの用紙1枚におさめた。18の質問は、居住地、現地説明会を知ったきっかけなどの具体的で答えやすい質問から、会場においての感想を問う詳細に移り、最後には回答者の歴史観を問う抽象的な問いを加え、徐々に答えにくいものに移るように配列した。個人情報に関する問いは、質問用紙の最下部に配置した。当日、受付にて現地説明会資料とともに、アンケート調査の質問用紙を配布した。受付として設置したテント内には筆記具と机、質問用紙の回収箱を配置した。実際の質問用紙を記載すること、及び質問の意図を一問ずつ解説することは割愛するが、ここでは、回収した質問用紙にある回答より読み取れることを紹介したい。

まず、来場者で圧倒的多数を占めるのが60代（36%）であり、それに50代、70代が続き、50代以上という比較的年齢の高い層が来場者の7割を占める。多数の人が繰り返し現地説明会を訪れるリピーターであり、今回が初めて現地説明会に参加した人は34%であった。このことは、今回の現地説明会を訪れたきっかけを問う質問（複数回答可）に65%もの回答者が「歴史に興味があるので」と答えたことからも伺える。次に目につく著しい事象は新聞の貢献度である。現地説明会と遺跡の認知が新聞によると答えた人は71%にも上る。このことと、来場者の年齢層の高さは必ずしも無関係ではないと考える。若い世代は新聞を読まないとは言わないが、新聞以外のメディア、例えばホームページなどにおいての情報提供をより充実させること、大学や高校など学生が目にし易い場所に周知をおこなうことによって、若年層の来場者を獲得することも可能になるかもしれない。しかしながら、今回の現地説明会においては、徒歩圏内からの来場者が20%、さらに茨木市・高槻市からの来場者が全体の半数を超える（53%）。近隣住民に地元の遺跡の周知が行きとどき、足を運んでもらうことは地域の文化財保護の基盤に繋がるであろう。

歴史に興味があり、繰り返し現地説明会を訪れている固定来場者ともいえる層に加えて、来場者となるポーテンシャルを備えた人々を呼び込むことができれば、遺跡は幅広い層に周知され、さらには親しみを持ってもらえることに繋がるであろう。今回、近隣住民の来場者が多かったことは評価できる点である。遺跡の存在意義を社会的に認知してもらい、必要な場合に保存をするためには、現代社会において幅広い層、特に経済活動の基盤を担う層からの協力が不可欠である。そのような人々に認知をしてもらうためにも、現地説明会が、一般の人には唯一に等しい現場との接触の良い機会となることが望ましい。

（小川）

第4節 まとめ：桑原西古墳群の形成過程と桑原遺跡の中世景観

調査の結果、桑原西古墳群は古墳時代終末期に形成された群集墳であることがわかった。密集されて築造された墳丘や群の形成過程を追っても、造墓は7世紀初頭（もしくは6世紀の最終末）から7世紀第3四半期までの極短い期間に集中的に、また隣接する4支群が並行して形成されていった。群集墳内の造墓ピーク期は、横穴式石室の形状および石室内より出土する副葬土器から、7世紀第2四半期後半～第3四半期前半が中心であり、一部その前後に築造された古墳も含む。以下に形成過程の検討の結果を桑原Ⅰ期～Ⅴ期に分類した。

桑原Ⅰ期： 調査区内において、隣接するどの古墳よりも早い段階で築造されていたことを明確に検出した古墳はB8号墳及びC1号墳である。周溝断面の観察結果からも、支群分けの根拠となる谷に近いことからも、両古墳が他に先行することは理にかなう。また、副葬土器もこれに矛盾しない。次いで、主体の痕跡は残っていないが、群内でも比較的規模の大きい長方形墳であるA6号墳、及び隣接するA5号墳も築造されたであろう。この2基は検出時における削平度合いの著しさからも、尾根上の土地が高い位置に築造され、立地条件立地条件も良い。特にA6号墳は、周溝がAii支群から東の谷へのアクセス路を提供し、その後の支群形成の中心となった。また、石室形態に古い特徴を備え、隣接する古墳に先行するB2号墳もこの段階で築造されたと考える。調査区中央部の尾根を中心に初段階の築造が行われた。A0・1・9号墳については断定できる資料には乏しいが、後の形成過程を見ていく上で、A支群が最初に尾根沿いの斜面を埋めて形成されていく支群であるため、この時点ですでに築造されていた可能性が高いと考える。A0・1号墳に関しては谷に近い立地が、A9号墳に関しては出土遺物及び隣接するA8号墳の墳丘に先行する古墳の周溝に堆積していた黒褐色の粘土ブロックが多く含まれることが、この推定の根拠となる。A10号墳に関しては情報量が少ないが、この1基のみが特異な性格を多く備えているため、この後他古墳と共に順次築造されていった中にあるとは考え難い。

桑原Ⅱ期： C1号墳を切って築造されているA2・C2号墳、A2号墳と共に通する特徴を備えるA7号墳、A7号墳を切って築造されているがほぼ時期差がないA8号墳、B2号墳の集周溝を切っているB4号墳が築造された。A7号墳とA8号墳に時期差がないとする根拠は、両古墳の墓道にあると考える。墳形は方形と円形と異なるが、両古墳の石室主軸はお互いの方角を向き合い、墓道は交わる。これは、後続するA8号墳が先行するA7号墳を意識して築造されたためであると考える。副葬土器もこれに矛盾せず、2基から出土した土器の間に時期差はない。

桑原Ⅲ期： A2号墳より後に築造されたA3号墳、B8号墳を切って造られているB3号墳、が築造された。C5号墳もおそらくこの頃までに築造されたであろう。

桑原Ⅳ期： 立地条件の悪い谷近くに、B7号墳及びC3号墳が隙間を埋めるように築造された。C3号墳において、石室背面側の周溝断面はV字形の特異な形状をなし、終末期古墳に見られる墳丘内排水溝を持つ。

桑原Ⅴ期： 隣接するどの古墳よりも新しいA4号墳・B1号墳が築造された。A4号墳は、石

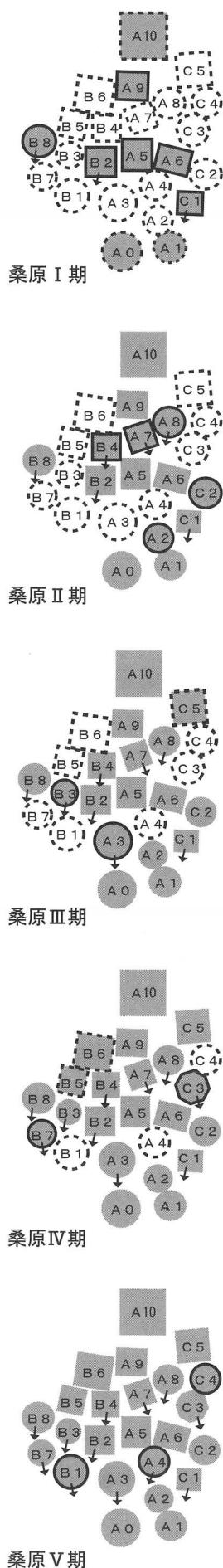


図49 桑原西古墳群形成図

室の形態も長方形の玄室開口部に直接排水溝を兼ねた墓道が取り付く最も新しい平面プランをもち、これに矛盾しない。C 3号墳を切って築造されているC 4号墳もこの段階で築造された。周溝の形状がC 3号墳に類似することから、この2基の間にそう時期差はないと考える。この3基が、今回検出した古墳のうちで最後に築造された。

群内の3つのグループはさほど大きな時期差はなく併行して形成されたが、地形的に高地で一番条件の良く、尾根の稜線からやや下った位置を埋めるA i及びA ii支群が一番早くに形成され、空いた位置を埋めるように両脇のB・C両支群が続いて形成されていったと考えられる。特にC支群の北半は墓域東限の谷に近い位置に形成され、立地条件の悪さや、墳丘形態の特徴からも、形成時期が遅れたと考える。各々の古墳の築造時期を検討した結果、時期が下るほど、石室や墳丘のつくりが簡素になり規模も縮小されていくという畿内における横穴式石室の一般的な傾向には、この群内においては同調しない。

形成過程の検討からもわかるように、複数の古墳の築造が支群を超えて同時に進んで行った。この一つの群集墳内で追葬稼働している墓が同時に複数存在していたためであろう。C 3号墳を除いて、明確な閉塞の痕跡を検出しなかったこともこのためかもしれない。桑原II～V期は極めて短期間である。古墳は段階的に築造されてはいるが、各々の墳丘・石室形状に共通点は多く、副葬土器に型式差はほぼない。

副葬土器より追葬は8世紀に入っても行われており（A 8号墳・C 1号墳など）、一時の空白期が存在した可能性はあるが、中近世遺物の出土状況から再利用の様子もうかがえる。埋葬時の原位置を保った副葬土器が存続するにもかかわらず、新しい遺物が石室内から出土していたこと（C 1号墳内の瓦器椀やC 3号墳東横石垣のキセルなど）から、古墳という先人の墓であることを認識しながら、再利用されていたであろう。墳裾を囲う溝、雑壇造成の境界の位置などからも、古墳が集中するエリアを墓域として長く認識していたであろう。（小川）

* 調査については、市川 創・井西貴子・猪熊兼勝・梅本康広・大向智子・大矢祐司・岡田 賢・奥 和之・奥井哲秀・小倉徹也・小田裕樹・尾野善裕・坂口英毅・佐藤 隆・佐藤陽子・白石太一郎・関 真一・高上 拓・高橋照彦・谷内美穂・玉田芳英・田村隆明・田村美沙・土屋みづほ・筒井崇史・寺井 誠・富田卓見・富成哲也・虎間麻実・西田敏秀・橋本裕子・菱田淳子・菱田哲郎・深澤芳樹・福庭万里子・細川晋太郎・前田俊雄・松井 章・松村祐香・溝口孝司・水野正好・宮崎康雄・宮脇 薫・三好 玄・村上 隆・免山 篤・桃井宏和・森本 徹・安村俊史・山中一郎・山本 彰・横田慎吾・和田晴吾・Ian Hodder・Robert Layton・Tim Schadla-Hall（敬称略）をはじめ、数多くの方々にご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

付論 1・桑原西古墳群 A3 号墳出土炭化材の放射性炭素年代測定

1 はじめに

古墳時代後期と考えられる A3 号墳石室内床面より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。A3 号墳石室内床面から追葬の際に燃やされて寄せ集められた木棺材の一部ではないかと考えられている炭化材が検出されており、この炭化材の年代を明らかにすることが目的である。

試料の調製は山形、瀬谷、Lomtadze、Jorjiani、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、中村が作成した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 25 のとおりである。試料は A3 号墳石室内床面から検出された炭化材である。炭化材は、幹または枝と考えられる部位から分枝した直径 1.0cm で約 3 年輪を含む枝部である。樹皮は残っていないが、最外部に極めて近いと考えられる。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

表 25 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	資料データ	前処理	測定
PLD-7393	位置：調査区Ⅲ 遺構：A 3 号墳石室内 層位：床 その他：手前の棺（南側）	試料の種類：炭化材（モミ属） 試料の性状：分枝した枝部（約 3 年輪分、直径 1.0cm） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N、水酸化ナトリウム 1N、 塗酸 1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

表 26 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行い、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を示す。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

表 26 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-7393	-26.24 ± 0.13	1365 ± 22	1365 ± 20	645AD (68.2%) 670AD	635AD (95.4%) 685AD

付論2・桑原西古墳群A3号墳出土炭化材の樹種同定

1 はじめに

ここでは、古墳時代後期と考えられているA3号石室内床面から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。炭化材は枝または幹の一部と思われる形状を留めた破片であり、放射径1.8×接線径2.3cm×長さ3.5cm、側面には直径1.0cmで約3年輪を含む枝の出た跡が残っていた。

2 方法： 同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV型)で観察と写真撮影を行った。

3 結果

同定の結果、炭化材は針葉樹のモミ属である。以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載した。
モミ属 Abies マツ科： 仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。傷害樹脂道がある。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において細胞壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型、1分野に1～3個ほどが雑然と配置している。放射組織の細胞高は比較的高い。

表27 樹種同定結果

調査区	遺構	層位	位置	樹種	形状(cm)	時期	年代測定番号
III	A3号墳 石室内	床	手前の棺 (南側)	モミ属	放射径1.8×接線 径2.3×長さ3.5	古墳時代 後期	PLD-7393

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

4 考察

この炭化材は、追葬のために前置されていた木棺が燃やされて寄せて置かれていたと推測されている。確かにこの炭化材も、このほかの炭化材も被熱して炭化していた。しかし、木棺材の破片としてはやや小径の枝材の破片であるように見られたことを、報告しておく。

年代測定と樹種同定は同一破片を使用し、その樹種はモミ属であった。島地・伊東編(1988)によると、近畿地方では古墳時代の木棺材樹種は、コウヤマキとヒノキが多く、このほかに少數であるがスギ・トガ・マツ・モミ・クスノキ・ヒメコマツの報告が見られる。モミは、大阪府の東奈良遺跡からの出土である。

今後も出土状況と樹種同定試料の状態などの資料を総合して検討することにより、時期や地区による木棺材の樹種利用の特徴や変化などが明らかにされると思われる。

(パレオ・ラボ 植田弥生)

付論3・桑原西古墳群A 8号墳出土ガラス玉の蛍光X線成分分析

1 はじめに

桑原古墳群より出土したガラス小玉の蛍光X線による元素分析を行い、材質の検討を行った。

2 遺物と分析方法

分析対象遺物は、桑原遺跡より出土したガラス玉20点である(表28、巻頭図版4・5)。分析装置は㈱堀場製作所製XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのRhターゲット、X線ビーム径が100 μmまたは10 μm、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はNa～Uであるが、Na、Mgといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。本分析での測定条件は、50kV、0.32～0.66mA(自動設定による)、ビーム径100 μm、測定時間500～1000s、パルス処理時間P4(分解能を重視した設定)に設定した。定量分析は、標準試料を用いないFP(ファンダメンタル・パラメーター)法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

分析は、予め遺物をエタノールで軽く洗浄をした後、非破壊で行った。ガラス製品の材質分析においては人為的に露出させた完全な新鮮面で無い限り、一見透明で風化がないように見える箇所でも、実際分析してみると風化は進んでおり、化学組成には変化があるため(肥塙1997)、解釈に注意しなければならない。このことは、たとえ出土後に自然に割れてしまった破断面であっても、埋蔵中にすでにクラックが入っていて風化が進んでいることが多く、同様である。

3 分析結果

各遺物より得られた検出元素と半定量分析結果一覧を表29に示す。分析の結果、これらは鉛珪酸塩ガラスにあたるものは含まれておらず、全てアルカリ珪酸塩ガラスに属するものであることが判明した。検出できた

表28 分析対象遺物一覧

元素は酸化ナトリウムNa2O、酸化マグネシウムMgO、酸化アルミニウムAl2O3、二酸化珪素SiO2、酸化リンP2O5、酸化硫黄SO3、酸化カリウムK2O、酸化カルシウムCaO、酸化チタンTiO2、酸化クロムCr2O3、酸化マンガンMnO2、酸化鉄Fe2O3、酸化コバルトCoO、酸化ニッケルNiO、酸化

分析No.	地区名	遺構	層名・土色	登録番号	寸法 直径×厚(mm)	色調
No. 1	P7-07	A8 搢き出し	上層	2-1	φ5.5×2.5	青紺
No. 2	P7-07	A8 搢き出し	上層	2-2	φ 5×3.5	緑色
No. 3	P7-07	A8 搢き出し	上層	2-3	φ 5×4	青紺
No. 4	P7-07	A8 搢き出し	—	2-4	φ 4×3	青緑
No. 5	P7-07	A8 搢き出し	—	2-5	φ 5×3.5	黒色
No. 6	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-6	φ 5×3	青色
No. 7	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-7	φ 5.5×3	青紺
No. 8	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-8	φ 4.5×3	青緑
No. 9	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-9	φ 4.5×3	青緑
No.10	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-10	φ 5×3	青緑
No.11	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-11	形3.5 5.5×4レンズ	青緑
No.12	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-12	φ 6×3.5	青紺
No.13	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-13	φ 4×3.5	青緑
No.14	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-14	φ 4×2.5	青緑
No.15	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-15	—(破片)	青紺
No.16	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-16	φ 4×2.5	青緑
No.17	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下のサンプル土	2-17	φ 5×3	青緑
No.18	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-18	φ 4.5×3	緑色
No.19	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-19	φ 4.5×4	青緑
No.20	P7-07	A8 搢き出し	土器C(図面)下層③より下	2-20	φ 4×2.5	青紺

表 29 半定量分析結果一覧

銅 CuO、酸化亜鉛 ZnO、酸化ルビジウム Rb2O、酸化ストロンチウム SrO、酸化ジルコニウム ZrO2、酸化スズ SnO2、酸化アンチモン Sb2O3、酸化バリウム BaO、酸化鉛 PbO の計 23 元素である。

4 おわりに

今回分析したガラス小玉は、K2O-SiO2 系のカリガラスと確実にわかるものは見られず、Na2O-Al2O3-CaO-SiO2 系と推定されるものを中心ソーダ石灰ガラスと推定されるものが多くかった。ただし、すべて非破壊分析であるため、風化により極端に組成が変化している可能性や、極僅かながら報告されている (Na2O-K2O)-CaO-SiO2 系などの通常とは異なる材質の可能性も残ることは否めない。

日本におけるガラス生産については、ガラス素材の生産は 7 世紀後半の飛鳥池遺跡における鉛珪酸塩ガラスの生産までなく、特にアルカリ珪酸塩ガラスについては鋳型を利用しての二次加工が行われていた程度だと考えられている。アルカリ珪酸塩ガラスのうち、Na2O-CaO-SiO2 系のソーダ石灰ガラスは、西方のガラスに見られる組成であり、その他二者 (K2O-SiO2 系カリガラス、Na2O-Al2O3-CaO-SiO2 系ソーダ石灰ガラス) はアジア独自の組成である。製作技法としては、単色の引き伸ばし法による整形というインドパシフィックビーズの特徴を有しているものが多く見られ、南アジア～東南アジアの製作ないし関与が推定されている一方、鋳型を利用した可能性のある資料が数点見られ、日本国内に流通したガラス製品の二次加工が想定される。いずれにせよ、東アジア地域におけるアルカリ珪酸塩ガラスは、南アジア～東南アジアが大きな鍵を握っていると言われ、今後の南アジア～東南アジア地域における発掘調査の進行による研究の発展が期待される。

(パレオ・ラボ 竹原弘展)

[引用・参考文献]

肥塚隆保 1997 日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究 東京藝術大学博士学位論文.

肥塚隆保・大賀克彦 2000 出土青色系ガラスの材質と着色因子について「日本文化財科学会第 17 回大会研究発表要旨集」24-25

肥塚隆保 2003 日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷— 遺物の保存と調査 145-158, クバプロ.

肥塚隆保 2004 古代のガラス—最近の研究から— 科学が解き明かす古代の歴史 新世紀の考古科学, 144-152, クバプロ

山崎一雄 1987 『古文化財の科学』 244-300, 思文閣出版.

No.	色調	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	SO3	K2O	CaO	TiO2	Cr2O3	MnO2	Fe2O3	CoO	NiO	CuO	ZnO	Rb2O	SrO	ZrO2	SrO2	Sb2O3	BaO	PbO
4	青緑	—	—	8.2	81.1	0.1	0.7	2.8	3.4	0.7	—	0.09	1.81	—	—	1.07	0.01	0.01	0.04	0.10	—	—	—	—
8	青緑	—	—	8.6	81.6	—	0.6	2.8	2.8	0.8	0.01	0.07	1.66	—	—	0.87	—	—	0.06	0.10	—	0.02	0.06	—
9	青緑	—	*	8.5	81.1	*	0.6	3.2	3.0	0.8	0.01	0.07	1.71	—	—	0.86	*	*	0.06	0.10	—	*	0.07	*
10	青緑	—	—	8.4	81.5	0.2	0.6	3.1	2.9	0.8	—	0.08	1.61	—	*	0.79	0.01	*	0.05	0.11	—	*	0.06	—
11	青緑	—	—	7.2	82.1	—	0.7	2.6	3.5	0.7	—	0.09	1.77	—	0.01	1.05	—	*	0.04	0.10	—	—	0.07	—
13	青緑	—	*	8.4	81.9	—	0.5	2.9	2.7	0.8	0.01	0.08	1.73	—	*	0.79	0.01	*	0.06	0.14	—	—	0.07	0.03
14	青緑	*	*	8.7	81.1	*	0.5	2.5	3.1	0.8	—	0.09	2.04	—	*	1.00	0.02	*	0.07	0.12	*	0.02	0.06	0.02
16	青緑	—	—	7.1	82.3	—	0.7	2.6	3.4	0.7	—	0.08	1.75	—	*	1.21	0.01	0.04	0.10	—	*	0.06	*	
17	青緑	—	—	8.7	80.9	—	0.5	2.9	3.3	0.8	0.01	0.08	1.76	—	0.70	—	*	0.06	0.11	—	0.02	0.06	—	
19	青緑	—	—	8.4	81.2	*	0.6	2.9	3.1	0.8	0.01	0.08	1.74	—	*	0.91	0.01	*	0.07	0.13	—	*	0.07	—
1	青緑	13.1	4.1	3.4	67.2	0.2	—	2.5	6.1	0.2	0.03	0.33	1.86	0.04	0.02	0.15	—	*	0.05	—	*	0.02	—	0.72
3	青緑	—	3.1	11.0	72.8	*	0.5	3.3	5.6	0.5	*	0.38	2.41	0.04	—	0.11	—	*	0.09	—	—	—	0.14	
7	青緑	—	1.1	6.0	81.2	0.5	0.5	2.4	4.3	0.3	0.02	0.16	2.15	0.09	0.03	0.17	0.01	*	0.05	—	—	—	1.08	
12	青緑	10.8	3.9	2.7	69.7	0.2	0.3	2.1	6.9	0.1	0.02	0.24	1.66	0.09	0.02	0.15	*	*	0.05	—	*	0.02	—	1.01
15	青緑	—	1.7	4.4	82.5	0.2	0.7	1.2	6.2	0.4	*	0.34	1.85	0.12	—	0.13	0.01	*	0.07	0.06	*	*	*	0.17
20	青緑	—	3.0	2.9	81.7	*	0.5	1.9	6.0	0.3	*	0.49	2.35	0.15	—	0.26	0.01	*	0.07	0.08	—	0.02	0.06	0.29
6	青色	14.5	*	7.5	68.3	*	0.4	1.9	3.5	0.7	0.01	0.54	1.85	—	—	0.65	0.01	*	0.03	0.10	—	*	0.06	*
2	緑色	13.5	*	9.7	67.4	*	—	2.3	2.4	1.0	—	0.06	1.69	—	—	0.47	—	0.01	0.06	0.10	0.17	*	0.12	1.03
18	緑色	15.5	*	8.7	66.1	—	—	2.0	2.3	1.0	*	0.06	1.63	—	—	0.50	—	*	0.06	0.08	0.21	—	0.08	1.77
5	黒色	—	*	7.4	79.3	*	0.4	2.1	1.3	0.9	*	1.74	3.75	—	*	1.73	—	*	0.03	0.15	0.11	*	0.14	0.95

付論・4 桑原西古墳群B 4号墳出土琥珀玉の赤外線分光成分分析報告

1 資料

遺物を実見した結果、資料は表面が劣化し、粉状になっていた。しかし、内部は透明感が残り比較的劣化は進んでいない状態であったが多くの破片に分かれていた。

2 目的

桑原古墳群出土琥珀玉が、琥珀であるかどうかの確認と、得られた結果を標準資料のデータと比較することにより産地同定を行う。

3 使用機器および原理

測定はフーリエ変換型赤外分光光度計（以後 FT-IR とする）(SENSIR TECHNOLOGIES 製 Travel IR) を使用した。FT-IR による分析は、試料に赤外線を照射し、その結果得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定することができる。主に有機物の構造を解析する手段として用いられることが多く、琥珀を形成する樹脂の種類すなわち植物の種類によって分子構造が異なると考えられるため産地によってスペクトルに差が生じ、それを利用して産地同定に応用してきた。

4 分析方法および条件

FT-IR 分析はできるだけ小さな破片の中で比較的健全なものを用い、そのままの状態で非破壊分析を試みた。測定条件は分解能 4cm^{-1} 、検出器として TGS を用いた。

5 結果および考察

FT-IR 分析は劣化していない部分の赤外吸収スペクトルが得られればその産地同定は可能である。しかし、劣化が激しいと、全体的にピークはブロードになり特徴的な吸収が消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。そのためできるだけ堅くてより健全な部分を選んで FT-IR による分析を行った。

その結果、 $3500 \sim 2800$ 、 1710 、 $1500 \sim 800\text{ cm}^{-1}$ 付近の吸収から、琥珀であることが確認できた。次に、 $1800 \sim 800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置および強度を基に、産地の判明している標準となる琥珀から得られたスペクトルと比較し、産地同定を試みた。その結果、 $1100 \sim 950\text{cm}^{-1}$ の吸収位置および強度が久慈産およびいわき産に比較的近い吸収位置と強度を示した。この 2 産地は琥珀の生成年代がほぼ同じであり、由来する植物も同じである可能性が高いため、そのスペクトルは非常に近似したものになる。そのため、現時点ではこの 2 産地に関しては区別することができない。

琥珀の産地は国内でも、少量産出地も含めると 10ヶ所以上もある。また国外でも各地で産出する。そのなかで、主産地についての FT-IR 分析はすでに報告されている。しかし、出土琥珀は劣化状態が様々でそれによって吸収位置や強度が変化する。そのため、劣化が進行したものはそのスペクトルが変化し産地同定が不可能になる場合がある。今回、資料はかなり劣化した状態で

あったため、標準琥珀との比較では久慈およびいわき産の可能性が高いが、断定することはできなかった。しかし、今回の資料はその形状や大きさ、出土時期が現在まで分析した古墳時代出土琥珀玉と比べるとかなり異なる。今までの分析資料は形状としては勾玉や棗玉がほとんどで、大きさも本資料に比べるとかなり大きく、時代的にも古い。

(パレオ・ラボ 植田直見)

[参考文献]

室賀照子、赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析、考古学と自然科学、第9号、59、(1976)

植田直見、銚子産琥珀の赤外分光分析、こはく、第4号、15 (2002)

植田直見、いわき地方産琥珀の科学分析、こはく、第5号、13 (2004)

付論5・桑原西古墳群C3号墳出土土器付着赤色顔料の蛍光X線成分分析

1 対象

桑原遺跡出土土器登録No.644、645、649 (C3号墳石室内出土) 内面に付着した赤色顔料

2 使用機器及び原理

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（以下、XRF）。試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

装置：セイコーインスツルメンツ（株）(SEA5230) モリブデン管球。測定条件は、表31を参照。

3 分析方法

綿棒により資料の赤色部を微量採取した。土器の胎土成分との比較のため、赤色部位外の胎土部を微量採取した。採取した赤色部と胎土部をXRFによる元素分析を行った。

4 結果

土器No.644、645、649より採取した赤色部のXRF結果すべてにおいて、胎土部のXRF結果より鉄(Fe)を強く検出した（表30）。

5 考察

鉄を特徴的に検出したXRF結果（表30下線部）から、土器No.644、645、649の赤色部は、酸化鉄(Fe₂O₃)を構成成分とするベンガラと考えられる。（元興寺文化財研究所 山田卓司）

表30 XRF結果まとめ

元素名	ライン	土器644 赤色部 (cps)	土器644 胎土部 (cps)	土器645 赤色部 (cps)	土器645 胎土部 (cps)	土器649 赤色部 (cps)	土器649 胎土部 (cps)
カルシウム	K _α	4.356	3.076	3.710	3.375	5.637	3.141
チタン	K _α	4.995	4.905	4.184	4.279	8.907	4.360
鉄	K _α	91.362	33.562	121.254	48.357	72.104	27.010

表31 測定条件

資料番号	土器644 赤色部	土器644 胎土部	土器645 赤色部	土器645 胎土部	土器649 赤色部	土器649 胎土部
測定時間(秒)	600	600	600	600	600	600
有効時間(秒)	438	427	433	432	434	427
試料室雰囲気	大気	大気	大気	大気	大気	大気
コリメータ	φ1.8mm	φ1.8mm	φ1.8mm	φ1.8mm	φ1.8mm	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45	45	45	45	45	45
管電流(μA)	44	20	32	36	28	20

付論 6・桑原西古墳群出土耳環の蛍光 X 線成分分析

1 分析対象

耳環：15 点 (No.1 - 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15) 以降、枝番号のみを示す。

2 使用機器及び原理

- エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（以下、XRF）：試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光 X 線を検出することにより元素を同定する。

装置：セイコーインスツルメンツ(株) SEA5230

測定条件：モリブデン管球；コリメータ径／1.8 mm；管電圧／45 kV（大気下）

カルシウム以下の低元素を測定する場合は、真空下 15 kV にて測定

- マイクロスコープ（実体顕微鏡） 装置：キーエンス(株) VH-7000；ライカ(株)

3 分析方法

耳環の材質を調べるため、XRF で元素分析を行った。材質分析は、芯部と表面層を中心に行つた。また、耳環の形態を観察するため、マイクロスコープを用いて細分の観察を行い、形状と重さを計測した。

4 結果

耳環の分析結果を表 32 に記載する。なお、XRF で検出された元素は、クロム (Cr)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、金 (Au)、水銀 (Hg)、ビスマス (Bi) であり、表中では元素記号を記載した。太字は、強く検出された元素および特徴的元素を表す。他の元素は、土壤成分か主要金属の不純物由来と考えられる。なお、表面層で検出された Cu は、芯部の影響と考えられ、芯部の Ag, Au は表面層の影響と考えられる。耳環の芯部には、不純物の少ない銅か微量元素としてヒ素を含む銅（耳環 2, 4, 5, 14, 15）を用いていることが分かった。

耳環 1 では、部分的に残存する表面層から銀を強く検出したことから、銅芯にわずかに金を含む銀を巻いた銀耳環と考えられる。

耳環 2 では、部分的な欠落はあるが残存状態が良好な表面層から金を強く検出したことから、

表 32 耳環分析結果まとめ

銅芯にわずかに銀を含む金を巻

いた金耳環と考えられる。

耳環 3 は、今回分析した中では最も小ぶりなものである。芯部に欠落が見られるほど劣化が進み表面層と思われる部分もほとんどない。わずかに残存する表面層の残存部分から、金を検出しているため、銅に金（金

耳環番号	形状(A×B×C) /mm	重さ /g	XRF 検出元素 (表面層)	XRF 検出元素 (芯部)	出土地
1	27.9×32.3×7.3	17.86	Fe,Cu,Ag,Au(銀)	Cu(銀)	A 3
2	21.4×23.0×4.9	9.90	Fe,Cu,Ag,Au(金)	Fe,Cu,As,Au	A 3
3	18.4×19.2×4.9	3.76	Fe,Cu,Ag,Au(金銀合金か金)	Fe,Cu,Se,Ag	小石室
4	21.1×23.6×5.3	6.19	Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金か銀巻→金鍍金)	Fe,Cu,As,Ag,Au	小石室
5	21.1×23.9×5.5	7.07	Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金か銀巻→金鍍金)	Fe,Cu,As,Ag,Au,Bi	小石室
6	23.6×26.8×5.7	11.68	Cr,Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金)	Fe,Cu	C 1
7	25.1×27.5×5.6	9.52	Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金)	Fe,Cu,Ag	C 1
8	20.5×22.7×4.8	7.51	Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金か銀巻→金鍍金)	Fe,Cu,Ag	C 3
9	23.5×24.9×6.3	13.79	Cu,Au(金)	Fe,Cu,Ag	B 7
10	23.0×24.8×6.1	15.51	Cr,Fe,Cu,Ag,Au(金)	Fe,Cu,Ag	B 7
11	27.9×29.8×8.3	20.39	Fe,Cu,Ag,Au(金銀合金)	Fe,Cu,Ag	A 8 墓道
12	28.3×30.7×8.2	20.11	Cr,Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金銀合金)	Fe,Cu,Ag	A 8 墓道
13	20.5×21.9×4.2	5.25	Fe,Cu,Ag,Au,Hg(金か金銀合金)	Fe,Cu	溝091
14	29.3×32.0×7.2	28.34	Fe,Cu,Ag,Au(金)	Fe,Cu,As,Ag,Au	A 9
15	22.4×22.9×4.3	6.13	Fe,Cu,Ag,Au(金)	Fe,Cu,As,Ag,Au	A 10

銀合金) が施されたものと思われる。ただし、無垢の銅耳環に他の遺物から金銀が付着した可能性もある。

耳環 4 では、部分的に残存する表面層から銀、金、水銀を強く検出したころから、銅芯に金銀合金を卷いたか、銀を卷いた後に鍍金したものと考えられる。

耳環 5 では、部分的に残存する表面層から銀、金、水銀を強く検出したころから、銅芯に金銀合金を卷いたか、銀を卷いた後に鍍金したものと考えられる。なお、耳環 4, 5 は、表面層および芯部の材質さらに形状も似ていることから、対の耳環であった可能性が高い。

耳環 6 では、一部に残存する表面層から銀、金、水銀を強く検出した。めくれや剥離片の形状から、銅芯に金銀合金を卷いたものと考えられる。

耳環 7 では、芯部におよぶ欠落が見られるほど劣化が進んでいる。一部に残存する表面層から銀を強く検出し、わずかに金と水銀を検出している。劣化は進んでいるが形状と材質から、6 と対の耳環が劣化した可能性が考えられる。また、耳環 7 より剥離したと考えられた小片は、顕微鏡観察と XRF 結果より砂や礫等の土壤成分が主であると思われる。

耳環 8 では、一部に残存する表面層から銀、金、水銀を強く検出したころから、銅芯に金銀合金を卷いたか、銀を卷いた後に鍍金したものと考えられる。

耳環 9 では、内側に残る表面層から金のみを強く検出したころから、銅芯に金を卷いた金耳環と考えられる。

耳環 10 では、部分的によく残存する表面層から金を強く検出したころから、銅芯に金を卷いたものと考えられる。なお、耳環 9, 10 は、表面層および芯部の材質が似ており、形状も似ていることから、対の耳環であった可能性が高い。

耳環 11 では、一部に残存する表面層に銀と金を検出したことから、銅芯に金銀合金を卷いたものと考えられる。

耳環 12 では、部分的によく残存する表面層で銀と金とわずかに水銀を検出したことから、銅芯に金銀合金を卷いたものと考えられる。なお、耳環 11 と 12 は、揮発等で残存しない可能性がある水銀の検出に差があるので、材質や形状は似ていることから、対の耳環であった可能性がある。

耳環 13 では、表面層の残りが少なく検出強度が弱いが、金を検出している。銅に金(金銀合金)が施されたものと思われる。ただし、無垢の銅耳環に他の遺物から金銀が付着した可能性も否定できない。なお、形状的には 8 との対の耳環である可能性がある。

耳環 14 は、今回分析した中では最も大きいものである。残存状態が良好な表面層で金を強く検出したころから、銅芯に金を卷いたものと考えられる。

耳環 15 では、残存状態が良好な表面層から金を強く検出したころから、銅芯に金を卷いたものと考えられる。なお、重さの違いが大きいため断定はできないが、形状と材質から耳環 2 と対の耳環であった可能性がある。

(山田 卓司)

付論 7 桑原西古墳群出土人骨について

桑原遺跡で調査された古墳から出土した人骨の同定を行った。

A 3号墳： 出土した骨は骨粉のみで部位の同定は困難であった。

A 7号墳： 出土した骨は肋骨片が4点、四肢骨片が1点である。骨は保存状態が非常に悪く、骨表面のみが確認できた。肋骨片は骨体部のみが保存されている。特筆すべき点はない。四肢骨片は左側上腕骨遠位部の一部である。骨質は薄く華奢である。骨端部が破損しているために年齢と性別を推定することはできなかった。

B 7号墳： 出土した骨は約20点の骨片、および骨粉である。骨片は全て四肢骨片で、脛骨と腓骨片が確認できた、脛骨と腓骨片とも骨体部の一部であり、骨質は薄いが華奢な印象はない。骨片が小さく左右については判断できない。骨の表面は筋付着面が確認でき、その状態から本人骨が成人の域に達していたと推定した。しかし、性別を確定することはできなかった。

竪穴式小石室

歯が1点出土している。保存されているのは歯冠部のみである。副葬品の影響で歯は青緑色をしている。歯は下顎の左側第二大臼歯である。咬耗はブロカの1度程度であり、歯冠の遠心面に圧迫された跡が確認できることから本人骨の年齢は10代後半から20代くらいであったと推察できる。歯から性別は推定できなかった。（奈良文化財研究所環境考古学研究室 橋本 裕子）

付論 8 桑原西古墳群の横穴式石室石材について

桑原遺跡において、古墳時代終末期の横穴式石室を20基まで確認したことは先にも述べたが、ここでは特に良好な残存状況にあった石室に使用されていた主だった石材の鑑定結果を述べる。

発掘調査時に石室側壁の主だった石材の表面を洗浄、ルーペを用いて観察した結果に基づいて分類し、調査区内に散乱していた礫より分類された石材と各々同様の岩相を持つ石材をサンプルとして持ち帰り、各々アルファベットでサンプル名を定めた。持ち帰ったサンプルを粉碎し、ルーペを用いて破断面を観察した結果、主に4種の岩石に分類することができた。結果は、サンプルA（カラー図版4-1）は粗粒花崗閃緑岩、サンプルB（同4-2）はアプライト質閃緑岩、サンプルC（同4-3）は中粒石英閃緑岩、サンプルD（同4-4）は頁岩である。ただ、石室の石材は破壊をしてまで破断面を観察することは妥当でないと考えたため、石材によっては風化が進んだ部分を観察せざるを得なかつたものもあった。そのため、一部正確な検討ができていない可能性は否めないが、サンプルの4種の石材は肉眼でも識別が比較的用意であるほど岩相が異なるため、鑑定は概ね信頼できると考えてよいであろう。

岩種だけではなく石材の産地を推定するために、2007年7月16日及び29日の2日間にわたりて調査区周辺を踏査し、サンプル採取を行った。採取したサンプルは8点（カラー図版4

表 33 鑑定石材一覧

番号	サンプル番号	岩種	備考	採取地・岩帶
1	サンプルA	粗粒花崗閃綠岩	風化	H18年度調査区内
2	サンプルB	アPLIT質閃綠岩		H18年度調査区内
3	サンプルC	中粒石英閃綠岩		H18年度調査区内
4	サンプルD	頁岩		H18年度調査区内
5	070716-01	頁岩		超丹波帶高楓層 Tkm
6	070726-03	アPLIT質閃綠岩	非常に硬い	茨木複合花崗岩体能勢花崗岩 Dnm 中粒石英閃綠岩とGdn粗粒花崗閃綠岩(部分的に輝石を含む)の境
7	070716-04	粗粒花崗閃綠岩	部分的に輝石を含む	茨木複合花崗岩体能勢花崗岩 Gdn
8	070716-05	中粒石英閃綠岩		茨木複合花崗岩体能勢花崗岩 Dnm
9	070729-01	粗粒花崗閃綠岩	部分的に輝石を含む	茨木複合花崗岩体能勢花崗岩 Gdn
10	070729-02	チャート	転石	茨木複合花崗岩体能勢花崗岩 Dnm 中粒石英閃綠岩とGdn粗粒花崗閃綠岩(部分的に輝石を含む)の境
11	070729-03	頁岩		丹波帶II型層群田能コンプレックス Tm
12	070729-04	頁岩		丹波帶II型層群田能コンプレックス Tm

- 5 ~ 12) であり、採取地とサンプルの破断面の観察結果を地質図（宮地他 2005）と照らし合わせて検討した結果は表 33 に示した通りである。岩種は、調査区内で採取したサンプルと一致する 4 種に分類できた。

この結果に基づいて、横穴式石室に用いられた石材の産地推定を行った。サンプル A に属する粗粒花崗閃綠岩は（特に大きな石材に）最も多く使用されている石材である。これは、大岩地区から西北へ広がる茨木複合花崗岩体能勢花崗岩に属する (Gdn)。サンプル B のアPLIT質閃綠岩と最もよく似ている岩相を呈しているものが、070716-03 であるが、これはサンプル B よりもいっそうアPLIT質化が著しく、珪質が目立って観察された。070716-03 は茨木複合花崗岩体能勢花崗岩の分布域において、中粒石英閃綠岩 (Dnm) と粗粒花崗閃綠岩 (Gdn) という 2 つの岩帶の境界周辺で採取されたサンプルである。岩帶の境界において形成されたために、アPLIT化が進んだと思われる。サンプル C に分類される中粒石英閃綠岩は、サンプル A と同じく、茨木複合花崗岩体能勢花崗岩に属する。サンプル D の頁岩は、石室側壁においても比較的小型な石材として用いられていた。調査区の東に位置する阿武山及び車作地区から安威川沿いに北へ分布する超丹波帶高楓層 (Tkm) に由来する。また、070729-02 は露頭から粉碎したわけではなく、転石を採取したチャートである。石室においてもチャートは使用されていたが、主だった大きな石材ではなく、隙間を埋めるごく小さな石材に限られていた。調査区の周辺では、当該サンプルの採取地ではないが、阿武山古墳から南にかけて広がる丹波帶田能コンプレックスの頁岩にはチャートのレンズを含むものが観察されている。鑑定の結果、桑原遺跡の横穴式石室に使用されていた石材はすべて、半径約 1 km の範囲内で調達が可能であり、現地の石材である。遠隔地から搬入されていた可能性はほぼないと考える。

(小川)

* 追加調査のための調査区周辺の踏査及び石材鑑定については小倉徹也氏（大阪市文化財協会）にご教示をいただいた。

[参考文献]

宮地良典・他 2005 『京都西南部地域の地質』 地質調査総合センター

Kuwano-hara Site

This volume is an excavation report of Kuwano-hara Site, located in Ibaraki-City, Osaka Prefecture. The major excavations had been undertaken twice, from September 2004 to May 2005, and November 2005 to June 2006, over the area of approximately 9,000 square metres, due to the dam construction on Aigawa-River. The investigation revealed continuous existence of archaeological structures from the Yayoi Period (around the 3rd Century BC) to the Middle Age (around the 12th century AD). The land was developed in a large scale for the cultivation during the following period, which converted the landscape closer to the current view.

There were the midiaeval gulleys at the eastern and southern ends of the excavated area, which restricted the utilised land at the centre. The area was inhabited and cultivated from the 9th century throughout the Middle age, according to the excavated pit holes, indicating the dwellings, traces of drainages and ditches, and some pottery pieces.

The investigation also uncovered the intensive tumulus cluster, dated before such land development, which was named Kuwano-hara-nishi Tomulus Cluster. 24 burial mounds mainly constructed in the 7th century were concentrated on the area of approximately 80 metres from north to south, and 70 metres from west to east, sharing the moats. All of them held the passage graves under the mounds, 13 of which were particularly well preserved (the detail information of the each tumulus is on Table 34 below). There were a pit- burial and a small shaft grave without mounds, in addition.

The tumulus cluster can be subdivided into 4 groups; Ai, Aii, B and C. Remarkably, all the tumuli were intensively constructed in a small time-span in the 7th century AD. Most chambers, except that of Tumulus C3, were repeatedly used. Tumulus C3 had distinctive characteristics with

rich grave goods and a peculiar mound shape. The octagonal mounds were allowed to only very special persons at that time.

There should have been the cemetery for the powerful clan and the related people in this region in the 7th century.

Table 34 Kuwahara Nishi Tumulus

group	tumulus no	period of construction	no.of Burial(at least)	mound shape	mound size (m)	chamber length (m)	chamber width (m)	length/width ratio	direction	earring	nails for coffin	ceramic coffin
A i	A 0・1	—	—	round	—	—	—	—	—	—	—	—
A i	A 2	Kuwahara II	—	round	—	—	—	—	—	—	—	—
A i	A 3	Kuwahara III	3	round	ap.12.90	3.70+α	1.32	—	N 1° E	silver 1,gold 1	many	○
A i	A 4	Kuwahara V	2<	round	ap.11.90	4.92	1.20	4.10	N21° E	—	4	—
A i	A 5	Kuwahara I	—	square	ap.11.60	—	—	—	—	—	—	—
A i	A 6	Kuwahara I	—	octang.	ap.11.80	—	—	—	—	—	—	—
A ii	A 7	Kuwahara II	2<	square	ap.10.10	6.00	1.04	5.77	N21° W	gold 1	none	—
A ii	A 8	Kuwahara II	3	round	ap.10.00	5.07	1.07	4.74	N16° E	silver 2(pair)	none	—
A ii	A 9	Kuwahara I	—	square	—	—	—	—	—	—	—	—
A ii	A 10	—	2<?	square	—	—	—	—	—	gold 1	—	—
B	B 1	Kuwahara V	2<	round	ap.14.40	6.70+α	1.58	—	N11° W	—	2	—
B	B 2	Kuwahara I	—	square	ap.11.50	6.52	1.20	5.43	N14° E	—	—	—
B	B 3	Kuwahara III	1<	round	ap.12.20	1.27+α	1.89	—	N12° E	—	many	—
B	B 4	Kuwahara II	1<	square	ap.10.50	6.60	1.24	5.32	N7° E	gold 1(disturbed)	none	○
B	B 5	—	—	square	—	—	—	—	—	—	—	—
B	B 6	—	—	square	ap.11.00	—	—	—	—	—	—	—
B	B 7	Kuwahara IV	1?	round	—	4.34	0.95	4.57	N11° W	gold 2(pair)	none	—
B	B 8	Kuwahara I	1<	round	ap.11.80	2.25+α	1.00	—	N 6° E	—	a few	—
C	C 1	Kuwahara I	2<	square	ap.8.00	4.27	0.96	4.45	N13° E	silver 2(pair)	none	○
C	C 2	Kuwahara II	—	round	—	—	—	—	—	—	—	—
C	C 3	Kuwahara IV	1	octagonal	diam.10.0 side 4.00	5.45	1.20	4.54	N13° W	silver 3	many	—
C	C 4	Kuwahara V	—	round	ap.9.00	—	—	—	—	—	—	○?
C	C 5	—	—	square	—	—	—	—	—	—	—	—
C	pit burial	Kuwahara III	1	—	—	2.77	1.46	1.90	N15° E	—	—	—
A i	small shaft-grave	Kuwahara V	1?	—	—	1.38	0.45	3.07	N 1° E	silver 3	none	—

報告書抄録

ふりがな	くわのはらいせき						
書名	桑原遺跡						
副書名	安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査						
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2007-4						
編著者名	一瀬和夫・小川裕見子・前田俊雄						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くわのはら 桑原	いばらきし くわのはら 茨木市桑原	27221	135	34°51'20" 135°34'02"	2004年9月21日 2005年5月20日 2005年11月4日 2006年6月30日	5180m ² 3883m ²	安威川ダム 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原	集落・古墳	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	横穴式石室を伴う群集墳 桑原西古墳群 溝、ピット 溝、谷、ピット、石組	土器 土器、破鏡、石鏃 土師器、須恵器、陶棺、磚、耳環、ガラス玉、鉄釘、刀子、人骨片、歯等 黒色土器、土師器、須恵器 土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、瓦、骨	調査区中央部の微高地の斜面上に、古墳時代終末期の群集墳。 調査区東端及び南端に中世に埋没した複数の谷。 古代～中世にかけて掘立柱建物、溝。
要旨	古代～中世にかけて、居住地及び耕作地として利用されていた、谷に開まれた微高地の斜面に新規発見の古墳時代終末期群集墳が存在した。墓域は谷とともに埋没していた。古墳の保存のため遺構の調査は行わなかったが、縄文・弥生時代の土器片などが出土し、その頃から遺跡が継続して存在したことがわかった。				

桑原遺跡

安威川ダム建設事業に伴う桑原地区の調査

発行 大阪府教育委員会

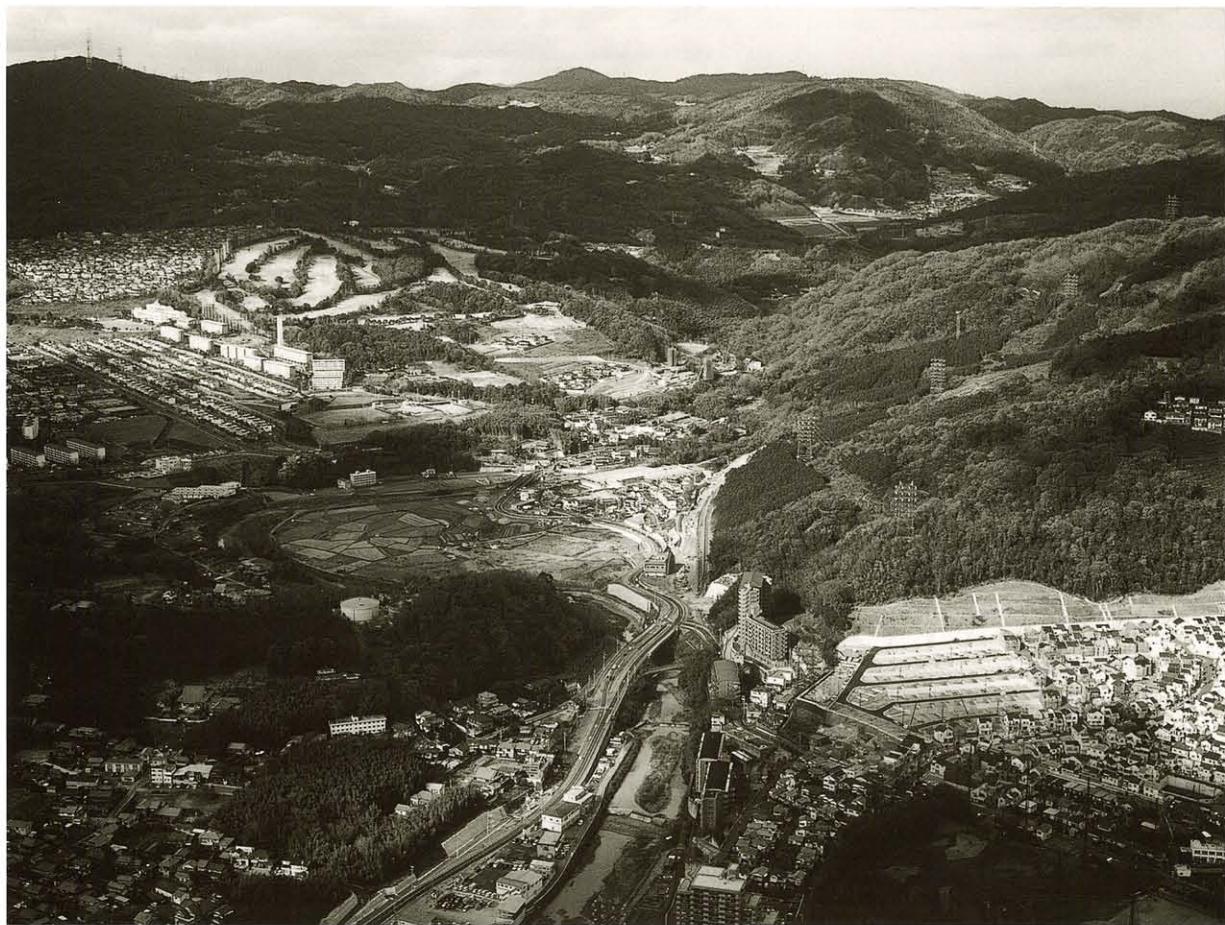
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351

発行日 平成20(2008)年3月31日

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号 TEL06-6976-8761

図 版



調査区周辺（北から：右手前が阿武山）

平成16年度調査区 航空写真測量 1回目（北から）





平成16年度調査区 航空写真測量2回目（北から）

平成16年度調査区 航空写真測量3回目（南から）





平成17年度調査区 航空写真 古墳掘削前（南から）

平成17年度調査区 レッカ撮影写真 古墳完掘後（南東から）





平成17年度調査区 航空写真 中世の遺構北半（南から）

平成17年度調査区 航空写真 中世の遺構南半（北から）





平成18年度 古墳完掘後全景（南東から）

平成18年度 古墳完掘後全景（東から）





平成16年度調査区
掘立柱建物・C5号墳



平成17年度調査区
谷上層の柵列（南から）



B3号墳他検出状況



A2号墳・A4号墳他
検出状況



A 3号墳他検出状況



A 2号墳
石の抜き取り痕跡



A 2号墳周溝断面・
長胴甕出土状況（東から）



平成16年度調査区
溝1横瓶出土状況



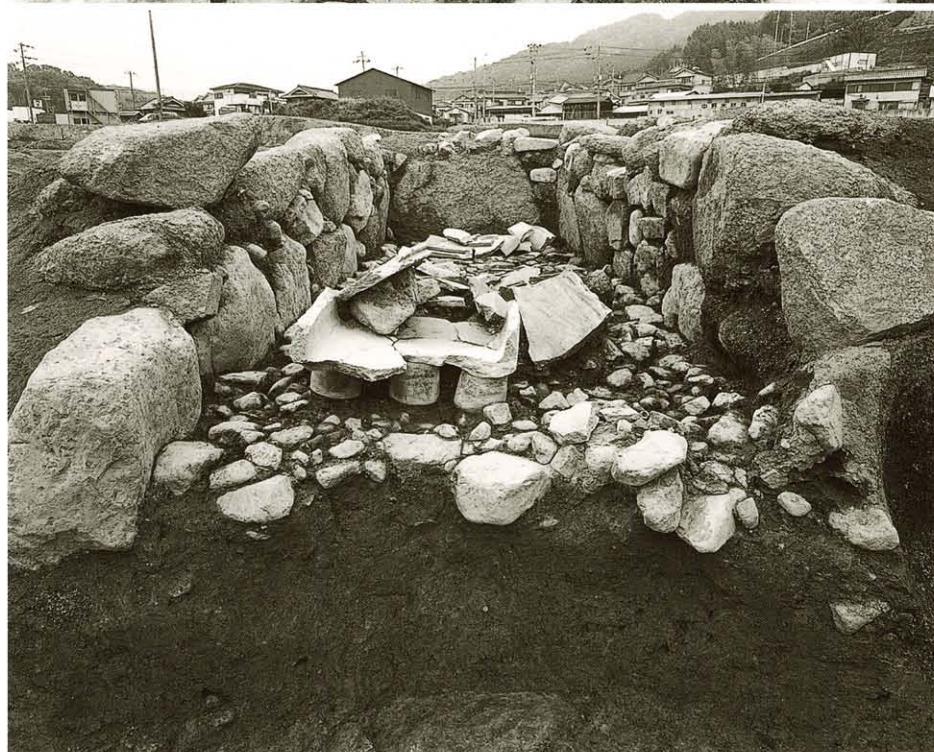
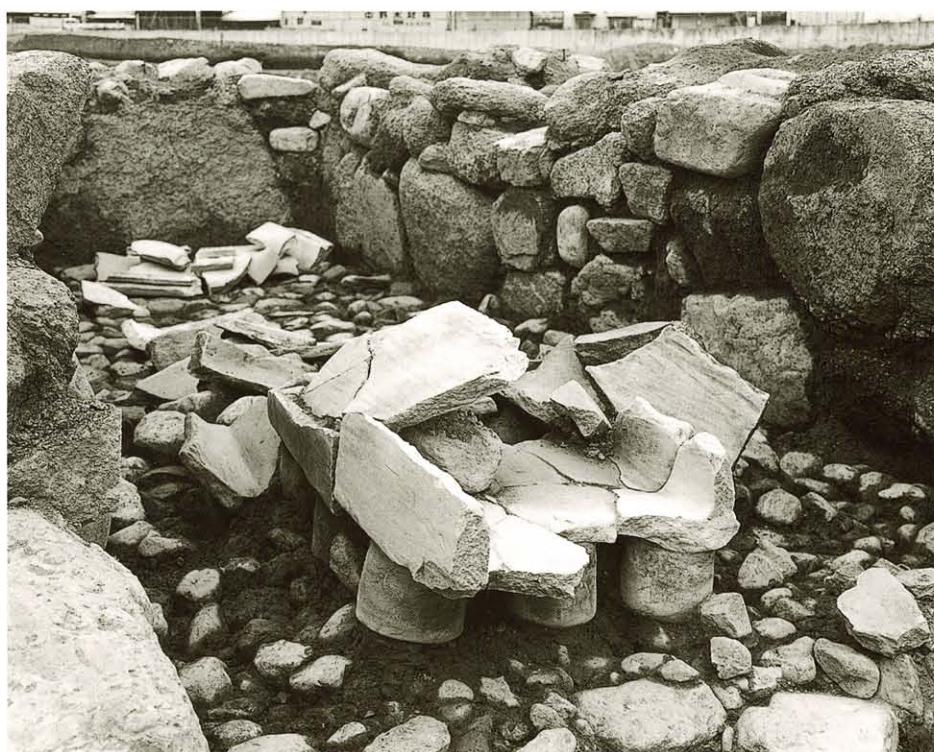
平成16年度調査区
土坑1断面（南から）



A 3号墳石室と陶棺（南から）



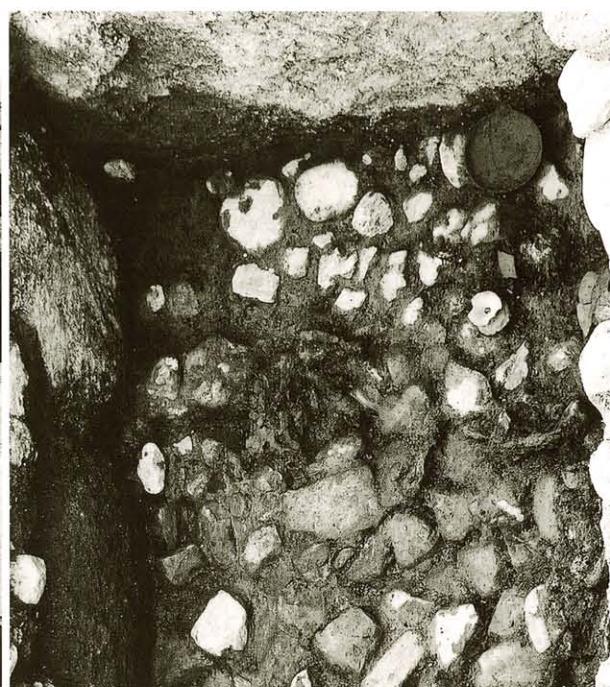
A 3号墳陶棺身



A 3号墳陶棺蓋の栓出土状況



A 3号奥壁付近
遺物出土状況（上層）



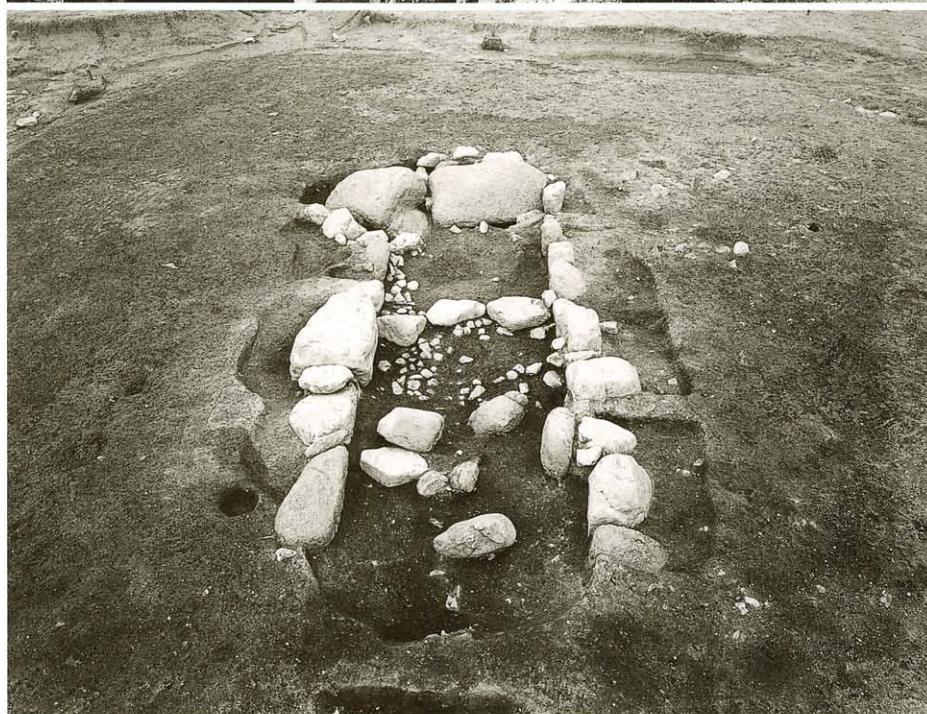
A 3号奥壁付近
遺物出土状況（下層）



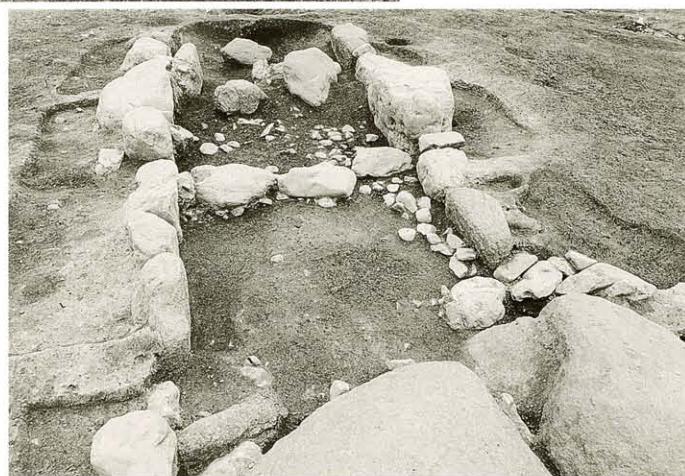
A 3号墳開口部付近
遺物出土状況（東から）



A 3号墳石室床（東から）



A 4号墳石室
(奥壁から)

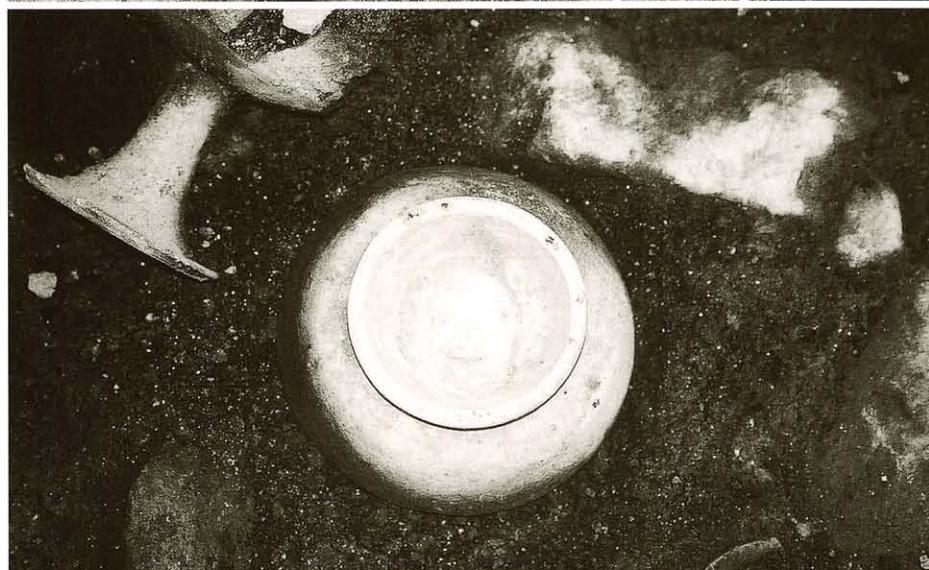




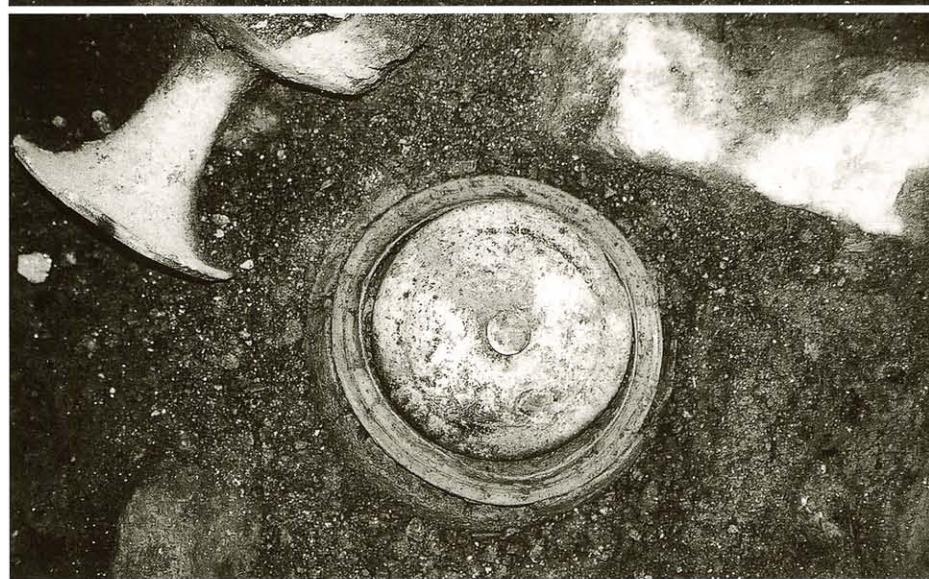
A 4号墳石室と墓道
(南から)



A 4号墳墓道土器
出土状況 (石室側から)

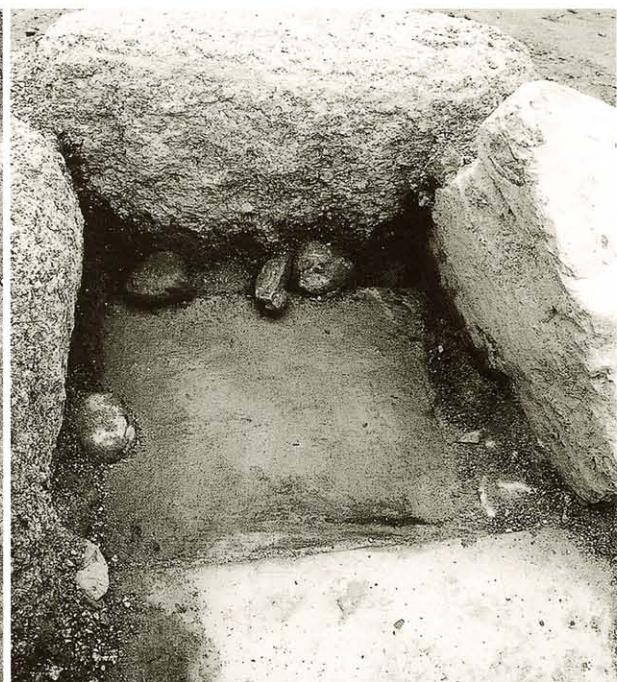


A 4号墳石室内
遺物出土状況



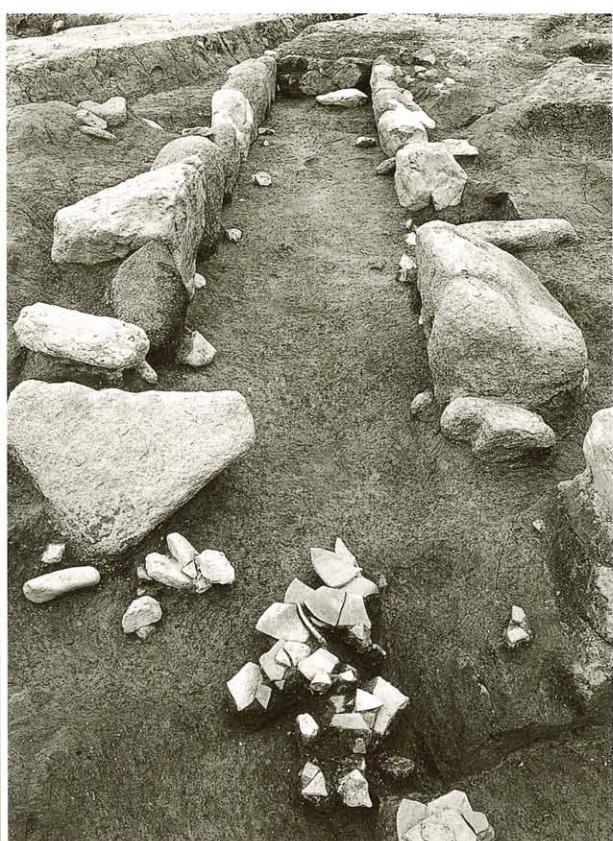
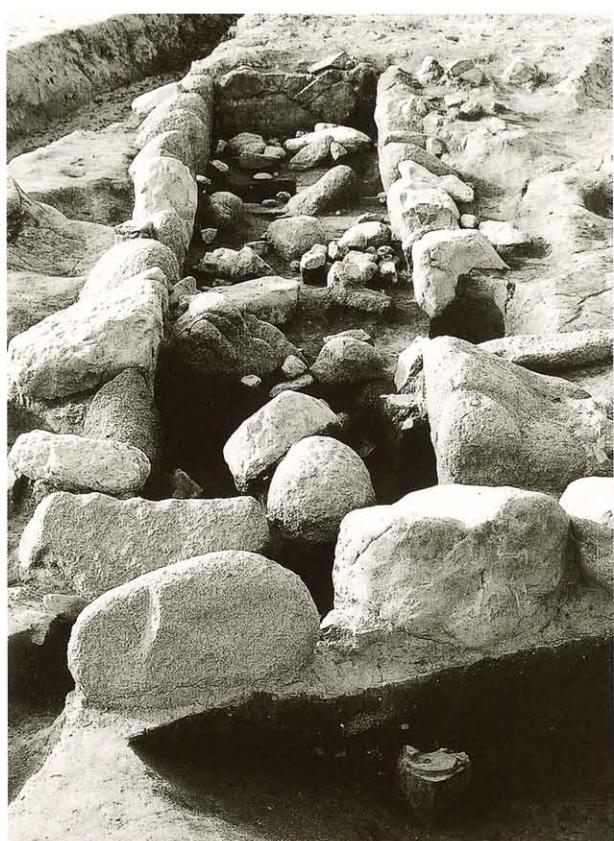
A 4号墳石室内
遺物出土状況
(杯B取り上げ後)

豎穴式小石室
(北から)
図版
13



南端上段の磚取り上げ後
(北から)

床面の磚取り上げ後
(南から)



A 7号墳（南から）



A 7号墳墳丘トレンチ



A 7号墳遺物出土状況
(東から)



A 7号墳人骨出土状況 (東から)



A 8号墳遺物出土状況
(奥壁付近)



A 8号全景（南から）

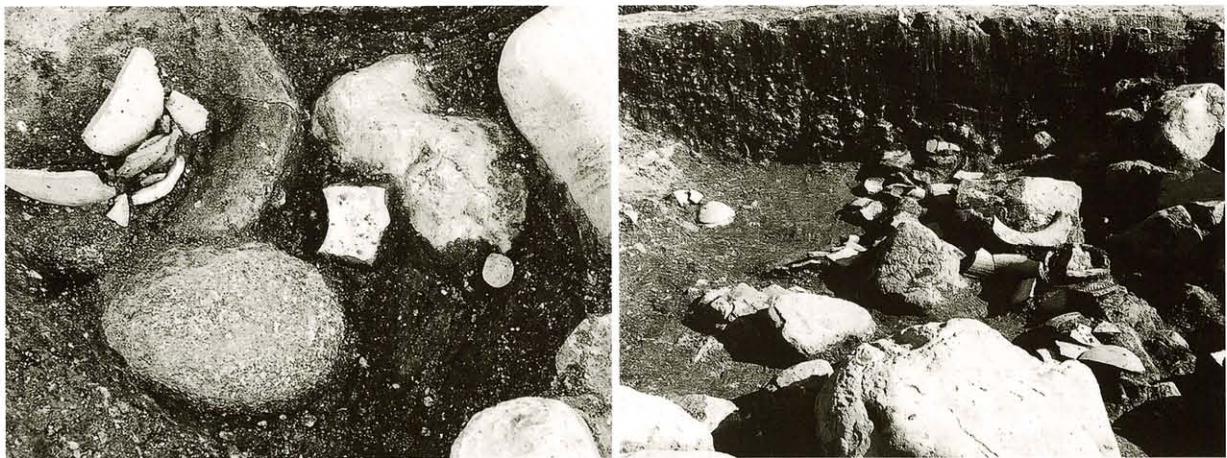
A 8号墳石室（奥壁から）



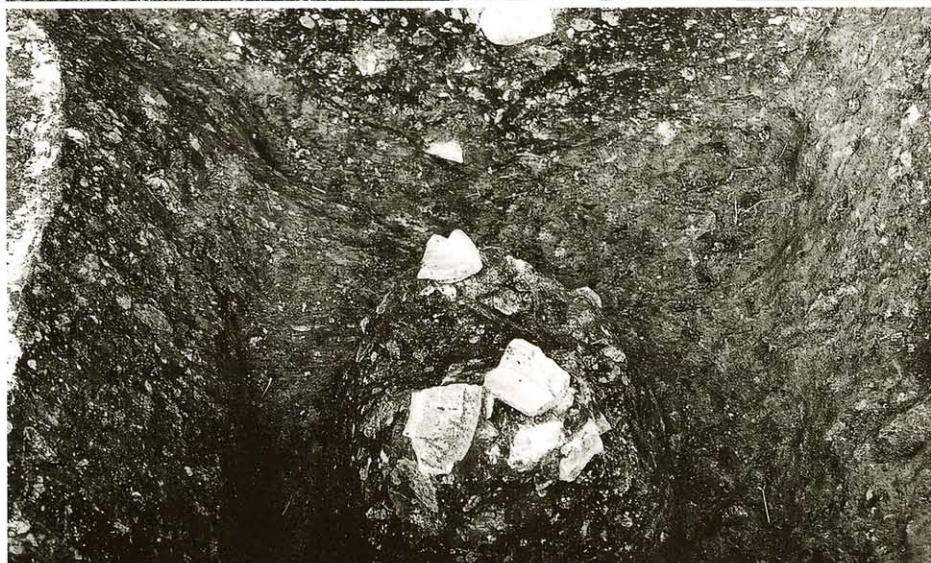
A 8号墳周溝内
掻き出し遺物出土状況（南から）

A 8号墳墳丘トレンチ（南から）





A 9号墳
提瓶と
有孔円盤
A 9号墳
周溝内土器
出土状況



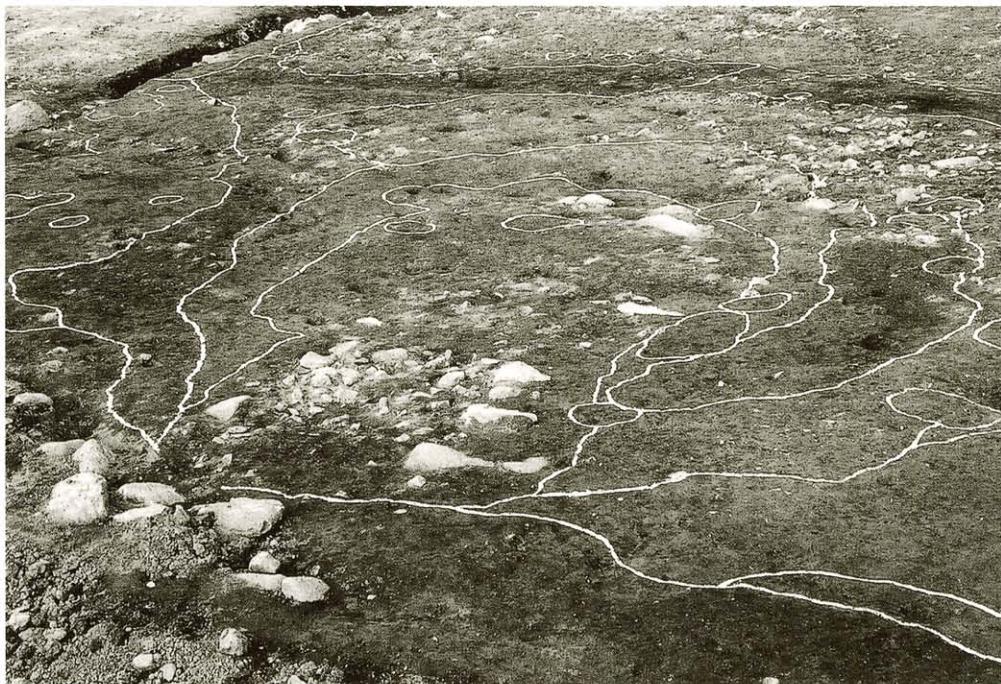
C 5号墳
溝内土器
出土状況

A 10号墳
バラス敷
A 10・
C 5号墳
溝

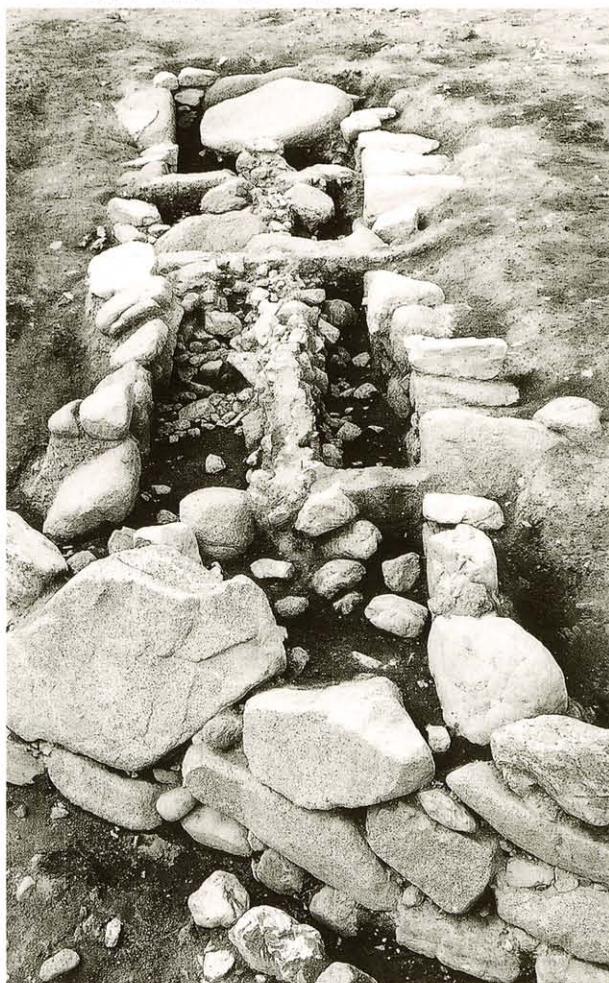


B 1号墳検出状況

図版
18



B 1号墳中世時状況（南から）



B 1号墳石室床面（南から）

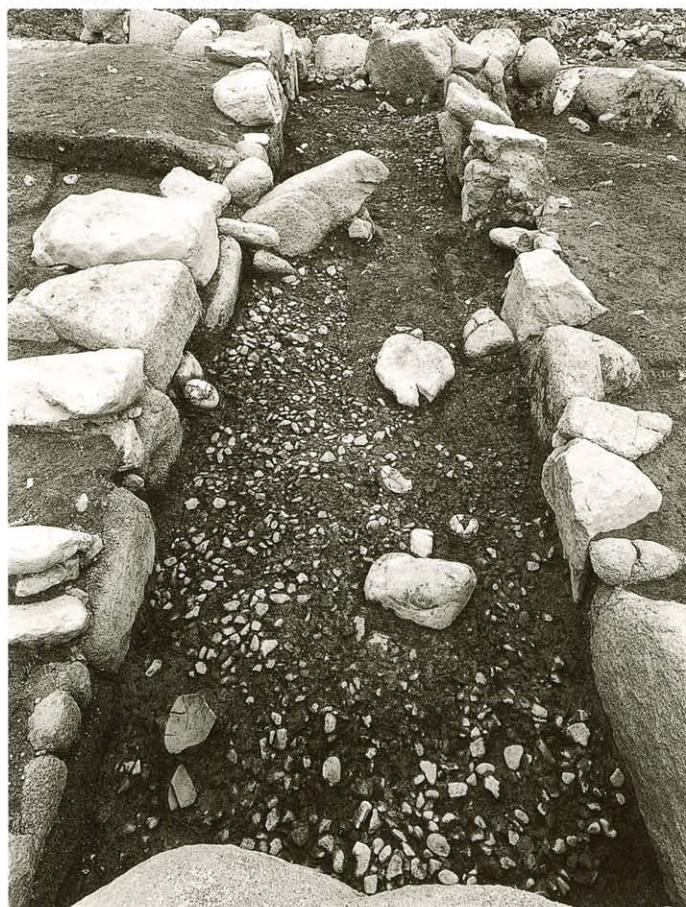


B 1号墳全景



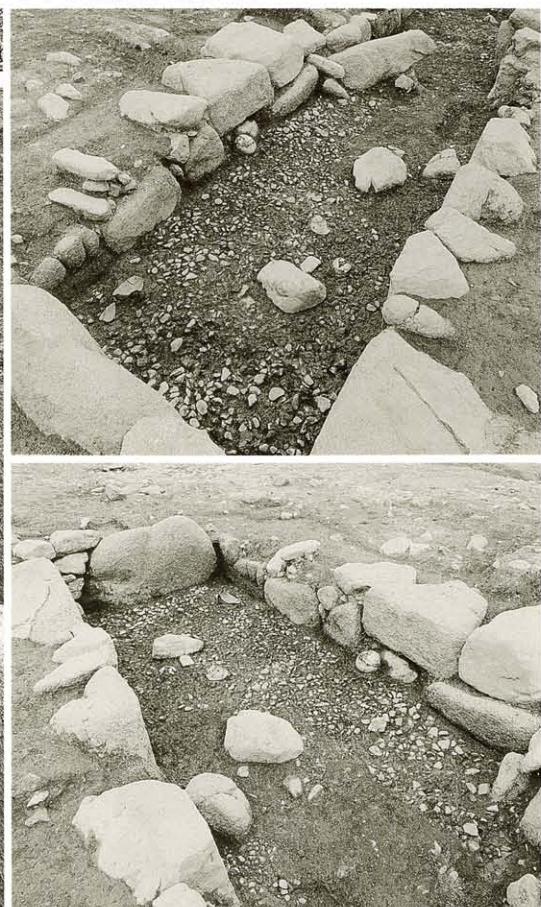
図版
19

B 1号墳石室（北から）



B 1号墳石室（北から）

B 1号墳石室（南から）



B 1号墳石室内遺物出土状況 図版
20



B 1号墳墳トレンチ
(北から)



B 1号墳墳丘断面
(南から)



B 1号墳石室内
床トレンチ (南から)



B 2号墳排水溝
(南から)



B 2号墳石室
(南から)



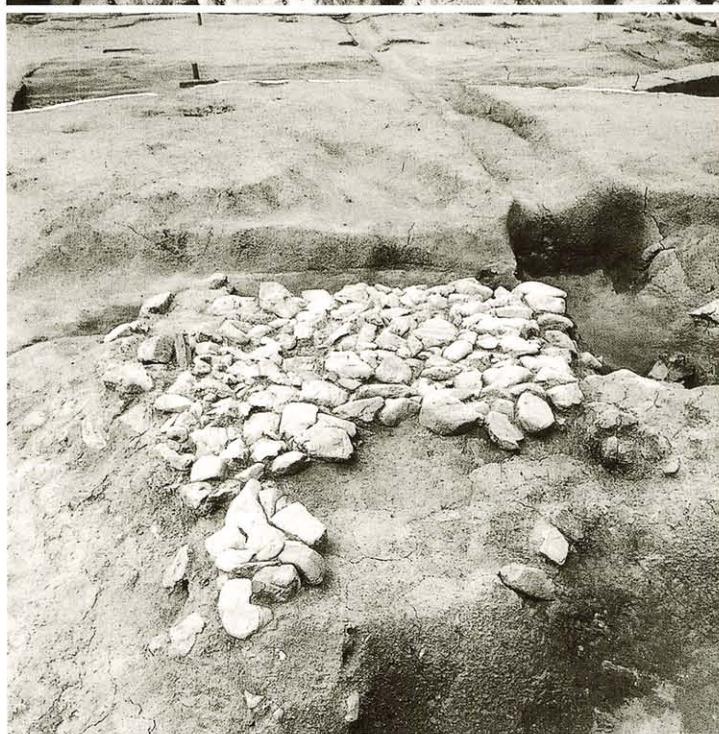
B 4号墳周溝北側
土器出土状況



B 3号墳全景
(南から)



B 3号墳石室礫床

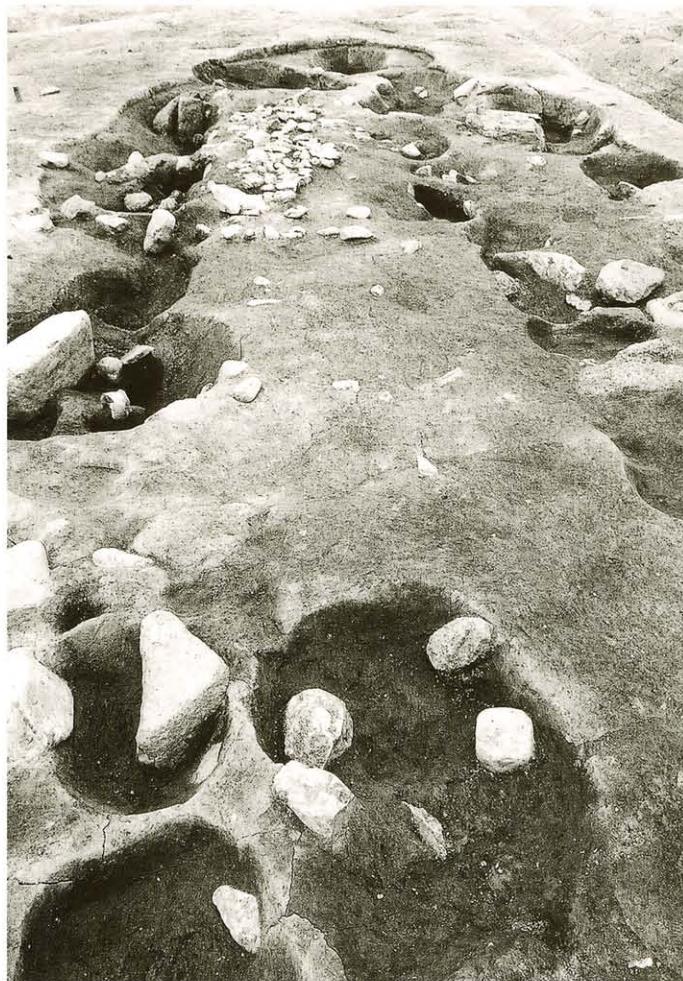


B 3号墳石室床と石の抜き取り穴完掘後
(南から)

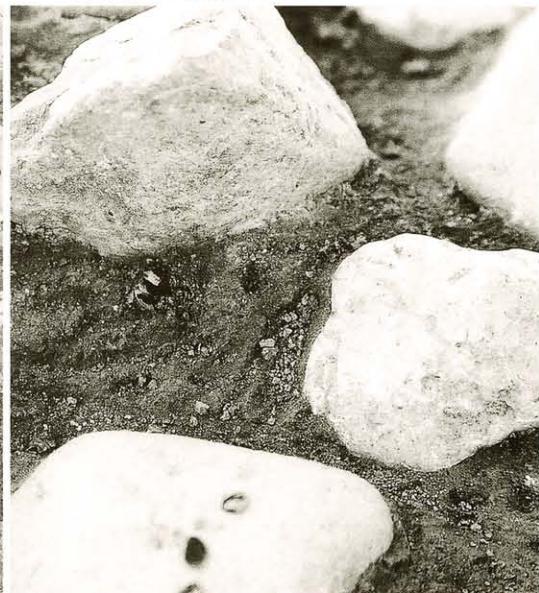


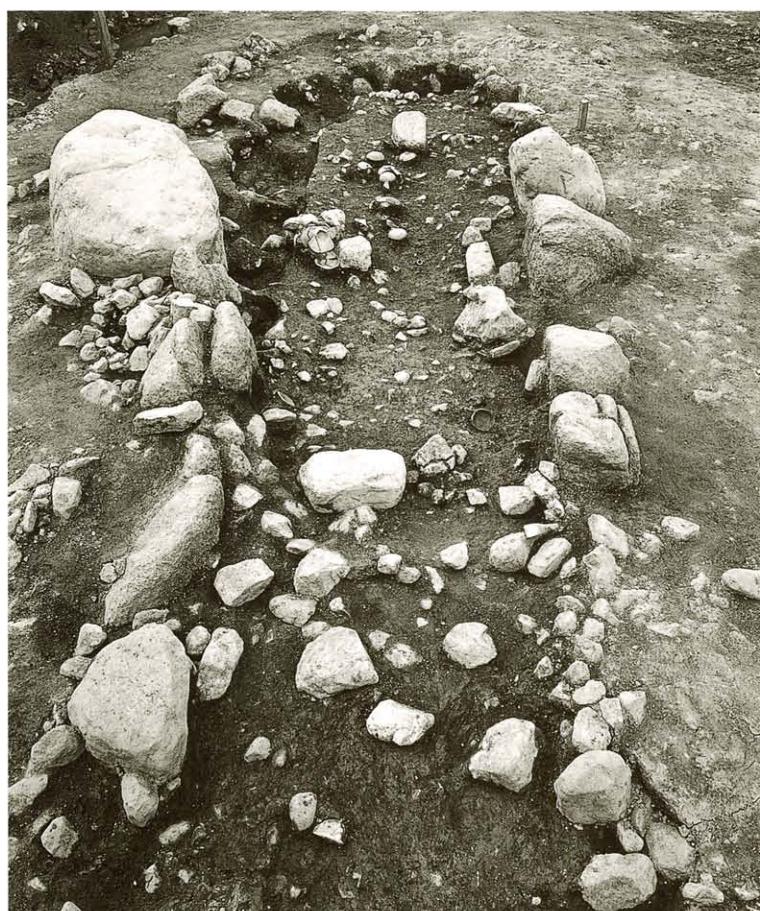
B4号墳全景（南から）

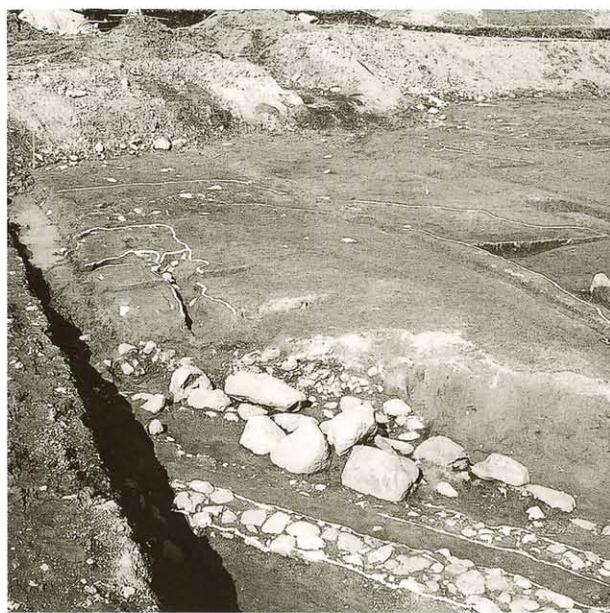
B4号墳石室（南から）



B4号墳石室内琥珀出土状況



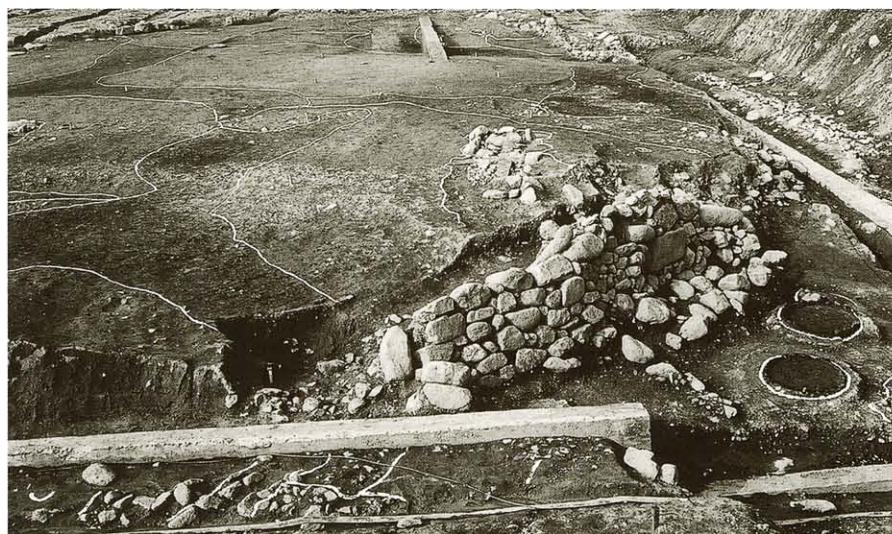




B 8号墳全景（南から）



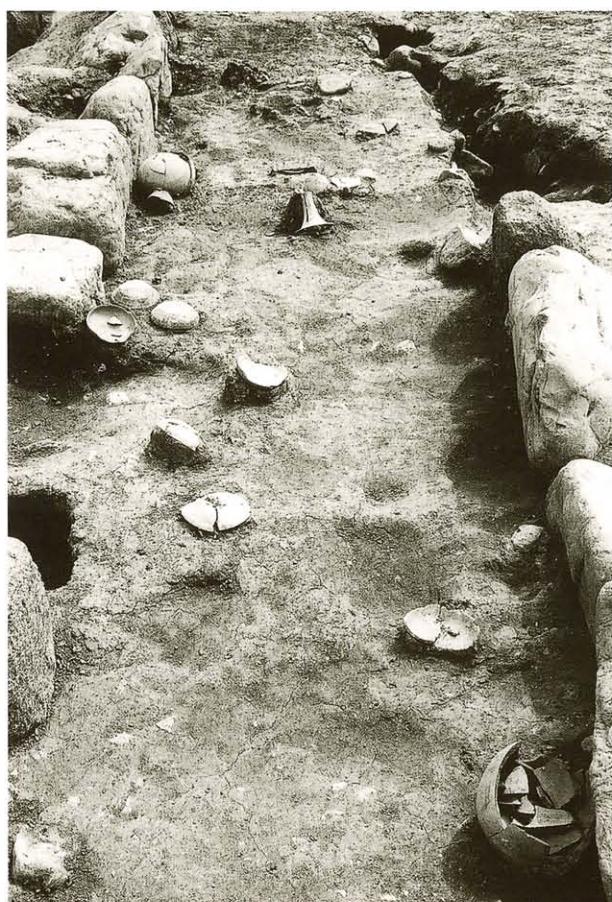
B 8号墳主体部土器出土状況
(東から)



C 1号墳検出状況(南から)



C 1号墳石室完掘後(南から)



C 1号墳石室内遺物出土状況(北から)

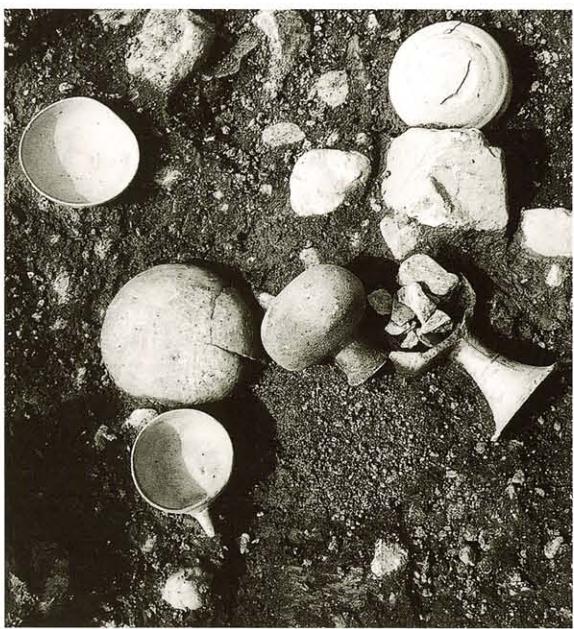
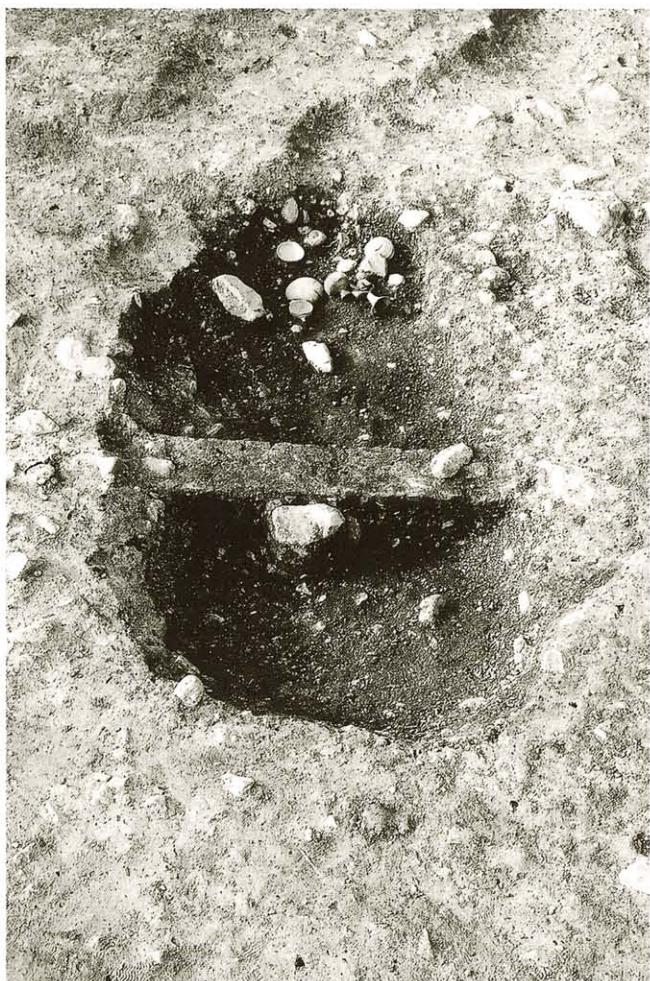


C 1号墳石室内遺物出土状況(南から)

C 1号墳石室内土器出土状況(南から)

C 1号墳石室内耳環出土状況(南から)



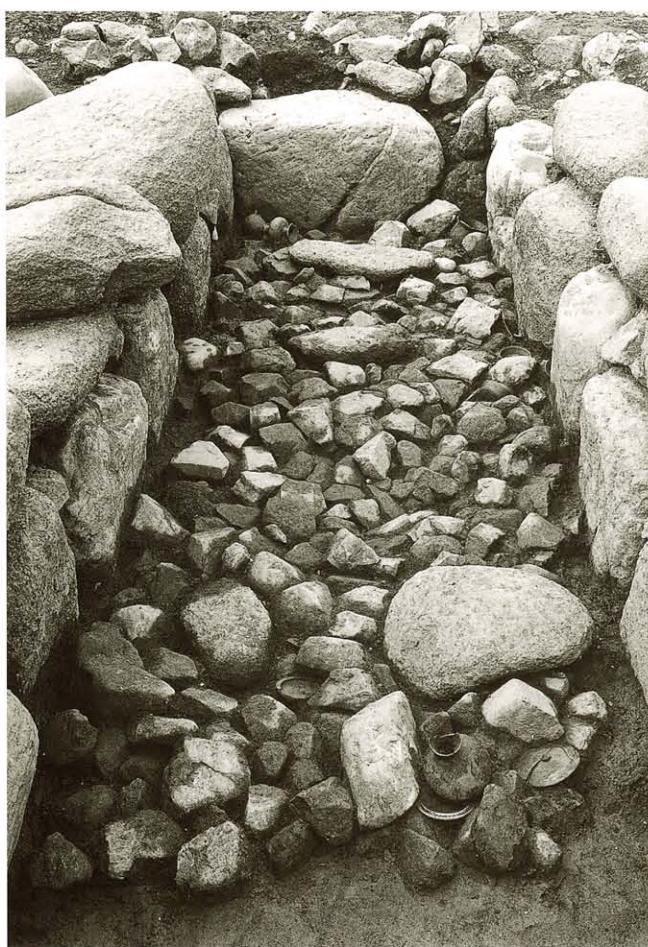


土壤墓内土器出土状況(南から)

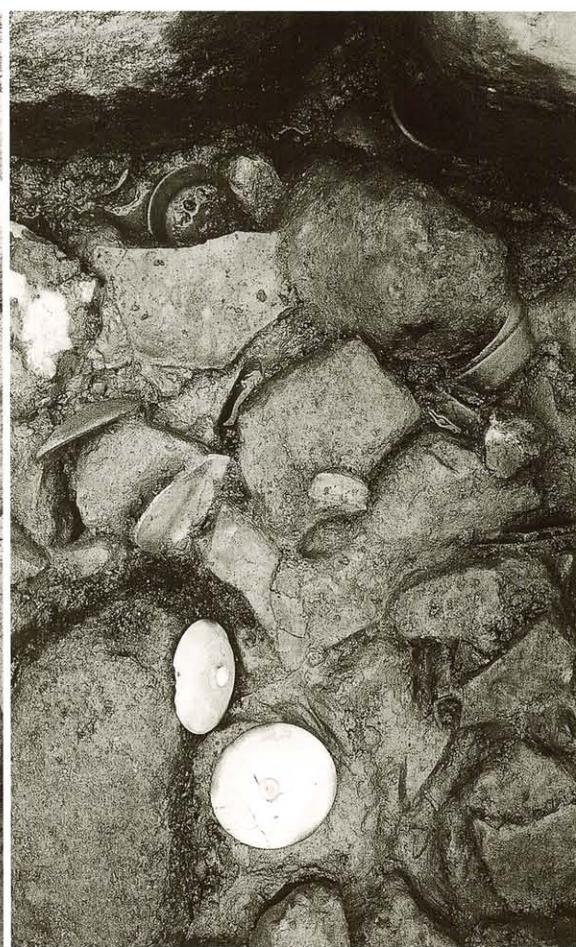
土壤墓(南から)

C 3 号墳検出状況全景





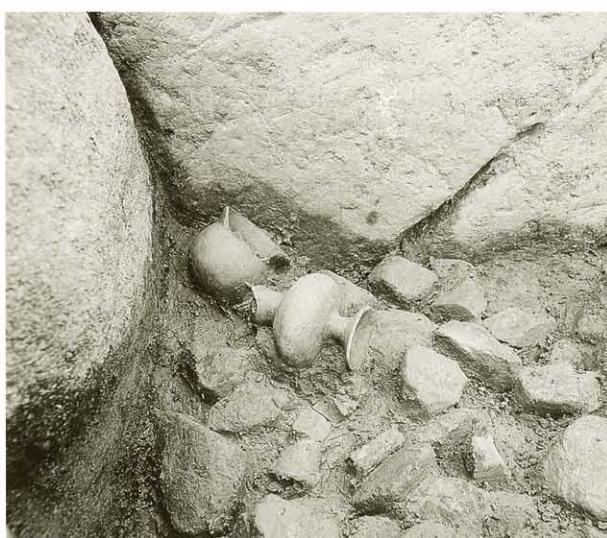
C 3号墳石室



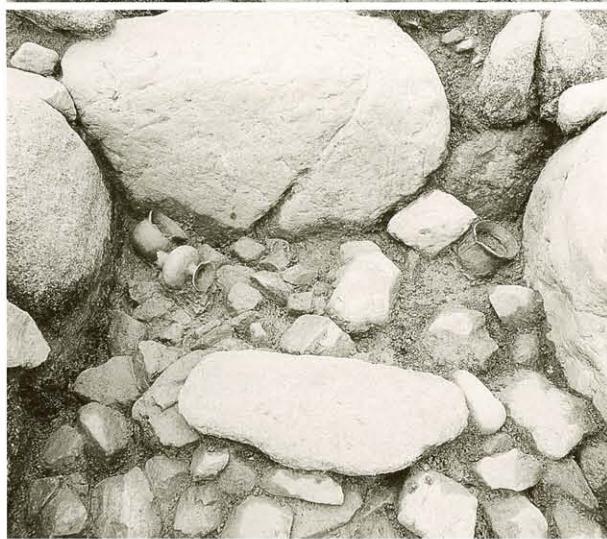
C 3号墳石室内
奥壁付近土器出土状況(南から)



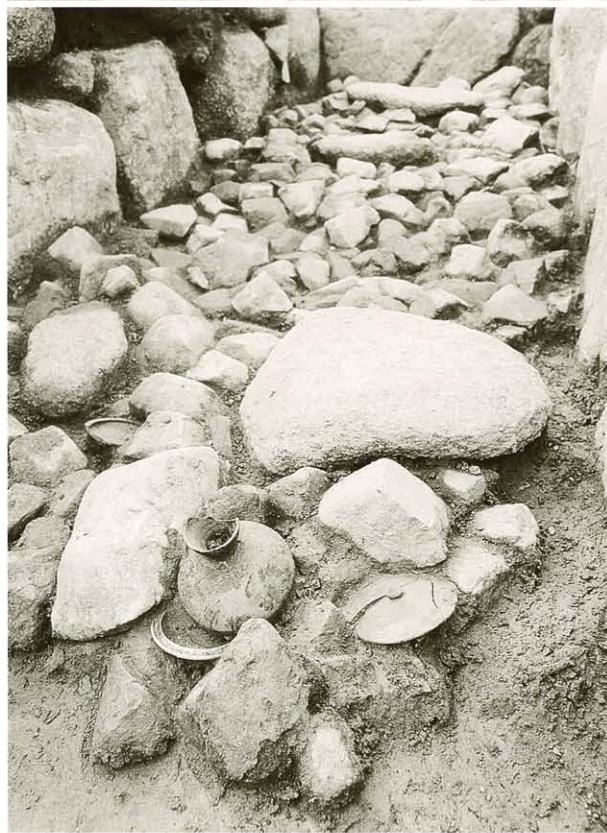
C 3号墳墓道検出状況



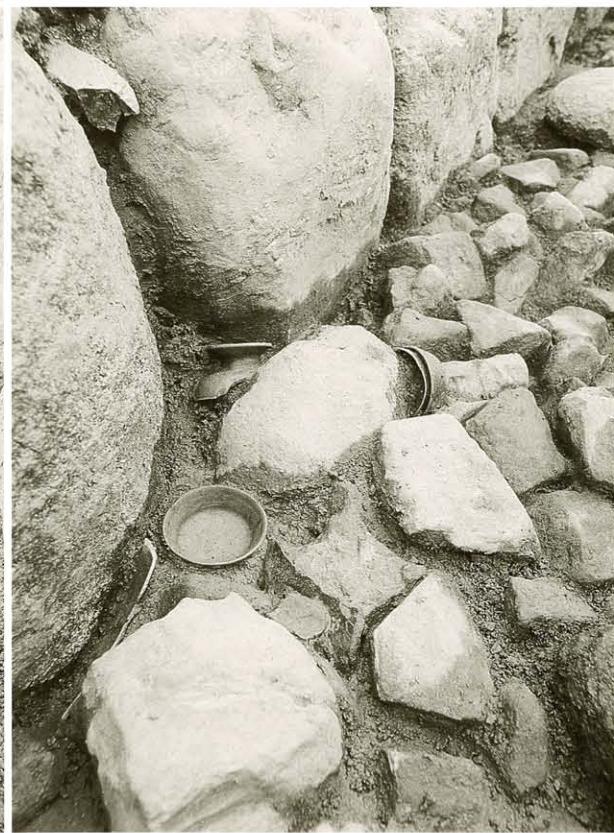
C 3号墳石室内
奥壁付近土器出土状況(東から)



C 3号墳石室内
奥壁付近土器・棺台出土状況(南から)



C 3号石室内開口部
土器出土状況(南から)



C 3号墳石室内
奥壁付近土器出土状況
(北から)

C 3号墳全景（西から）



A 8号墳・C 3号墳間
周溝交点の断面（南から）



C 3号墳石室背面
墳丘内排水溝断面（西から）





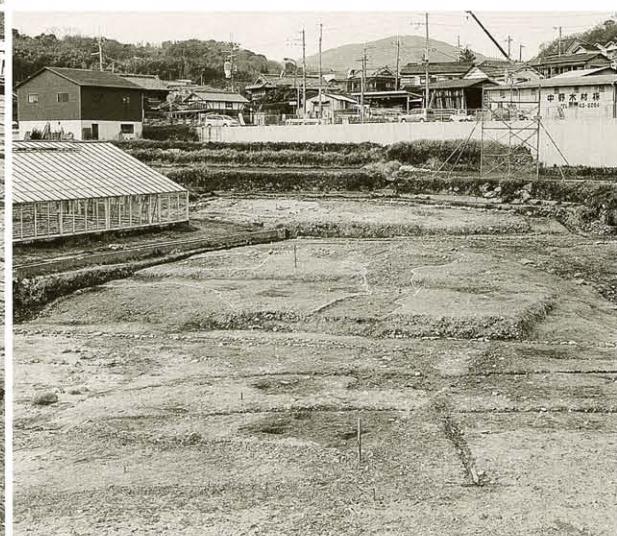
C 3・4・5号墳検出状況
(平成17年度調査区・南から)



C 5号墳周溝検出状況
(平成16年度調査区・北から)



C 4・5号墳周溝検出状況
(平成17年度調査区・北から)



C 2号墳周溝検出状況
(平成16年度調査区・南から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

桑原西古墳群出土遺物：A 4号墳石室内



12



13



15



14



17



16



18



19



20



21

桑原西古墳群出土遺物 : A 4 号墳石室内 (12・13) ・ A 7 号墳 (15~18) ・ A 8 号墳石室内 (19) ・ A 9 号墳溝 (20・21)



23



24



25



26



27



28



29



30



22

桑原西古墳群出土遺物：B 7号墳石室内（23～30）・B 8号墳石室内（22）



31



32



33



35



34



36

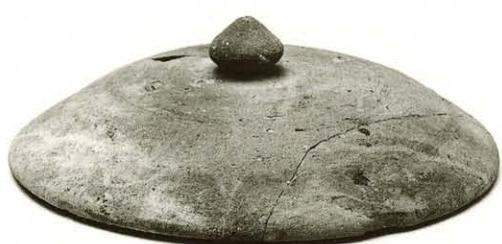


41



43

桑原西古墳群出土遺物：C 1号墳石室内（31～36）・C 3号墳石室内（41・43）



37



38



39



40



42



45



44



46



47

桑原西古墳群出土遺物：C 3号墳石室内



48



50



49



57



51



56

桑原西古墳群出土遺物：A 8号墳墓道（48～50）・土壙墓（51・56・57）



52



54



53



55



58

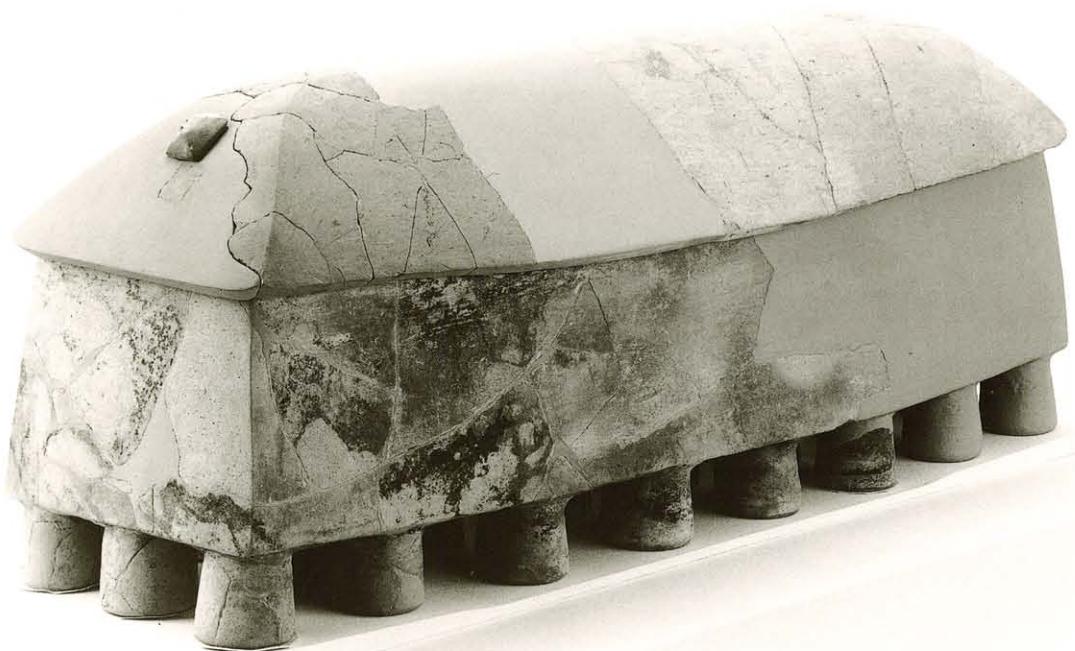


59



60

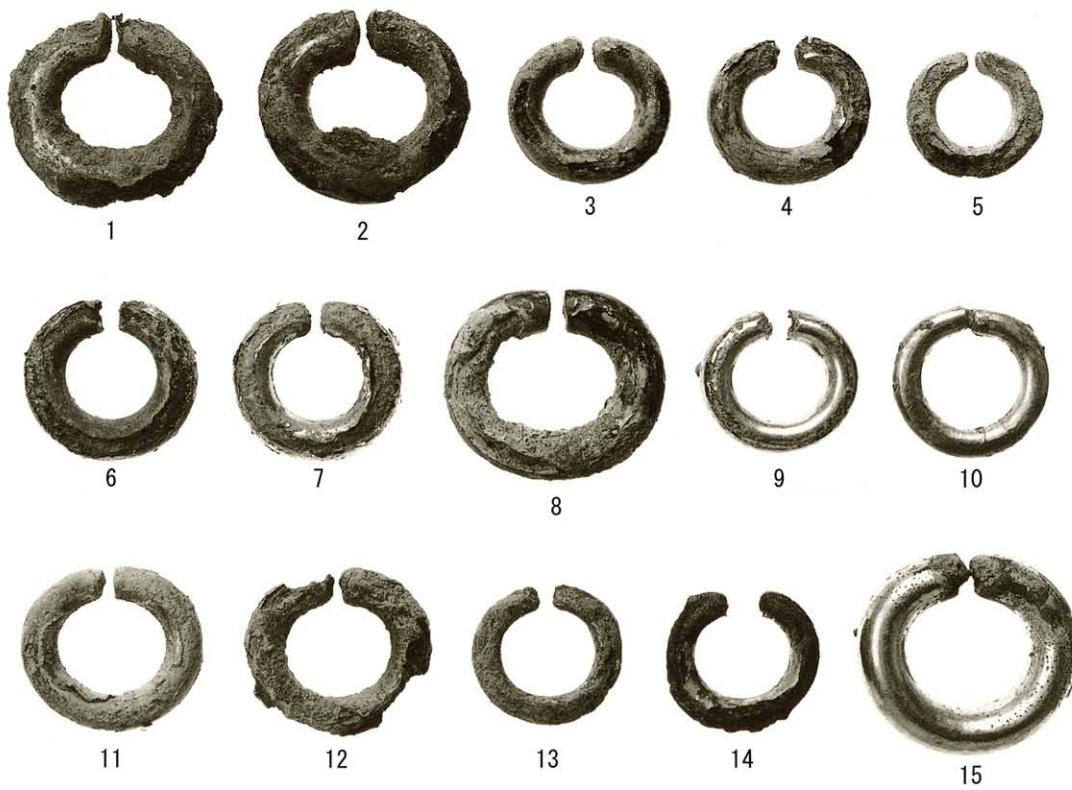
桑原西古墳群出土遺物：土壙墓（52～55・58・59）・A7号墳墓道（60）



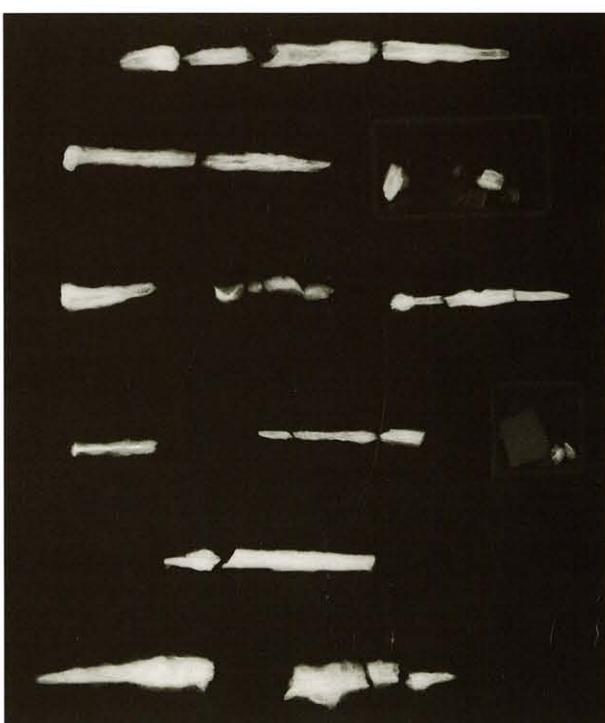
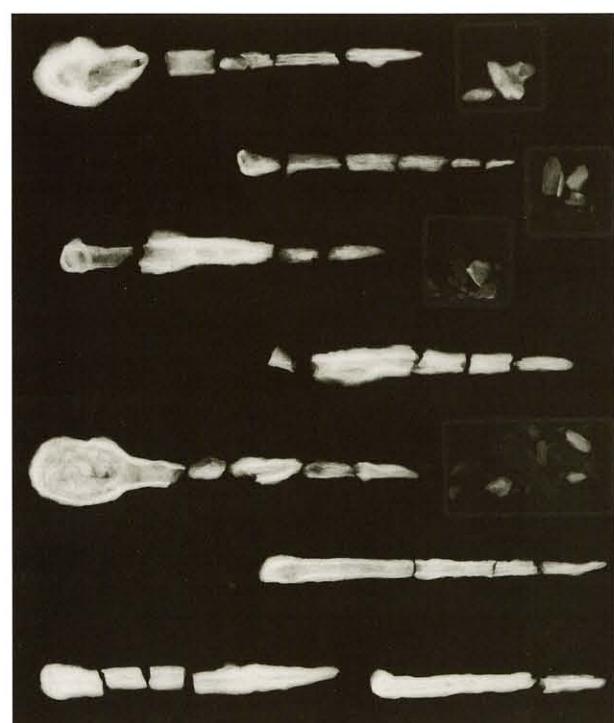
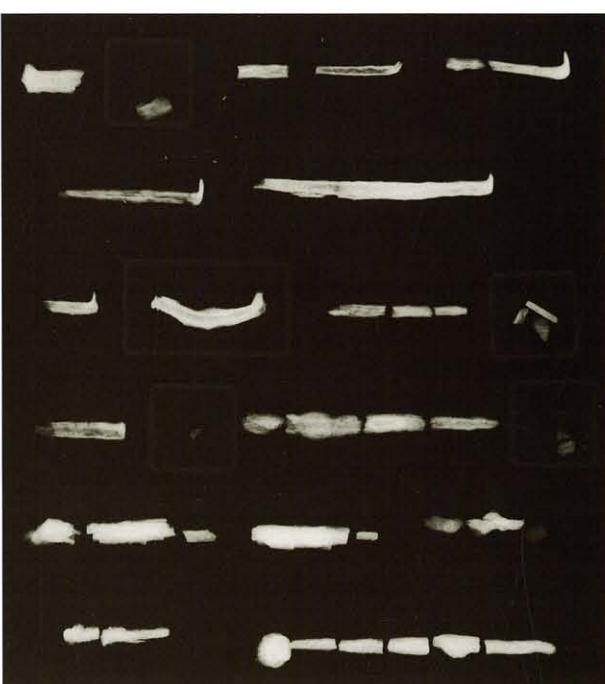
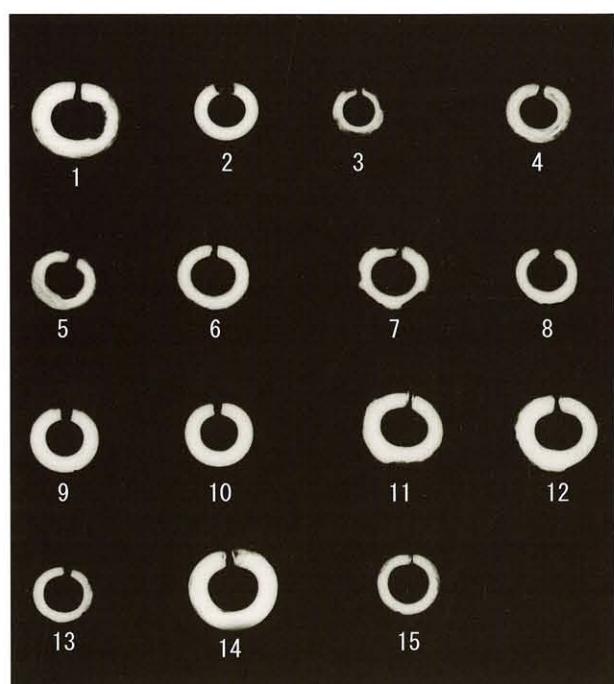
A 3号墳出土陶棺



A 3号墳出土陶棺



出土耳環



Osaka Prefecture Buried Cultural Property Report Series 2007-4

Kuwano-hara Site

An excavation report of the Kuwanohara District
for the construction of Aigawa-River Dam

March, 2008

Osaka Prefectural Board of Education